

高知県

# 岡豊城跡Ⅱ

— 第6次 発掘調査報告書 —

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





四ノ段北部T区



四ノ段北部T区出土染付



# 岡 豊 城 跡 II

— 第 6 次 発掘調査報告書 —

1 9 9 2 ・ 3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

岡豊城跡は長宗我部氏の居城として、広く知られている城跡です。同城跡の発掘調査は、高知県立歴史民俗資料館建設に伴い、中世城跡としての整備を進めるために、国庫補助事業として昭和60年度から平成元年度にかけての5ヶ年にわたり行われました。その結果、詰における天守の前身とみられる礎石建物跡をはじめとする詰下段、三ノ段の礎石建物跡群や階段状遺構が発見され、岡豊城跡の構造を解明する手懸りを得ることができました。また、多量に出土した土師質土器、染付を中心とする輸入陶磁器や備前等の国産陶器、多種多様な金属製品と石製品からは当時の岡豊城跡における長宗我部氏の生活の一端を垣間見ることもできました。平成元年度には、これら第1～5次にわたる調査の結果を報告書にまとめ刊行いたしました。

さて、今回はこれまで未調査であった四ノ段西部を対象として調査が行われました。虎口とそれに続く四ノ段は、岡豊城跡の中でも特徴的な曲輪であり、その構造を知ることは整備を行ううえでも欠くことができませんでした。調査は平成2年度の県事業として整備と一部並行し実施され、新たな発見がありました。平成3年度には整理作業、報告書作成が行われ、現地も城跡としての整備を完了し、県立歴史民俗資料館とともに活用されているところです。

本書が、今後の中世城跡研究の資料として広く活用していただくことにより、埋蔵文化財への理解を深め、その保護、保存の一助となれば幸いです。最後になりましたが、岡豊城跡の発掘調査は地元の方々をはじめとして多くの方々の御協力により完了することができました。関係各位の皆様には、記して感謝する次第です。

1992年3月

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小橋一民





# 例 言

1. 本書は、高知県立歴史民俗資料館建設整備事業に伴う「県史跡岡豊城跡」の第6次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、県史跡としての整備を目的として県単事業により実施された。なお、第1～5次調査は国庫補助事業として、昭和60～平成元年度にかけて行われている。
3. 調査主体は高知県教育委員会であり、四ノ段を対象として実施された。調査期間は平成2年6月11日～7月30日であり、調査面積は360㎡である。発掘調査は調査員として森田尚宏・山下英雄（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）が担当し、調査補助員として吉成承三が参加した。
4. 整理作業及び報告書作成は、平成3年度に高知県の委託を受け(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターがこれを実施した。
5. 本書の執筆、編集は森田尚宏（(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第二係長）が行った。
6. 調査区の名称及び遺構番号については、第1～5次調査からの継続番号とした。また、城跡の各曲輪の名称についても第1～5次調査報告書と同様に詰、二ノ段、三ノ段、四ノ段の呼称を用いた。
7. 水準高は詰に存在する三角点の標高97.00mを基準として用いた。調査区の設定は任意であるが、測量結果は公共座標第Ⅳ系に転換している。
8. 調査にあたっては、地元八幡地区をはじめとし多くの方々の御協力をいただいた。また、報告書作成においては高知県教育委員会文化振興課及び(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏の協力を得た。記して感謝する次第である。
9. 出土遺物等の資料は、(財)高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。なお、遺物の注記は第6次調査としてOK6としている。

## 報告書要約

1. 遺跡名 岡豊城跡 遺跡番号 040084 地図番号 No.15-65 (香美・長岡ブロック)
2. 所在地 高知県南国市岡豊町八幡1099他 (岡豊山)
3. 立地 香長平野北部の独立丘陵 標高97m
4. 種類 戦国時代 山城跡
5. 調査主体 高知県教育委員会
6. 調査契機 高知県立歴史民俗資料館建設に伴う岡豊城跡整備
7. 調査期間 平成2年6月11日～7月30日
8. 調査面積 360㎡
9. 検出遺構 礎石建物跡1棟 礎石列2列 土坑1基 集石1基 円形粘土遺構1基 土塁及び裾石
10. 出土遺物  
土師質土器 小皿・皿・小杯・杯・鍋・鉢・火鉢  
輸入陶磁器 青磁・白磁・染付  
国産陶器 備前・常滑・瀬戸・美濃系  
土製品 土錘・羽口・埴塙・瓦・土製犬  
金属製品 引き手金具・鎧飾金具・弾丸・火挾・鑿状工具・鉄釘・針状製品・円錐状製品・古銭  
石製品 砥石
11. 内容要約 岡豊城跡は長宗我部氏の居城として著名な中世城跡であり、高知県立歴史民俗資料館の建設に伴う整備のため事前の発掘調査が実施された。今回の調査は第6次であり虎口の南北に位置する四ノ段を対象とした。四ノ段北部では、礎石、土坑、集石、円形粘土遺構、土塁、裾石等が検出された。礎石は、配置に疑問が残るが礎石建物跡1棟と礎石列2列となり、円形粘土遺構は土依状を呈する。土塁は裾部に2段以上の石積みをもち、四ノ段南部の土塁も同様である。南部の平場は表土下に岩盤が出ており、遺構は検出されなかった。  
遺物は多量の土師質土器を中心に、輸入陶磁器では染付が最も多く、次いで白磁、青磁がみられる。国産陶器は備前が多く、常滑、瀬戸・美濃系も存在する。金属製品には、城跡を特徴づけるように火繩銃の弾丸、火挾、鎧の飾金具等が出土しており注目される。

# 本文目次

I	調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	2
III	調査の概要	4
IV	遺構	11
V	遺物	18
1	土師質土器	18
2	輸入陶磁器	20
3	国産陶器	22
4	土製品	23
5	金属製品	23
6	石製品	24
7	出土銭	24
VI	まとめ	25
1	遺構	25
2	遺物	26

## 挿 図 目 次

Fig. 1	岡豊城跡位置図	1	Fig.16	土師質土器 3 (小杯・杯)	51
Fig. 2	周辺遺跡分布図	3	Fig.17	〃 4 (杯)	52
Fig. 3	岡豊城跡地形図	4	Fig.18	〃 5 (〃)	53
Fig. 4	調査区設定図	5	Fig.19	〃 6 (〃)	54
Fig. 5	T区グリッド設定図	6	Fig.20	〃 7 (〃)	55
Fig. 6	T区セクション図	8	Fig.21	〃 8 (〃)・青磁	56
Fig. 7	主郭部遺構全体図	10	Fig.22	白磁・染付 1	57
Fig. 8	S B 5	12	Fig.23	染付 2	58
Fig. 9	T区遺構全体図	13	Fig.24	〃 3	59
Fig.10	S A 1・2	15	Fig.25	〃 4・瀬戸、美濃系・備前 1	60
Fig.11	四ノ段南部郭W区	16	Fig.26	備前 2・常滑・土師質土器	61
Fig.12	S X 4	16	Fig.27	土師質土器・瓦・羽口・埴塙・土製犬	62
Fig.13	四ノ段南部郭U・V区	17			
Fig.14	土師質土器 1 (皿)	49	Fig.28	土錘・金属製品 1	63
Fig.15	〃 2 (小皿・皿)	50	Fig.29	金属製品 2・砥石・出土銭	64

## 表 目 次

Tab. 1	出土土器法量表 1	28	Tab.12	出土土器法量表12	39
Tab. 2	〃 2	29	Tab.13	〃 13	40
Tab. 3	〃 3	30	Tab.14	〃 14	41
Tab. 4	〃 4	31	Tab.15	〃 15	42
Tab. 5	〃 5	32	Tab.16	〃 16	43
Tab. 6	〃 6	33	Tab.17	〃 17	44
Tab. 7	〃 7	34	Tab.18	出土金属器計測表 1	45
Tab. 8	〃 8	35	Tab.19	〃 2	46
Tab. 9	〃 9	36	Tab.20	〃 3	47
Tab.10	〃 10	37	Tab.21	出土銭計測表	48
Tab.11	〃 11	38			

## 写真図版目次

- |          |                   |          |                      |
|----------|-------------------|----------|----------------------|
| P L . 1  | 遠景 (東より)          | P L . 18 | V区全景                 |
|          | 〃 (南より)           |          | W区全景                 |
| P L . 2  | T区調査前 (東より)       | P L . 19 | X区調査前 (北より)          |
|          | 〃 (北より)           |          | X区全景                 |
| P L . 3  | T区調査前 (北西より)      | P L . 20 | 土師質土器 1              |
|          | T区虎口部 (南より)       | P L . 21 | 〃    2               |
| P L . 4  | T 8区調査状況          | P L . 22 | 〃    3               |
|          | T 9区調査状況          | P L . 23 | 〃    4               |
| P L . 5  | T 11区土塁石積み (東より)  | P L . 24 | 〃    5               |
|          | 〃 (南より)           | P L . 25 | 〃    6               |
| P L . 6  | T区拡張前調査区全景 (南西より) | P L . 26 | 〃    7               |
|          | 〃 (東より)           | P L . 27 | 〃    8               |
| P L . 7  | T 1区拡張前東壁セクション    | P L . 28 | 〃    9・天目茶碗・備前・      |
|          | T 1区拡張前東壁土師質土器出土  |          | 火鉢・埴塼                |
|          | 状態                | P L . 29 | 青磁 1 (外面)            |
| P L . 8  | 調査区全景 (東より)       |          | 〃 (内面)               |
|          | 〃 (南東より)          | P L . 30 | 白磁 1 (外面)            |
| P L . 9  | 調査区全景 (北より)       |          | 〃 (内面)               |
|          | 〃 (北西より)          | P L . 31 | 染付 1 (外面)            |
| P L . 10 | T 1・2区東壁セクション     |          | 〃 (内面)               |
|          | T 1区北壁セクション       | P L . 32 | 〃 2 (外面)             |
| P L . 11 | S X 1 検出状態        |          | 〃 (内面)               |
|          | S X 1 全景          | P L . 33 | 〃 3 (外面)             |
| P L . 12 | S X 1 断割状態        |          | 〃 (内面)               |
|          | S X 1 断面セクション     | P L . 34 | 〃 4・施釉陶器 (外面)        |
| P L . 13 | 遺物出土状態 1          |          | 〃    〃 (内面)          |
| P L . 14 | 〃    2            | P L . 35 | 天目茶碗・瀬戸・美濃系皿・備前 (外面) |
| P L . 15 | 〃    3            |          | 〃 (内面)               |
| P L . 16 | 四ノ段南部郭調査前 (南より)   | P L . 36 | 備前・常滑 (外面)           |
|          | 四ノ段南部郭虎口部 (東より)   |          | 〃 (内面)               |
| P L . 17 | U区全景              | P L . 37 | 土師質土器鍋・鉢 (外面)        |
|          | U区北壁セクション         |          | 〃 (内面)               |

- |         |           |   |         |                |
|---------|-----------|---|---------|----------------|
| P L .38 | 土鍤        |   | P L .44 | 染付 8 (外面)      |
|         | 金属製品 1    |   |         | ◇ (内面)         |
| P L .39 | ◇         | 2 | P L .45 | 染付 9・白磁 2 (外面) |
|         | ◇         | 3 |         | ◇ (内面)         |
| P L .40 | ◇         | 4 | P L .46 | 白磁 3 (外面)      |
|         | 出土銭       |   |         | ◇ (内面)         |
| P L .41 | 染付 5 (外面) |   | P L .47 | ◇ 4 (外面)       |
|         | ◇ (内面)    |   |         | ◇ (内面)         |
| P L .42 | ◇ 6 (外面)  |   | P L .48 | 青磁 2・天目茶碗 (外面) |
|         | ◇ (内面)    |   |         | ◇ (内面)         |
| P L .43 | ◇ 7 (外面)  |   | P L .49 | 羽口・土製犬         |
|         | ◇ (内面)    |   |         |                |

## I 調査に至る経過

岡豊城跡の発掘調査は、県立歴史民俗資料館建設に伴う周辺環境整備事業の一環として行われた県史跡整備に先立つ確認調査として実施された。発掘調査自体は、当初、昭和60年度から3ヶ年計画の国庫補助事業として開始された。調査は詰より二ノ段、三ノ段と順次進められ、詰では石敷遺構とこれに接続する礎石建物跡や渡来銭埋納ピット等の重要な遺構が発見された。また、出土遺物も多量の土師質土器とともに、青磁、白磁、染付等の輸入陶磁器がみられ、城跡としての遺存状態は、現況での観察よりもはるかに良好であることが判明したために、調査を2年延長し、5ヶ年計画とした。その結果、三ノ段からも礎石建物跡や詰との間の階段遺構、土塁内側の石積み等の新たな注目すべき遺構が検出され、岡豊城跡の重要性が再確認された。

以上の結果をもとに整備計画が策定された。整備は、原則として城跡としての現状を変更することなく、崩壊部分等については補修を行い、適切な伐開と植栽により保存を進めることとなった。同時に、検出された礎石建物跡、階段遺構、土塁とその内側石積みについては、保護のため盛土を行った後に検出状態を見ることができるよう復元することとした。しかしながら、四ノ段と虎口部分については未調査であり、いかなる遺構が存在するのか不明であるため整備を進めるうえで問題となった。特に四ノ段北部の方形郭は虎口と一体となる重要な郭であり、岡豊城跡の全体像を知るためにも調査が必要と考えられた。そのため今回は、急埴県が調査主体となり、整備のための基礎資料を得るために四ノ段の調査を行い、遺構、遺物の確認をすることとなった。

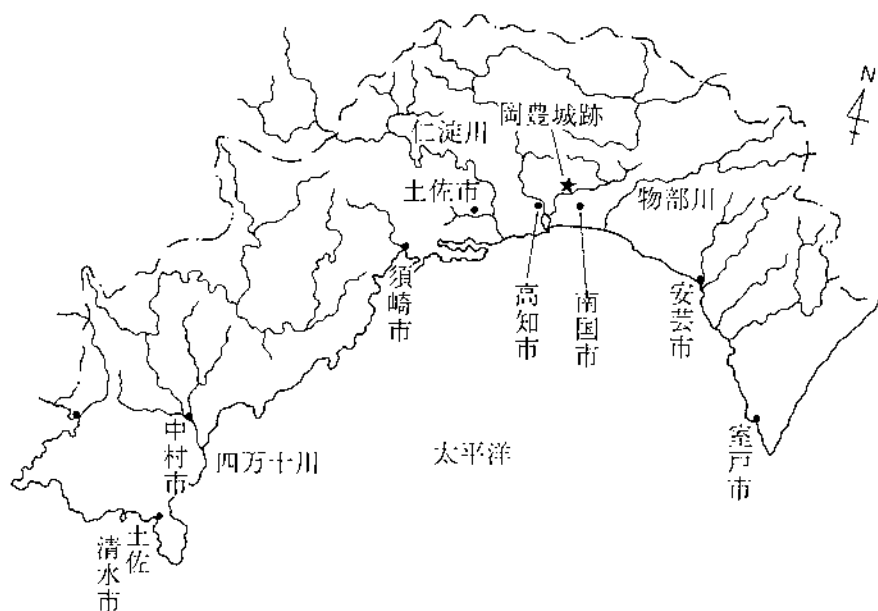


Fig. 1 岡豊城跡位置図

## Ⅱ 位置と歴史的環境

### 1. 位置

高知県の中央部に広がる高知平野は、県内では最大の平野部であり、物部川による扇状地と三角州によって形成される香長平野と国分川や鏡川による狭義の高知平野からなっている。高知平野は、高知市周辺を除けば現在も水田とビニールハウスによる各種野菜等の促成栽培の盛んな田園地帯である。中でも香長平野の大半は南国市域に含まれており、古来より開発の進んだ土佐の先進地域であった。平野部には、陣山、三畠山、坂折山、吾岡山などの孤立丘陵が点在しており、岡豊城跡の所在する岡豊山も北部の山塊から派生した丘陵であり、蛇紋岩からなっている。岡豊山の頂部は標高97mを測り、西には鞍部を隔て標高70mと49mの小丘陵が続き、終っている。北には3本の小尾根が派生するが、東及び南斜面には小規模な谷がみられるが大きな変化はなく、急峻な斜面を呈している。また、南斜面の裾には東より国分川が流れており、周辺を取り巻く湿田とともに、岡豊城跡を護る要害となっていたのであろう。

### 2. 歴史的環境

高知平野は、土佐の歴史を知るうえで最も重要な地域であり、山内氏入国後、高知城が築城され土佐藩の中心となるまでは、香長平野を中心とした高知県の歴史をみることができる。

最も古い時代のものとしては、高知市介良の高間原1号墳の玄室床面敷石中からチャート製の細石核が発見されており、旧石器時代の遺跡自体は未確認であるが、今後、資料の増加が期待される。縄文時代では、後期の遺跡は発見されているが、中期以前と晩期については未発見であり、不明な点が多い。後期の遺跡は、北部の山麓部に多く発見されているが、田村遺跡群においては標高6m前後を測る低地に立地している。弥生時代になると遺跡数が急増する。前期初頭の集落が田村遺跡群で発見されており、以後、後期前半まで拠点集落として継続したようである。前期後半になると分村が進み、さらに平野部だけではなく山間部へも拡散する。後期後半では、田村遺跡群は放棄され、長岡台地上にひびのき遺跡・東崎遺跡等の大規模な集落が営まれ、古墳時代へと継続する。古墳時代には、舟岩古墳群に代表される後期群集墳等が山麓部に築かれるが、弥生～古墳時代に出現した長岡台地上の中心的集落は廃絶し、新たな立地に展開する。古代には、土佐国府跡、土佐国分寺跡、比江廃寺跡等の主要な遺跡が所在しており、物部川の水利と香長平野の生産力の高さを裏付けとした発展をみることができる。中世においては、14世紀末に守護代細川氏の入国に伴い、その居館とされる田村城跡を中心とした動きがあり、16世紀に入れば当岡豊城跡を居城とした長宗我部氏の活躍とともに、土佐も戦国時代へと突入する。長宗我部氏は細川氏の被官として当初勢力を延ばしたが、一時は周囲から攻められ、岡豊城も落城するなど衰退した。しかし、16世紀中頃には再び勢力を得て土佐一国を統一し、さらには四国をも制覇する。この間の居城は岡豊城であり、以後、大高坂城を経て浦戸城へと移転している。





番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	岡豊城跡	中世		20	中内土居城跡	〃		39	教居土居城跡	〃	消滅
2	改田城跡	〃		21	大津城跡	〃		40	片山土居城跡	〃	
3	久次土居城跡	〃		22	八頭城跡	〃		41	千屋城跡	〃	
4	榎田土居城跡	〃		23	金山城跡	〃		42	田村城跡	〃	
5	中ノ土居城跡	〃	消滅	24	一宮城跡	〃	消滅	43	八木土居城跡	〃	
6	沖ノ土居城跡	〃	〃	25	一宮別城跡	〃	〃	44	野田土居城跡	〃	消滅
7	三皇城跡	〃	〃	26	薊野城跡	〃		45	徳弘土居城跡	〃	〃
8	比江山城跡	〃		27	久礼野城跡	〃		46	立田城跡	〃	〃
9	新城城跡	〃		28	田辺島城跡	〃	消滅	47	廣井土居城跡	〃	〃
10	豊永土居城跡	〃		29	鎌島城跡	〃	〃	48	上野田土居城跡	〃	
11	池尻古城跡	〃		30	花懸城跡	中世		49	包末土居城跡	〃	
12	西村土居城跡	〃		31	下田土居城跡	〃		50	包地土居城跡	〃	
13	谷土居城跡	〃	消滅	32	鶴森城跡	〃		51	岩村土居城跡	〃	
14	石谷土居城跡	〃		33	中ノ城跡	〃	消滅	52	舟石古墳群	古墳	
15	小野古城跡	〃		34	栗山城跡	〃		53	上佐国分寺跡	奈良・平安	国史跡
16	小野土居城跡	〃	消滅	35	細川土居城跡	〃		54	土佐国府跡	〃	国史跡
17	吉田土居城跡	〃		36	池城跡	〃		55	比江庵寺跡	白鳳・奈良	国史跡
18	小籠土居城跡	〃	消滅	37	三ツ城跡	〃		56	東崎遺跡	弥生・古墳	
19	中島土居城跡	〃	〃	38	里改日土居城跡	〃		57	田村遺跡群	縄文・近世	

Fig. 2 周辺遺跡分布図

### Ⅲ 調査の概要

#### 1. 岡豊城跡の概要

岡豊城跡は、標高97mを測る岡豊山の頂部を中心に築造された城跡であり、長宗我部氏の居城としてその名を知られているが、その築城年代等、詳細については不明である。城跡は、山頂部を主郭部として、曲輪、土塁、堀等を配し、西方の鞍部を隔てた標高約70mの頂部にも曲輪、堀切がみられ、伝庭跡曲輪と呼称されている。また、南斜面の下方には、標高約40mを測る伝家老屋敷曲輪と呼ばれる平場が存在しており、主郭部を中心として西に伝庭跡曲輪、南に伝家老屋敷曲輪の二ヶ所の副郭を持つ連立式の山城とされる。主郭部は、中心となる詰が山頂部に位置し、東に堀切を隔て二ノ段、詰の東に付属する詰下段、詰の南から西にかけて帯状に廻る三ノ段、さらに三ノ段の西下には虎口を形成する四ノ段が存在する。四ノ段下方斜面には、北から西にかけて横堀と土塁が廻り、また、西斜面を中心に南及び北斜面にかけて縦堀群がみられる。縦堀群は、伝庭跡曲輪の南斜面においても存在しており、岡豊城跡の主要な防禦施設のひとつである。主郭部から北へ延びる尾根上、伝庭跡曲輪の西側と主郭部との鞍部には、

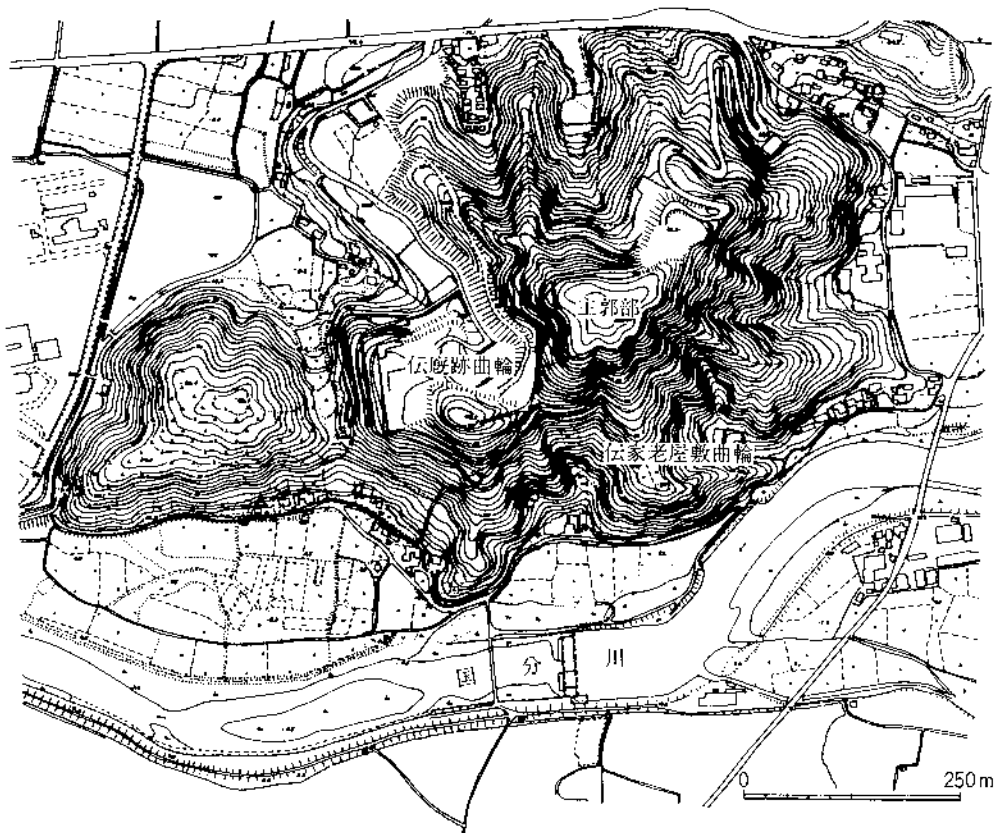


Fig. 3 岡豊城跡地形図



岡城跡平面図



Fig. 4 調査区設定図

二重の堀切が施され、防禦を固めている。調査前の状況からみれば、土塁、空堀を主たる防禦施設として構築された城跡であり、虎口部分から四ノ段北部郭の築造には、より発展的な要素を窺い知ることができるが、基本的には中世の山城としての構造を残すと考えられる。また、調査の結果、検出された遺構からも、より近世城郭に接近する要素はあるものの、岡豊山という立地の中では、中世山城としての限界を越えることはできなかったようである。

## 2. 調査の方法

岡豊城跡の発掘調査については、当初に詰に存在する三角点を基準点として、二ノ段東先端部を通過するラインを基準線とするグリッドを展開した。グリッドの基準線は、真北に対し50°東へ振っている。グリッドは100m、20m、4mの大、中、小3種からなり、100mグリッドは南北をアルファベット、東西はアラビア数字により呼称した。20m及び4mグリッドは北西から南東へ1～25の番号により表示した。詰及び二ノ段はグリッドを基準としたトレンチにより調査を進めることができたが、三ノ段、四ノ段については各曲輪の条件により任意のトレンチを設定し、測量を行った後に全体をグリッドに変換した。今回の四ノ段北部郭では、第4次調査で試掘トレンチを設定したラインを基準として、調査を進めることとした。また、調査区の名称としては、第1次調査からアルファベットにより順次つけており、第6次調査は四ノ段北部郭を「T区」、四ノ段南部郭の各トレンチを「U～X区」と呼称した。

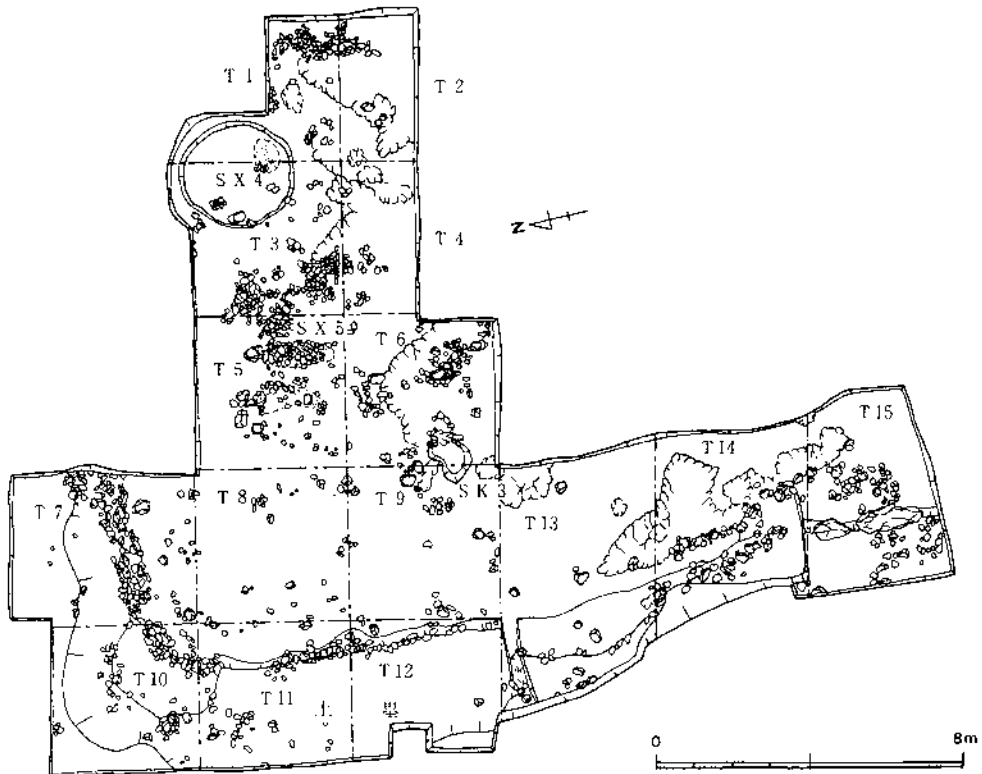


Fig. 5 T区グリッド設定図

なお、調査期間は平成2年6月11日から7月30日の間であり、調査面積は、T区（四ノ段北部郭）235㎡、U区24㎡、V区15㎡、W区20㎡、X区66㎡（四ノ段南部郭）の合計360㎡であった。

### 3. 調査の概要

今回の調査は、先述したように岡豊城跡の整備に先立つ事前の確認調査であり、第6次調査となるものである。調査対象地は、第4次調査において試掘トレンチから礎石と考えられる割石や遺物包含層が確認された四ノ段北部郭であり、虎口から南の四ノ段南部郭も土塁が残されており、遺構確認のために調査が実施された。

四ノ段は、詰の西部から南部にかけて廻る三ノ段の西部を囲むように築造された曲輪であり、中央部に位置する虎口により南北に二分されている。四ノ段北部郭は、三ノ段の終る北西部から西方へ張り出したほぼ方形の曲輪であり、約12×15mの広さを持っている。標高は約89.8m前後を測り、三ノ段との比高差は4mを測る。虎口部から三ノ段への通路は緩やかな斜面となっており、現況では階段等の施設は確認されていない。北部郭の北辺から西辺にかけては、高さ1.5～2m、上面幅約1.5mの土塁により構築されており、土塁の南端部約12mほどがやや東へ屈曲され、虎口の北壁をなしている。虎口の南壁は、やはり四ノ段南部の土塁北端部を約5mほど東へ直角に屈曲させ築造されている。四ノ段南部郭は、南北約32m、東西約16mを測り、南へと狭くなる三角形を呈する。標高は約87mを測り、北郭部に比して約2.8mほど低い。土塁は西辺にみられ、高さ約1m、上面幅約1mを測る。土塁の南端部は、さらに下部に位置する小曲輪（四ノ段南西部）への通路により切られている。虎口は西方から入り、三ノ段斜面に突き当たった後に北へ折れ、四ノ段の北部郭へと入る。さらに、三ノ段斜面から5mほど突出した土塁に当り、西から東へと廻り、三ノ段へと登っている。

調査は四ノ段北部郭から開始された。第4次調査の試掘トレンチが設定された北西部を中心として、一部土塁と三ノ段への斜面部に7ヶ所のグリッド（T1・3・5～9）を設定し、進められた。各グリッドにベルトを残し、表土以下を掘り下げた結果、以下の基本層序が確認された。

第1層は表土であり、表土下には第2層として過去の公園化時に盛土された砂利層が存在する。一部には砂利層に黒褐色土の混在する第2a層がみられる。第3層は調査区全域にみられる茶褐色粘質土であり、土師質土器を中心として多量の遺物が包含されている。第4層は暗茶褐色粘質土であり、平坦面にはほぼ均一に堆積するが、土塁周辺には検出されない。第3層と同く遺物包含層である。第5層は地山である黄褐色粘質土であり、岩盤上に部分的に存在する。土塁部分では、斜面部に第3層が堆積するが、土塁自体は第5層の地山に類似する暗黄褐色土により築造されている。なお、土塁の断ち割りによる断面観察は、外側斜面が急傾斜であり、すでに一部自然崩壊していることから断念した。三ノ段へと登る斜面部（T1～4）では、

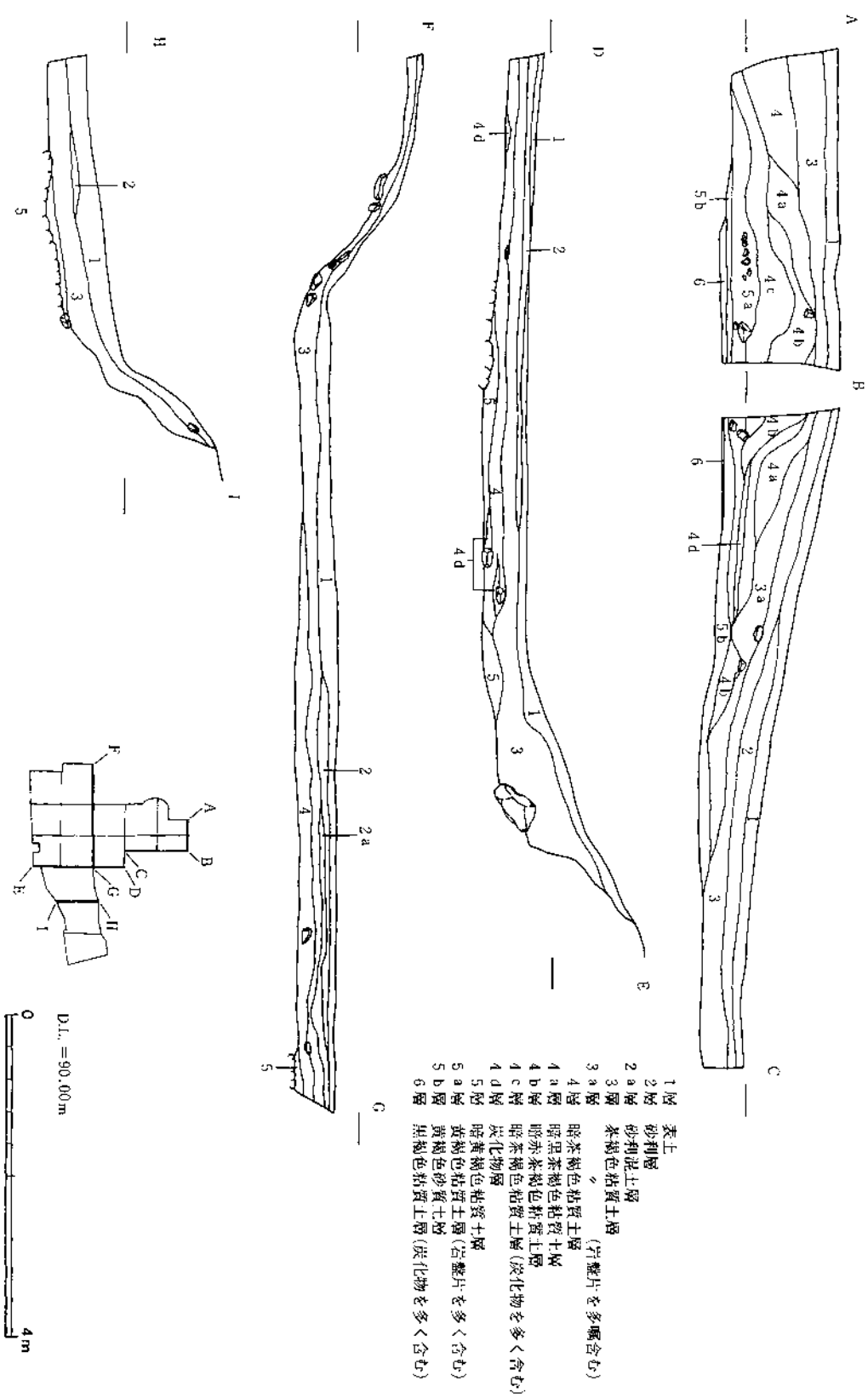


Fig. 6 T区セクション図

土層の堆積が厚く、第3層の下部には同層中に岩盤礫片を多く含む第3 a層が存在する。第4層についても色調変化による第4 a層暗黒茶褐色粘質土、第4 b層暗赤茶褐色粘質土がT 1・2区を中心に堆積しており、さらに第4 c層として暗茶褐色粘土中に炭化物を多く含む層序がみられる。第4 c層の下層には第5 a層として岩盤礫片からなる黄褐色土と第5 b層黄褐色砂質土が存在する。最下層としては第6層として炭化物を多量に含む黒褐色粘質土が岩盤上に堆積している。また、T 1区では第4 a層と第5 a層の間に第4 d層として炭化物層が間層としてみられる。第4 a～d、第5 a・b層中には多量の遺物が包含されており、今次調査の遺物の大半はT 1～4区からの出土である。

遺構としては、第4層中から礎石と考えられる割石を検出するとともに、T 3・5・6区では10～20cmの礫の集中（S X 5）が検出されており、炭化物を伴っている。土塁部のグリッドでは土塁裾部に10～30cmの礫がみられ、部分的には2段に積まれていることからみれば、詰の土塁等と同様に裾部の土留めとして数段の石積みがなされていたようである。特にコーナー部から北辺にかけての遺存状態は良好である。T 3区では、北東端部に黄褐色粘土を円形に固めた性格不明遺構（S X 4）が検出されている。

以上の結果から、西の土塁部分を虎口手前まで（T 10～15区）、遺物の多く出土したT 1・3区を南へ拡張（T 2・4区）、T 1・3区のS X 4も部分的に拡張し、最終的にはT 1～15の調査区として終了した。

四ノ段南部郭では、まず土塁の状況を確認するためにU～W区の3ヶ所のトレンチを設定し、調査を行った。各トレンチは土塁の頂部から裾部にかけて設定され、T区と同じく土塁裾部に10～30cmの礫が検出された。また、平担部の状況を確認するためにX区を設定し、調査を進めたが、表土直下はすべて岩盤であり、遺構、遺物は検出されなかった。以上をもって第6次調査を終了した。



圖 豐城跡平面圖

Fig. 7 主郭部遺構全体圖



## IV 遺 構

第6次調査で検出された遺構は、T区においては礎石建物跡、礎石列、土坑、土塁石積み、集石、性格不明遺構であり、U～W区では土塁の石積みのみであったが、遺構の遺存状態はあまり良好ではなく、特に礎石建物については不明な点が多い。以下にT区、U～W区の各遺構について述べる。

### 1. T区

#### SB5

SB5は、四ノ段北部郭の西辺土塁に添って検出された礎石を中心として構成される礎石建物跡である。7個の礎石が確認されており北部3間は礎石間約1.8mを測り、南部3間は約1.5m前後を測る。礎石は20～40cmの偏平礫であり、第4層中において検出されている。土塁裾部との間は20～50cmときわめて狭く、東への広がりには3間と推定されるが、中間の礎石は欠落が多く断定できない。北部の2×3間を東西棟の建物と考えれば、棟方向はN-63°-Eを測る。礎石間の距離は西より1.8m、1.7m、2.7mであり、東側の礎石間のみ長くなっている。東辺の礎石は2間検出されており、礎石間は1.9mと2.1mを測る。南側には三ノ段より突出する土塁に当り、遮られるために2間以上の規模とは考え難い。また、SB5の存在する部分は虎口からの通路部にあたることから、四ノ段北部郭内の建物配置としては不適切な位置であり、その構造については検討しなければならない。西辺土塁に添って礎石が検出されることを考えれば、礎石建物跡以外の土塁に関連する施設の礎石である可能性も強い。

#### SA1

SA1とした遺構は、T3・5・8区において検出された礎石列である。礎石は5個、4間であり、礎石間の距離は1.8～2.0mを測る。礎石は30～40cmの偏平礫であり、西端の礎石は10～20cmの礫の集中からなっている。礎石列はSB5と同じく第4層中において検出されており、その方向はN-78°-Eを測り、SB5の方向との違いがみられる。

#### SA2

SA2とした遺構もSA1と同様に礎石列であり、T7・10区において検出されている。礎石は3個、2間であり、礎石間の距離は1.5mを測る。礎石は30～40cmの偏平礫であり、その方向はN-57°-Eを測る。検出位置は北辺の土塁裾部から20～50cmであり、SB5の礎石列と同じく土塁に添い、第3層中において検出されているが、高さはSB5・SA1とほぼ同レベルである。

#### SK3

SK3は、T6・9区にかかり検出されている。長径1.1m、短径0.4mの不定形であり、第4層下より掘り込まれる。東部及び下部は岩盤であり、断面形は楕円状を呈している。埋土は暗茶褐色粘土であり、第4層と同じ土層である。埋土中からは土師質土器片が出土しているが、出土量はあまり多くない。

## S X 4

S X 4 は、T 1・3 区において検出された円形の黄色粘土による盛土遺構である。直径は  $3 \times 2.8\text{m}$  を測り、やや凹凸はあるがほぼ円形を呈している。表面はほぼ水平であり、若干西と南へ低くなっている。表面上には、南東部に  $85 \times 65\text{cm}$  の楕円形の炭化物の集中がみられ、この炭化物の北西に一部かき  $40 \times 20\text{cm}$  の楕円形の焼土も検出されている。炭化物及び焼土ともに厚さは薄く、 $2 \sim 3\text{cm}$  を測るのみである。また、西部には礫が一部みられるが、表面上に乗っている状態からみれば直接関係するものではないであろう。円形の粘土盛土を 4 分割し、断面

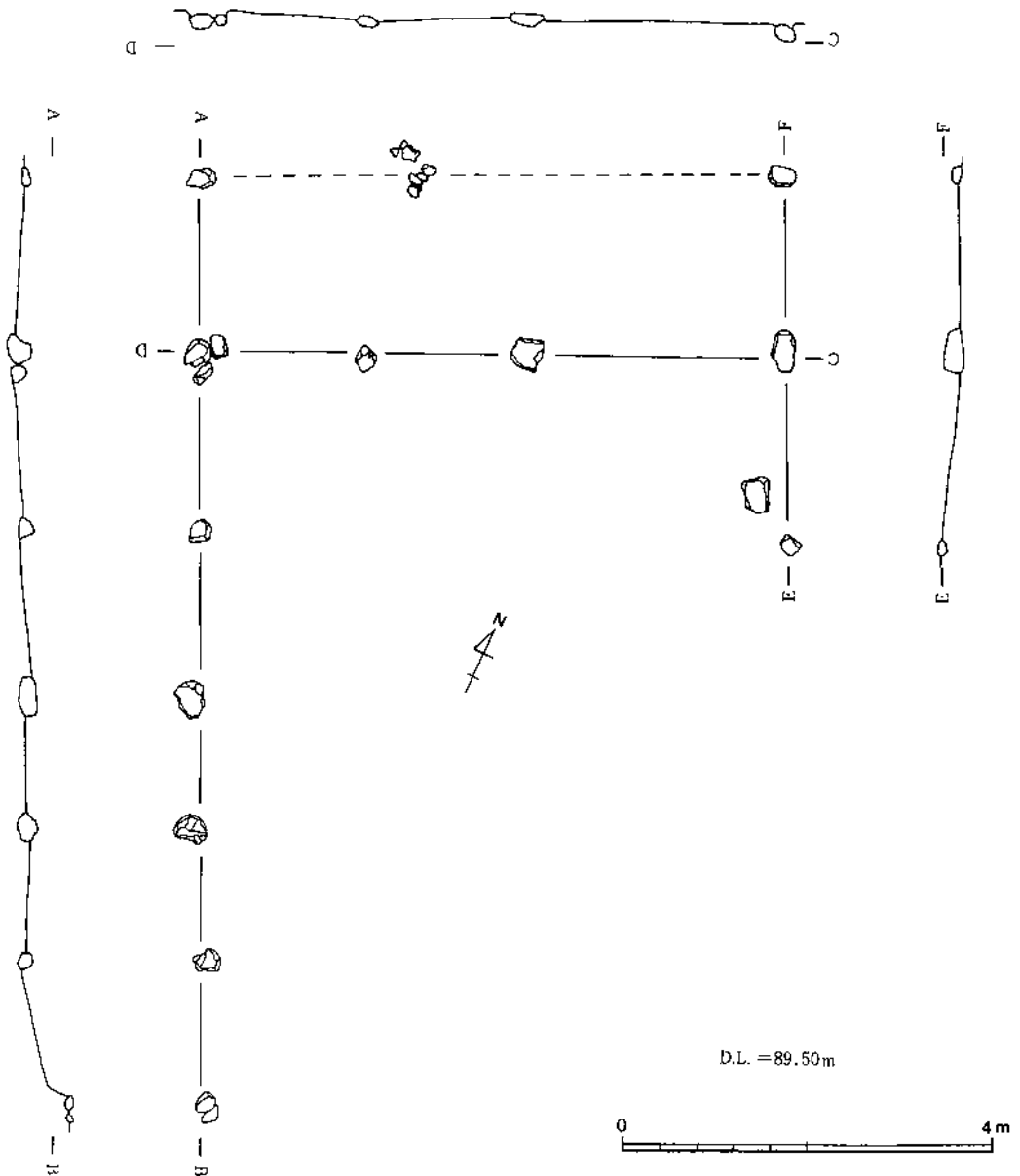


Fig. 8 S B 5



Fig. 9 T区遺構全体図



観察を行ったところ、上部は黄色粘土であるが、下部は暗茶褐色粘質土であり、多量の岩盤破片が含まれていた。上部の黄色粘土はきわめて均一な粘土であり、強く締っている。厚さはほぼ10cmであるが、東端部ではやや厚く15cmを測る。下部の暗茶褐色粘質土は第4層に類似する土層であり、約10cmの厚さを測り、やはりよく締っている。中央部では一部岩盤が出ているが周辺部は地山となっている。上部の黄色粘土中から遺物は出土しなかったが、下部の暗茶褐色粘質土中からは土師質土器片が少量ではあるが出土している。

### S X 5

S X 5は、T 3・4・5区で検出された集石である。集石は5~15cmの割石を中心とする礫であり、4×3mの範囲に1×2m前後のブロックとして分布している。集石の検出面は第4層上面であり、礫上のレベルはS A 1等の礎石と同じ高さである。集石の西部には2ヶ所の炭化物の分布が検出されている。炭化物の範囲は2×0.7mと1.5×0.5mであり、厚さは薄く約1cmほどであり、周辺部は特に薄くなっている。集石の性格は不明であるが、S A 1の礎石列の南部に位置することからみれば、なんらかの構造が考えられる。

### 土 壘

土壘は北辺の一部からコーナー部、西辺の虎口部手前までの内面側を検出した。土壘の規模は現況で確認できるものであり、表土である第1層及び第3層茶褐色粘質土の下部は、地山である第5層暗黄褐色土類似層により盛土、築造されている。土壘裾部の石積みは北辺部からコーナー部にかけて残されており、10~30cmの割石、礫が一部2段に積まれている。西辺は北半部に石列として残されているがほぼ一段であり、崩壊したとみられる割石が前面に散乱状態で検出されている。南半部の土壘裾部はかなり乱れているが、端部には全長1.8m及び1mの大岩を基礎として積んでいる。

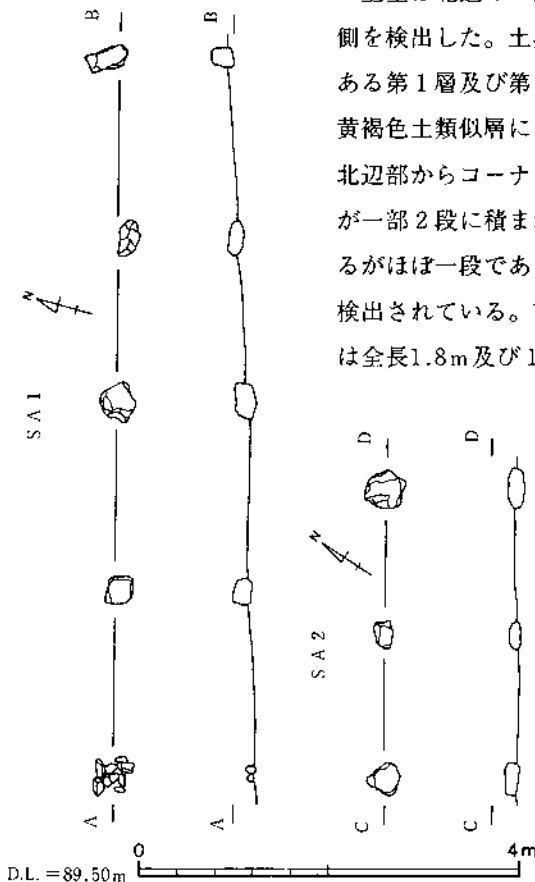


Fig. 10 SA1・2

### 2. U~X区

U・V・W区は四ノ段南部郭の土壘にかけて設定したトレンチであり、U区6×4m、V区5×4m（攪乱があり一部縮小）、W区は4×5mである。X区は平場に設定した3×22mのトレンチである。

U区は土壘の虎口部にあたる。土壘裾部に割石、礫が散在状態で検出されており、裾部の石積みは崩壊したものである。裾部の層序は、表土、植栽盛土の下に第3層茶褐色粘質土、第4層暗褐色粘質土がみられ、若干の土師質土器が

含まれている。割石は40~50cmとV・W区に比べ大形である。V区は土壘中央部であり、土壘裾部に30cm大の割石が並び前面には崩壊した割石が散在する。層序は表土下にU区と同じく第3・4層と第5層暗灰色がみられ、岩盤片を多く含んでいる。W区は土壘南部のトレンチであり、表土下に散在する割石が検出されている。土壘は各トレンチともに地山である黄褐色粘質土により築造されている。X区は表土下に全面岩盤が検出されており、平場は岩盤を大きく削り造り出されている。柱穴等の遺構は各トレンチともに検出されなかった。

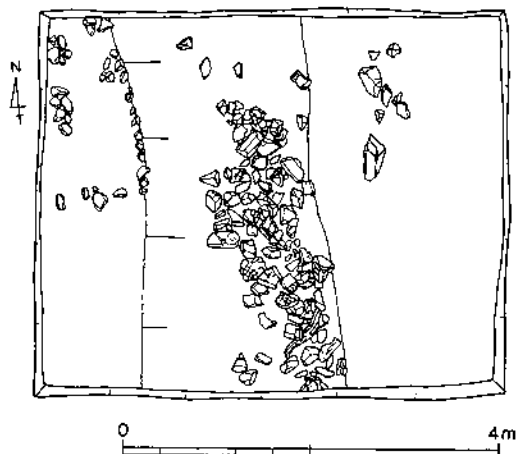


Fig. 11 四ノ段南部郭W区

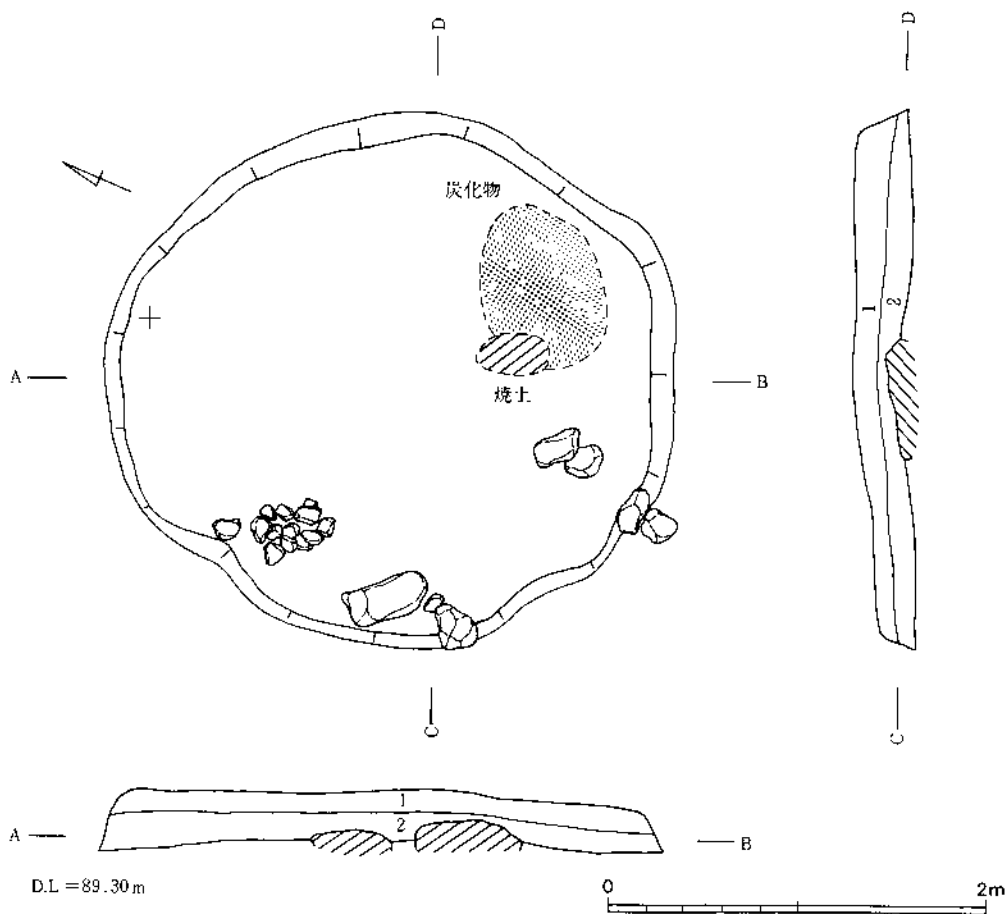
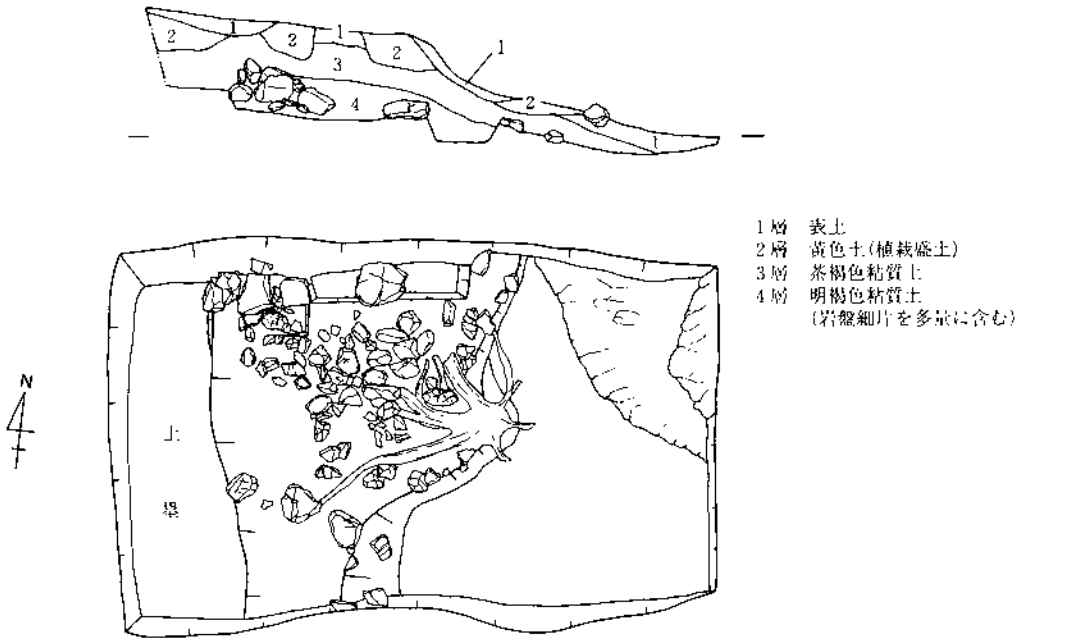
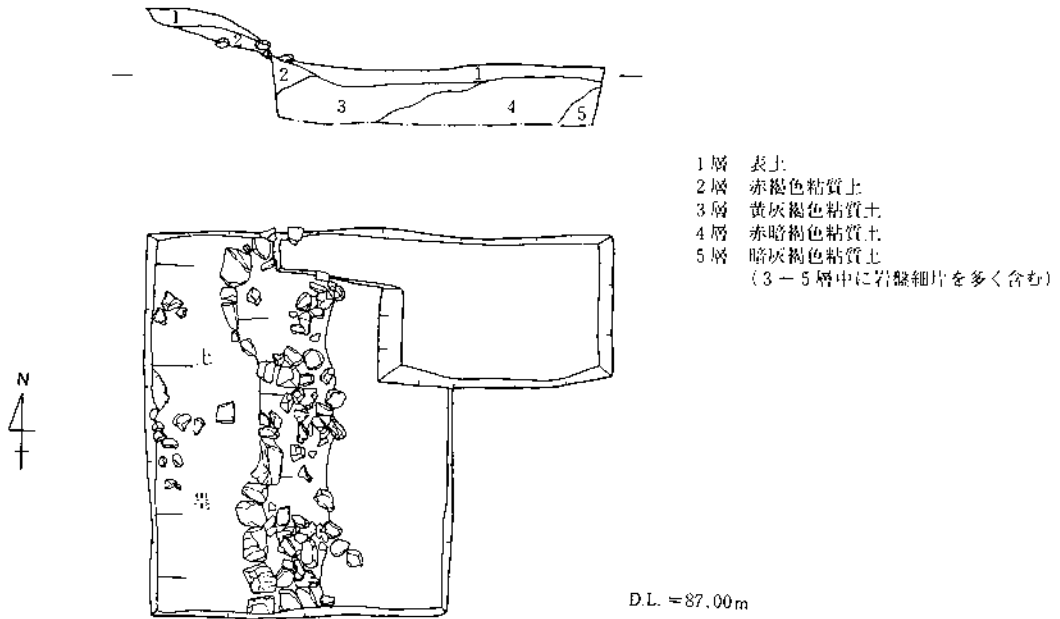


Fig. 12 S x 4



四ノ段南部郭U区



四ノ段南部郭V区

D.L. = 87.00m

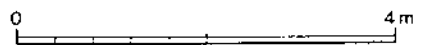


Fig. 13 四ノ段南部郭U・V区

## V 遺 物

岡豊城跡では、第1～5次調査においても約74,600点に及ぶ多量の遺物が出土しているが、今回の第6次調査においても35,530点が出土している。遺物には土師質土器を中心に、青磁、白磁、染付の輸入陶磁器、備前、瀬戸・美濃系、常滑の国産陶器、土錘、羽口、埴塙、瓦等の土製品、鉄釘、火箸、引手金具、飾金具、火挾、弾丸、古銭等の金属製品、石製品として砥石、その他スラグ、貝殻、歯（馬？）等も出土している。遺物のほとんどは四ノ段北部郭の調査区であるT区から出土しており、U～X区出土の遺物はきわめて少量であった。T区の遺物出土状況をみれば、各遺物ともにT1～4区から最も多く出土しており、次いでT5～9区に多く、T10～15区では遺物包含層も薄く、遺物の出土量は非常に少なくなっている。特にT1・2区における斜面部の堆積土中には完形の土師質土器杯をはじめとし、輸入陶磁器の出土量も圧倒的に多い。

遺物総数35,530点中、土師質土器が33,750点であり、全体の95%と大半を占めている。輸入陶磁器は415点であり、土師質土器に次いでその占める割合は高い。その内訳は染付235点（56%）、白磁131点（32%）、青磁49点（12%）であり、輸入陶磁器の過半数を染付が占めている。染付に次いで多いのは白磁であり、青磁は最も少量となっている。国産陶器では備前126点、瀬戸・美濃系32点、常滑1点であり、やはり備前の出土量が多い。その他注目される遺物としては埴塙、土製犬、火縄銃の火挾と考えられる金属製品、弾丸、飾金具、引手金具がみられる。以下に各遺物について、実測図として図示したものを中心に器種ごとに述べる。

### 1. 土師質土器

土師質土器は、小皿、皿、小杯、杯、鍋、鉢、火鉢等が出土している。小皿は量的に少なく4点であり、いずれも回転糸切り底を持つロクロ成形のものである。皿は75点であり、内52点は手づくね皿であり、23点がロクロ成形による皿である。小杯及び杯はすべてロクロ成形であり、杯は器形及び調整方法により分類される。小杯は14点であり、杯117点である。他の器種としては鍋3点、鉢3点、火鉢1点を図示するとともに器種不明の2点がみられる。

1～52は手づくね成形による皿であり、口径7.2～8.0cmのやや小形の皿1～10、口径8.4cm以上の皿11～52に分類される。口径8.4cm以上の皿は9～10cmのものが最も多く、中に47・50のような口径11cm以上を測るやや大振りな皿もみられる。器高は1.8～2.4cmの間に収まり、口径に比して変化は少ない。底面は平坦であり、体部は直立気味に立つものと、外方に開くものの二形態がみられ、口縁部は丸く納めるものが多いが、18のように強く外反するものもみられる。体部は底部に比べ厚く、口縁部が肥厚するものも多い。調整は体部から口縁部にかけて横ナデが施され、指頭圧痕を残すものは少ないが、小振りのものには口縁部のみナデ、体部に指頭圧痕を残すものが多くみられる。25・42の口縁部には煤の付着がみられ、42は内面にも芯



跡を示すように煤がみられる。また、50の外底面には、板状の圧痕が残されている。いずれも胎土は精選されており、色調は浅黄色からにぶい橙色である。焼成は比較的良好であるが、軟調なものが多く、かなり器表面が磨耗するものもみられる。

53～56の4点はロクロ成形による小皿であり、口径7～8cm、器高は2cm以下の法量をもつ。外底面には回転糸切り痕を残し、体部は内外面ともにロクロナデである。53は他の3点に比して器高が低く、体部がやや外反気味に大きく開き、形態に差がみられる。

57～79はロクロ成形の皿である。口径は8.8～20.4cmとかなりの差がみられ、口径10cm以下の57～62・64と、10～12cmの範中に収まる63・65～75、さらに口径14cm以上の大振りな皿76～79の3群に分類される。器高は2cm前後であり大きな変化はないが、57のように口径に対し器高の高いものも存在する。形態からみれば、口縁部が内湾する58～68と、直線的に開きやや外反する69～79の2種が存在する。58～61は法量もほぼ同じであり、体部も薄く同一の形態を取るものである。63・66・67の底部はわずかに厚く、高台状を呈する。大振りの皿も器高の低い76・77と器高も高く、法量も大きい78・79の2種がみられる。ロクロ成形の皿は胎土、焼成ともに良好であり、色調は橙色である。

80～93は小杯であり、すべてロクロ成形により底部に回転糸切り痕がみられる。口径は6～8cm、器高は1.8～2.7cmである。形態、調整からみれば、体部器壁の厚い88・89、口径に比して器高の高い91、耳皿状に体部を押し入れる92、体部が内湾気味に緩やかに立ち上る93、それ以外の80～87・90の5種が存在する。84・87は口縁部内面に煤が付着しており、燈明皿として使用されたものと考えられる。

94～209はロクロ成形の杯であり、一部磨耗するものもみられるがすべて回転糸切りである。口径は175・178の2点が14cm以上を測るが、他はすべて10～12cmの範中に収まる。また器高も2.4～4.2cmを測るが3cm前後のものが最も多く、法量的にはきわめて類似している。形態及び調整からみれば、94～180はロクロ目を顕著に残さず、体部の立ち上りも全般的にやや緩やかである。181～209は内面に強くロクロ目を残し、やや直線的に立ち上るものである。さらに、ロクロ目を残さないものの中でも94～113は器高が低く、やや皿に近い形態を取るものがみられる。特に95～103は糸切りによる底部が厚味をもつため高台状を呈し、体部は下部で一度屈曲し、口縁部へと外反する特徴をもつ一群である。104～106も体部下半で屈曲をもつものである。107～172・176・177・179は若干の内湾、外反の差はあるが、体部がほぼ直線的に開く形態をもつ。173・174・180は口径に比して器高の高いもので、内湾気味の体部をもつ。175・178は成形、調整は同じであるが、法量の大きいものである。109の口縁部内外面、135の内面には煤の付着がみられる。内面にロクロ目を残す杯181～209は体部が薄く、堅緻なもの、体部が厚く、やや軟質なものもみられる。また、器形では197のように底径は小さく、体部が大きく外方へ開くものと、203のように底径が大きくややコップ状を呈するものが存在する。184は内外面に煤が付着している。308は円盤状の脚台であり、底部は回転糸切り、内面にはロクロ目がみられる。

313・314は鍋であり、口縁下に退化した鏝の付くものである。316も鍋であるが、鏝は付かず、内湾する体部から口縁部をやや肥厚し終る。315・317・318は鉢である。315は内湾する体部をもち、317・318は直立する体部から口縁部は強く屈曲し終る。内外面に指頭圧痕を残し、一部に横ハケがみられる。植木鉢状の形態である。320は火鉢であり、板状の脚を3個もつ。内外面にはやや斜めの横ハケがみられる。325も円筒形を呈する火鉢の脚である。326は土師質土器を使用した埴塙であり、丸底を呈する。319・321は器形不明であり、319は盤状、321は円筒形である。

## 2. 輸入陶磁器

輸入陶磁器には、青磁、白磁、染付がみられる。量的には染付が最も多く、次いで白磁、青磁であり、青磁の占める割合は、詰、二ノ段、三ノ段に比して少ない傾向がみられる。

### 青 磁

211～213・223・224は皿である。211・212は口縁部が強く屈曲し開くものであり、内外面無文、211には貫入が入る。213は菊皿の口縁であり、内面は丸ノミ状工具により、外面は線彫りにより菊花を表わしている。223は削り出し高台をもつ底部である。高台から外底面にかけて橙色の化粧掛けが施され、見込みは蛇目釉剥ぎである。224も削り出し高台であり、高台外面まで施釉され、畳付から外底面は露胎である。見込みはやはり蛇目釉剥ぎが行われ、全面に貫入が入る。

214～222は碗である。214～216は連弁文がみられ、214は剣先細連弁文であるが、剣先は波状となり、乱れを生じている。215・216はともに沈線による連弁文であるが、浅く不明瞭である。214・215には貫入が入る。217の外面には横方向の沈線による文様がみられるが不明である。218は無文の口縁部であり丸く肥厚する。219～222は底部である。219の見込みには「吉」とそれを中心とする菊花が浅くみられ、削り出し高台である。施釉は高台内面まで行われ、内外面に貫入が入る。220は高台外面まで施釉、221は高台外面から一部外底面まで施釉され、全面に貫入が入る。222は高台外面まで施釉され、畳付は外傾し削られており器底厚は非常に厚い。225は盤の口縁部であり、水平に近く屈曲し、端部は上方へ拡張する。内面には非常に浅いが花卉を表わす彫り込みがみられる。226は直立する口縁部であり、内面の下方は無釉とみられる。口径からも香炉の口縁と考えられる。以上の青磁の中で219・221・223・224の釉調は黄褐色を呈し、貫入が入る。胎土も黄白色の質の悪いものが特徴的にみられる。

### 白 磁

227～238はすべて端反りの皿である。口径は10～12cmの227～235と13cm以上と大振りの236・237の2種がみられ、大小の法量が存在する。227は体部外面下半までの施釉であるが、他は全面に施釉される。高台は断面三角形を呈しており、232のみ畳付から外底面が露胎であり、

他は畳付を除き施釉される。また、231・238の畳付には砂の容着がみられる。237は底部が窪む形態を取る。

239～241は端反りの碗である。高台は断面三角形を呈し、畳付を除き全面施釉される。241は口径が16.8cmと大きく、やや皿に近い形態を取るものである。

皿、碗ともに乳白色を呈するが、中にはやや青色または黄色をおびたものも存在する。240の口唇部は褐色を呈しており、口鏽である。

### 染付

242～270までが皿であり、242～254は口縁内湾、255～262は端反り、263～271は底部である。242・243・245・246・249・251・270は外面の口縁下と体部下半に1条界線、その間に筆太の草花文を描き、内面には口縁と見込みに1条の界線が巡る。242・246・270は見込みと体部下半から外底面は露胎であり、251は畳付を除き全面施釉、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。口径は242・243・245・246が9.0～10cmと小振りであり、249・250は12.4・12.8cmとやや大振りである。244・247・250は外面の口縁下に1条界線、体部には草文を描く。内面は口縁下に1条と2条の界線、その間に草花文を配し、見込みには2条界線。248は口縁下の2条界線間に波濤文、内面は口縁と見込みに1条界線。252・253は高台畳付のみ露胎であり若干の砂が容着する。253は口縁下内外面に1条界線、見込みと高台脇にも2条と1条界線、見込みには菊花文が1部みられる。254は口縁下外面に1条、腰部に2条の界線、見込みには2条界線と巻草文が施され、口唇部はやや緑褐色を呈する。高台は畳付を外傾に削り、高台内は施釉。255・256・258は界線のみであり、255は口縁下内外面、見込み、腰部に1条の界線、256・258も口縁部内外面、見込みに1条、腰部に2条の界線が巡り、口縁内面の界線は太くてやや薄い。258の見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、高台内は露胎、高台内面を削り、釉は乳白色を呈する。257は口縁内に2条、外に1条の界線と牡丹唐草文がみられ、口唇部は鉄鏽である。259・260・262は四方禪文が施され、外面は口縁下、腰部、高台脇に1～2条の界線が巡る。262の見込みには文様がみられるが不明であり、畳付のみ露胎で砂が容着する。261は口縁下に2条の界線と草花文がみられる。263は見込みに花文、高台脇に1条界線、高台から外底面は露胎である。釉は暗灰色を呈し、貫入が入る。264は見込みに2条界線と菊花文、外面は高台脇に1条、外底面に2条の界線が巡り、畳付は露胎で砂が容着する。265・266は見込みに水生童子図を配し、外底面には方形枠中に退化した字款がみられ、畳付のみ露胎である。267は見込みに十字花文、外面は唐草文とみられ、畳付のみ露胎である。268は体部内面を丸ノミにより花卉状に浅く彫り、見込みの文様は不明であるが、2条界線と列点文を配す。高台は体部外面より斜めに削り幅広く、畳付のみ露胎である。269は碁笥底であり、見込みと体部下半から外底面は露胎である。内外面ともに1条の界線が巡る。見込みは使用のためなめらかとなっている。271は大きく外反する小杯であり、外面にコバルト釉により文様を描く。

272～298は碗である。272は端反りの口縁部であり、内外面に薄く1条界線が巡る。273は

平坦な底部であり、内側を深く削る高台をもつ。見込み及び高台内は露胎、釉は乳白色を呈する。274～288・295は内湾気味の口縁部である。274は口縁下内外面に薄く2条界線、体部外面には草花文がみられる。275は口縁部外面がわずかに肥厚し、内外面に2条界線、体部外面には牡丹唐草文が施される。276は口縁内外面に幅広の1条界線と体部外面に草花文。277も口縁内外面に幅広1条の界線と外面に一部文様がみられるが不明。釉は光沢を失っており、火を受けた可能性がある。278は口縁内面に2条界線、外面は2条界線の間に波濤文、下部は芭蕉葉文と考えられる。279は口縁内外面1条界線、外面に飛馬文である。280は口縁内面2条、外面1条界線に白ヌキの葉文である。281は波濤文と芭蕉葉文、口縁内面に1条界線。282～284は烈点文であり、口縁外面の界線は282・284が2条、283は幅広1条、内面は2条である。285・286は雷文帯の下に2条の界線、体部は唐草文であり、内面は2条の界線である。287は口縁内外面に一条の界線が巡り、外面に草花文がみられる。288は1条と2条の界線間に草文、体部の文様は不明であり、内面は2条界線である。289は見込みに界線と花卉文、高台脇に1条界線が巡り、高台脇及び畳付を削る。高台内は露胎である。290は高台に3条の乱れた界線、体部に草花文、見込みに2条界線と不明の文様であり、畳付のみ露胎である。291は見込みに2条界線と花卉文、外面は草文と高台に2条の薄い界線が巡り、畳付は外傾の削りで露胎である。292・294は外面に芭蕉葉文と1～2条の界線、見込みは2条界線中に文様が染付され、畳付のみ露胎である。293は見込みに樹下人物画、高台内外面に1条界線が巡り、外底面には「大明年造」の字款がみられる。295は外面に淡い色調の文様がみられるが、不明である。296は見込みと高台脇に1条の界線が巡り、見込みと高台から外底面は露胎である。297は高台脇に一条の界線、見込みは蛇ノ目釉刺ぎ、畳付から高台内には一部釉がかかり、砂が容着する。298も高台脇に1条の界線、見込み蛇ノ目釉刺ぎ、高台から外底面は露胎である。

#### その他

299は型押し成形による小皿であり、水平に屈曲する口縁は輪花、外面は花卉をなす。全面に青釉がかけられるが一部は体部下半から高台内にかけて露胎となっている。

### 3. 国産陶器

国産陶器には、瀬戸・美濃系、備前、常滑がみられるが、備前が80%を占め圧倒的に多い。瀬戸・美濃系は残り20%であり、常滑は1点のみの出土である。

#### 瀬戸・美濃系

300～303は鉄釉の天目茶碗である。300は口縁部のみ茶褐色に発色し、屈曲がやや弱い。体部下半に化粧掛けされる。301の口縁及び体部内外面は斑点状に茶褐色の発色がみられ、口縁部の屈曲は強い。302は全体にやや褐色をおびた発色であり、体部下半に化粧掛けされる。303は小振りの天目茶碗であり、釉は褐色を呈し、体部下半に化粧掛けされる。

304も鉄釉を口縁部にかけるもので、体部内外面は露胎である。体部は屈曲し、外反気味に立上る腰部をもち、口縁部は水平に折り曲げ、端部は肥厚しやや垂下する形態をもち、香炉とみられる。

305は灰釉であり、口縁部は白色を呈す。直線的に大きく開く体部から口縁は上方に拡張する。口縁内はやや窪み、断面三角形に突出する。

306～311は備前である。306は皿であり、内湾気味の体部から口縁は内面で小さく段をなし、薄く終る。内面は若干のゴマがかかり、やや光沢をおびる。307は直線的に開く体部から口縁は面をなし終る。植木鉢状の形態である。308・309は播鉢である。口縁は上方に拡張し、下半部は段をなし、2条の小凹線が入る。播目は9本が単位である。309も308と同形態の口縁であり、片口の一部が残る。口径は308に比して大きく、大振りの播鉢である。310は玉縁口縁の大甕であり、311は底部である。

312は常滑の甕口縁部であり、N字状を呈する。

#### 4. 土製品

322は瓦片である。平瓦の端部であり表面には側端から斜めの貼付がみられる。側端部は高さ2cm、幅1.5cmを測り上端は面をなす。斜めに延びる部分は断面三角形であり、高さは低くなり、0.5cmを測る。

323・324は羽口である。323は端部を残しており、スラグが融着している。324も端部は若干欠くがやはりスラグの融着がみられ、ともに全体はよく焼け赤化している。

327は犬形の土製品であり、頭部、脚部は手づくねによりつまみ出し、耳、尾も同様に作り出している。前肢の1本は欠いている。

328～335は土錘である。いずれもやや紡錘形または円筒形であり、全長4cm前後、直径1.5cm内であり、重量は平均6.9gを測る。

#### 5. 金属製品

336～341は三角錐形の金属製品であり、336・338～340は青銅製、337・341は鉄製とみられる。すべて板を三角錐状に曲げ、合わせて成形したものであり、中は空中である。338・339の中には木質部が残されており、直径1cm弱の棒の先端に装着されたものであろう。336は全長・直径ともにやや小さく、337・338がこれにつき、339～341は全長はほぼ同じであるが、直径がやや太い。

342は襖の引手金具とみられるものであり、花卉形を呈し、側板と底板からなる。側板は下方で合わせ、上面は丸味をおびる。上下には直径2mmの孔が存在する。底板は側板につき合せ側板の両端から小突起により止める。全体に緑青が吹いていることから青銅製とみられるが、底板の表面は金色を呈しており、メッキ等の処理がされているようである。

343は鎧の飾金具とみられ、いわゆる八双金具と考えられる。やや湾曲しており、一端は段

をもち切れ込み、ハート形の孔に接する。また、隅丸方形の孔が2ヶ所に開けられ、表面は孔の周囲を残し、小さな魚鱗状に打たれている。材質は真鍮とみられる。

344は火縄銃の火挾ではないかと思われる鉄製品である。一端は丸く円孔をもち、中央部からは、板状となる。他の一端は小さく折れ曲り、端部は両側が立ち溝状となる。

345は火縄銃の弾丸である。鉛の円球であり直径は1.2cm、重量8.2gを測る。中央部にはわずかに合せ目のズレがみられる。346は三角錘の鉛製品であり、重量は190gである。用途は不明であるが、弾丸の素材ではないかと考えられる。

347は鉄製の鑿状工具である。柄部は方形であり、先端は幅4.5cmの直刃となる。348は青銅製の針状製品であり、全長7.2cmを測り、断面は偏平菱形をなす。349は鉄製の火箸であり、断面方形、全長22cmを測る。

350～392は鉄釘である。いずれも断面方形、頭部を曲げる和釘であり、350～353のように径0.5cm前後の細いものと、358・359・365・366の径1cm前後を測る太いものが存在する。また、385～392は先端が曲がっている。393・394は端部に環をもつ釘状の製品であり、393の先端は曲がる。

## 6. 石製品

今回の調査では石製品の出土は少なく、396の砥石の破片のみである。表面が砥面であり、左上から右下方向の擦痕が数条観察される。

## 7. 出土銭

渡来銭は銭種不明も合せ14枚が出土している。また、無文銭とみられるものが3枚、寛永通寶2枚も出土する。渡来銭は開元通寶1枚、至道元寶2枚、天禧通寶1枚、熙寧元寶3枚、元豊通寶1枚、紹聖元寶1枚、元祐通寶1枚、政和通寶1枚、不明4枚である。至道元寶の左側には孔径3mmの小孔が2個開けられている。いずれも全体に磨耗しており、残りはよくない。

## Ⅵ ま と め

### 1. 遺 構

第6次調査で検出された遺構は、四ノ段北部の調査区であるT区において、礎石建物跡（SB5）1棟、礎石列（SA1・2）2列、土坑1基（SK3）、粘土盛土遺構（SX4）、集石遺構（SX5）各1基であり、他に土塁とその裾石が確認された。四ノ段南部のU-W区では土塁とその裾石を確認したのみであり、X区においては遺構の検出はなかった。

SB5とした礎石群は、土塁の裾部近くに並ぶ礎石列を主として東へ梁間2間で礎石が並ぶが、欠落が多く建物として確定するにはやや疑問が残る。また、SB5の位置は虎口から四ノ段北部郭への入口部であり、通路を遮る形となっているところから門としての構造を確認できれば問題はないが、現在のところ門構造を明確に示すものはない。この点からみれば、SB5の礎石の中で土塁裾部に位置するものはSA2と同様な礎石列であり、SB5を構成する他の石礎と分離すべき礎石とも考えられる。さらに、桁行6間とした中央部には三ノ段から突出し、虎口後方を閉鎖する土塁が存在しており、SB5の所在位置とその構造を考えるうえでの大きな問題点となる。しかしながら、三ノ段北半部に位置するSB4は土塁に接して建てられており、建物の北面は四ノ段からの入口にあたることからみれば、SB4が明確に門構えを示す建物とは考えられないとしても、三ノ段の北虎口を構成していたことが知られる<sup>1)</sup>。同様に考えれば、四ノ段におけるSB5の位置と虎口との関係も同じであり、土塁に接している点からも類似した性格をもつ建物である可能性は強い。

SA1とした礎石列は、やはり土塁裾部に接する位置であり、これに対応する礎石が存在するとすればSB5と同様に建物として考えるところであるが、現状では1列だけが検出されている。その構造としては、土塁上へ差し掛けた通路状建物の基礎となる礎石ではないかと考えられる。SA2についても、やはり1列のみの礎石列であるが、北側の土塁裾部が未調査のため確証はないものの土塁に接する建物の礎石である可能性が残されている。また、礎石列に接しその南には集石（SX5）が存在し、炭化物の集中もみられることから、集石を伴うなんらかの施設の存在が推定される。SA1・2とも現段階では礎石列であるが、土塁等の遺構と組み合わせられることにより建物の存在をうかがわせるものである。

SB4は遺構で述べたとおりほぼ円形の黄色粘土を盛った遺構であり、性格は不明である。粘土はかなり硬く締られており、岩盤との間には土師質土器を含む暗茶褐色が存在することから遺物包含層中に盛土されている。SX4の用途について推測すべき資料は皆無であるが、あえて想像を逞しくすれば、長宗我部元親が出陣に際して鬪鶏により勝負を占ったという伝説があることから鬪鶏用の土俵として使われたものかもしれない。また、SA1の礎石がSX4上に存在することからみれば、SX4の存続時期はきわめて短期間であり、廃絶後すぐにSA1が造られたものと考えられる。

SX5は集石遺構であり、2ヶ所の炭化物集中がみられる。集石自体はかなり乱れており、

石の欠落する部分も多いが、全体的にみればやはりS A 1に付属する敷石ではないかと考えられ、S A 1及びS X 5からなる施設が存在したと思われる。

土塁については裾部に数段の石積みが見られ、基本的には詰その他の土塁と同様であるが、高さ、幅ともに当城跡では最大の土塁であり、虎口部防禦の中心となる規模である。

四ノ段北部郭の機能は、虎口後方に展開する出撃のための空間と考えられるが、今次の調査では、礎石建物跡、礎石列が土塁周辺及び中央部にも位置しており、その構造、性格は不明であるが虎口空間の重要な部分を占めている。この点からみれば、虎口空間としての四ノ段北部郭は単純な出撃用空間とは考えられず、織豊系城郭の影響下において中世城郭から近世城郭の様相を整える中で構築されたものであろう。

## 2. 遺物

遺物の中で土師質土器については、第1～5次調査報告書の分類を基準とする<sup>(註2)</sup> 小皿はロクロ成形のものであり、体部内湾の小皿Aはなく、直線的に開く小皿B（53～56）のみである。皿は手づくねによる皿A（1～52）とロクロ成形による皿B（57～79）に大別される。皿Aは口径の差により小形の皿A 1（1～10）とやや大形の皿A 2（11～46・49・52）、口径11cm以上の皿A 3（47・50）の3類に分類される。皿Bもやはり口径の差により小形の皿B 1（57～62・64）、口径10～12cmの皿B 2（63・65～75）、口径14cm以上の大形である皿B 3（76～79）の3類である。形態的には皿B 1は57を徐き体部内湾であり、皿B 2にも同形態の63・65～68と体部外反気味の69～75の2種が存在する。小杯と杯は、内面にロクロ目を残さないA類と内面のロクロ目が明瞭なB類の2種に大別される。小杯Aは80・81・83・91～93であり、小杯Bは82・84～90である。杯Aは108～180であり、杯Bは181～209である。95～107は体部の屈曲により腰部が明瞭な形態をもち、第1～5次調査ではみられなかった一群として杯Cとして分類できる。

土師質土器の注目される点としては、小皿はロクロ成形のみであり、皿は手づくねとロクロ成形の両者がみられるが、量的には手づくねが圧倒的に多く、詰～三ノ段の状況とは差がみられる。杯においては、ロクロ目を残す杯Bに比べ杯Aがやはり多く、この点でも皿と同様に詰～三ノ段との差が存在する。詰～三ノ段では杯Bが多量に出土しており、杯Aと杯Bの量的関係は四ノ段では逆転している。さらに、特徴的な形態を取る杯Cも今次調査では出土する。これらの土師質土器の大半は四ノ段から三ノ段への斜面部における厚く堆積した包含層から出土していることからみれば、土師質土器の様相の差は若干ではあるが時期差を示す可能性がある。

陶入陶磁器では染付の出土量が最も多く、青磁の占める割合は低い。この比率は詰～三ノ段における出土状況と同様であり、16世紀後半～終末の様相として捕えることができる。青磁では線描細蓮弁文をもつB-Ⅳ類、波状の雷文帯をもつC-Ⅲ類、E類の碗（上田編年）<sup>(註3)</sup> と皿及び菊皿、盤、香炉等がみられる。白磁はほぼ法量を等しくする端反の皿が大半を占め、若干の碗がみうけられる。高台はいずれも薄く直立しており、16世紀代に広くみうけられるものである。染付は皿、碗ともに出土しているがほぼ同数であり、詰～三ノ段出土の染付が皿を主体



とすることからみればやや様相を違えている。皿は碁苜底のC類は1点のみであり、他は端反り口縁のB類と内湾口縁のE類である。碗は端反り口縁のB類が1点、他は文様構成からみると蓮子碗系のC類、饅頭心系であるE類が中心とみられる。(小野編年)<sup>(註4)</sup>

国産陶器である瀬戸・美濃系天目茶碗、備前摺鉢・甕、常滑甕はいずれも16世紀後半～末に通常的に出土するものであり、15世紀に遡るものではない。

以上の結果からみれば、土師質土器杯の出土状況及び染付の皿と碗の出土量には第1～5次調査の結果との差があるが、総合的な出土状況は詰～三ノ段と同等とみてよく、岡豊城跡の下限が大高坂城移転の1588年とされることから16世紀後半～末に位置付けられよう。

金属器においては、火縄銃の火挾、弾丸等の出土がみられ、長宗我部氏における火器の導入を確認することができた。また、襖の引手金具の出土からみれば、岡豊城跡の礎石建物が簡便なものではなく居住を中心とする建物であり、山裾部に存在したと思われる館とともに詰及び三ノ段の建物が城内における館として位置付けられよう。

岡豊城跡の調査は第6次調査をもって一応終了したが、遺構、遺物ともに注目されるものであり、本報告書では十分な検討を加えることはできなかったが、今後の研究の基礎資料として報告することにより、ひとまずの責務を果たしたい。

- 註1 前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国城下町ノート」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集 1991
- 註2 森田尚宏・松田直則『岡豊城跡』高知県教育委員会 1990
- 註3 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No. 2 1982
- 註4 小野正敏「15～16世紀の染付碗皿の分類と時代」『貿易陶磁研究』No. 2 1982

## 参考文献

- 松田直則「高知県における中世土器の様相」『中世土器の研究』Ⅲ 1987
- 笹岡良彦『図録日本の甲冑武具事典』 1989
- 山本大編『長宗我部元親のすべて』 1989

Tab. 1 出土土器法量表1 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 (内 断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
1	土師質土器	皿	(7.2)	(1.8)	(4.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 6	
							〃	3	
2	〃	〃	(7.4)	(1.9)	(3.5)	---	灰黄褐色・10YR 5/2	T 6	
							浅黄橙色・7.5YR 8/4	3	
3	〃	〃	(8.0)	(1.9)	(4.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 6	
							〃	3	
4	〃	〃	(8.0)	(2.0)	(4.0)	---	浅黄橙色・10YR 8/3	T 12	
							〃	3	
5	〃	〃	(7.2)	(1.9)	(4.0)	---	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 1	
							淡黄色・2.5Y 8/3	4	
6	〃	〃	(7.8)	(2.0)	(5.2)	---	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1	
							〃	4	
7	〃	〃	(7.8)	(1.8)	(5.0)	---	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 3	
							〃	4	
8	〃	〃	(7.8)	(2.3)	(5.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 3	
							〃	4	
9	〃	〃	(7.8)	(2.0)	(5.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 3	
							〃	4	
10	〃	〃	(8.0)	(2.1)	(5.2)	---	淡橙色・5YR 8/3	T 7	
							浅黄橙色・7.5YR 8/3	3	
11	〃	〃	(8.4)	(2.1)	(6.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 5	
							浅黄橙色・7.5YR 8/4	4	
12	〃	〃	(8.4)	(2.2)	(6.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/9	T 2	
							〃	5	
13	〃	〃	(9.0)	(2.3)	(6.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	4	
14	〃	〃	9.5	2.5	7.0	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	5	
15	〃	〃	9.6	2.5	7.0	---	にぶい橙色・5YR 7/4	T 2	
							〃	5	
16	〃	〃	9.4	2.7	5.8	---	浅黄褐色・7.5YR 8/4	T 2	
							〃	5	
17	〃	〃	(10.0)	(2.1)	(6.0)	---	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	5	
18	〃	〃	(9.0)	(2.5)	(7.8)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 7	
							〃	3	
19	〃	〃	9.2	2.3	7.4	---	にぶい黄橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	4	
20	〃	〃	(9.8)	(1.9)	(7.0)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 4	
							〃	3	

Tab. 2 出土土器法量表2 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (備)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
21	土師質土器	皿	(9.0)	2.3	(5.6)	—	橙色・5YR 7/6	T 2	
							〃	4	
22	〃	〃	(9.2)	2.2	(6.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	4	
23	〃	〃	9.1	2.6	6.6	—	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	5	
24	〃	〃	(9.0)	2.2	(5.6)	—	橙色・5YR 6/6	T 1	
							〃	3	
25	〃	〃	(9.4)	2.2	(5.4)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃 6/4	5	
26	〃	〃	(9.0)	(2.0)	(5.8)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 5	
							〃	3	
27	〃	〃	(9.1)	1.9	(6.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 7	
							〃	2	
28	〃	〃	(9.0)	2.1	(6.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 3	
							〃	4	
29	〃	〃	(8.8)	1.6	(6.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 8	
							〃	4	
30	〃	〃	(9.0)	1.8	(6.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 14	
							〃・2.5YR 7/6	3	
31	〃	〃	(9.4)	1.8	(7.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 11	
							〃	3	
32	〃	〃	(9.0)	1.8	(7.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 6	
							〃	3	
33	〃	〃	(9.0)	1.8	(6.8)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							〃	4	
34	〃	〃	(9.4)	2.1	(5.2)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 5	
							〃	4	
35	〃	〃	(10.0)	2.3	(6.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 5	
							にぶい橙色・7.5YR 7/4	3	
36	〃	〃	(9.2)	1.9	(6.0)	—	浅橙色・5YR 8/4	T 7	
							〃	3	
37	〃	〃	(9.4)	1.8	(5.6)	—	にぶい橙色・5YR 7/4	T 7	
							〃	3	
38	〃	〃	(9.6)	1.9	(7.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 8	
							〃	3	
39	〃	〃	(9.0)	1.9	(6.4)	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 3	
							〃	3	
40	〃	〃	9.8	2.1	7.0	—	にぶい黄橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							にぶい橙色・10YR 7/4	5	

Tab. 3 出土土器法量表 3

〔( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
41	土師質土器	皿	(9.8)	1.8	(7.0)	—	橙色・5YR 7/6		T 9
							〃		3
42	〃	〃	(10.0)	1.9	(7.0)	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4		T 3
							浅黄橙色・10YR 8/3		4
43	〃	〃	(10.0)	1.4	(7.4)	—	にぶい橙色・5YR 7/4		T 3
							〃		3
44	〃	〃	(10.0)	1.6	(7.0)	—	にぶい橙色・5YR 7/4		T 1
							〃		5
45	〃	〃	(9.8)	2.0	(6.8)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 2
							〃		4
46	〃	〃	(10.0)	2.4	(5.2)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4		T 8
							〃		3
47	〃	〃	(11.0)	2.0	(7.0)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4		T 8
							〃		3
48	〃	〃	(10.0)	2.3	(7.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 3
							〃		4
49	〃	〃	(10.2)	2.2	(5.6)	—	橙色・7.5YR 7/6		T 4
							〃		3
50	〃	〃	(11.8)	2.1	(9.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 11
							〃		3
51	〃	〃	(11.0)	2.2	(6.4)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 6
							〃		4
52	〃	〃	(10.1)	2.0	(7.0)	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4		T 7
							〃		3
53	〃	小皿	7.1	1.3	4.1	—	橙色・5YR 7/6		T 2
							〃		3
54	〃	〃	(8.0)	1.8	(4.2)	—	浅黄橙色・10YR 8/3		T 7
							〃		3
55	〃	〃	(7.7)	1.6	(4.2)	—	浅黄橙色・7.5YR 8/3		T 6
							〃		4
56	〃	〃	(7.8)	1.9	(4.9)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 9
							〃		3
57	〃	皿	(9.8)	2.1	(7.0)	—	黄橙色・7.5YR 7/8		T 8
							〃		3
58	〃	〃	(8.8)	1.2	(5.0)	—	橙色・5YR 7/6		T 5
							〃		3
59	〃	〃	(8.9)	1.5	5.6	—	橙色・5YR 6/6		T 9
							〃 7/8		3
60	〃	〃	(9.0)	1.4	(5.2)	—	橙色・5YR 7/6		T 2
							〃		5

Tab. 4 出土土器法量表4 [( )は復元及び残存値]

挿図 番号	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	出土地区 内 (断) 層 位
			口径	器高	底径	高台高		
61	土師質土器	皿	(9.0)	1.3	6.0	—	橙色・5YR 7/8	T 6
							〃	3
62	〃	〃	(9.5)	2.3	4.4	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1
							〃	4
63	〃	〃	(11.0)	2.0	6.4	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4
							〃	3
64	〃	〃	(9.8)	1.8	(5.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1
							〃	3
65	〃	〃	(12.0)	2.3	(6.8)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 2
							〃	4
66	〃	〃	(13.4)	2.1	(8.0)	—	橙色・5YR 7/6	T 4
							橙色・7.5YR 7/6	3
67	〃	〃	(12.6)	2.1	(7.4)	—	橙色・5YR 7/6	T 2
							〃	4
68	〃	〃	(11.8)	2.2	6.4	—	にぶい橙色・5YR 7/4	T 2
							〃	5
69	〃	〃	(10.2)	2.0	(5.0)	—	橙色・5YR 6/8	T 11
							〃	3
70	〃	〃	(10.2)	2.0	(7.8)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1
							〃	4
71	〃	〃	(11.6)	2.1	6.6	—	橙色・5YR 6/8	T 5
							〃	3
72	〃	〃	(11.8)	2.6	6.0	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2
							〃	5
73	〃	〃	(12.4)	2.4	7.6	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1
							〃	3
74	〃	〃	(12.3)	2.1	(7.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1
							〃	3
75	〃	〃	11.2	2.3	5.8	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1
							〃	3
76	〃	〃	(18.8)	2.3	(13.0)	—	灰白色・2.5Y 8/2	T 2
							〃	4
77	〃	〃	(14.2)	1.8	(8.5)	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1
							〃	5
78	〃	〃	(20.4)	3.9	(11.0)	—	黄橙色・7.5YR 7/8	T 1
							〃	4
79	〃	〃	(17.4)	3.2	(7.8)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1
							浅黄橙色・10YR 8/4	5
80	〃	小杯	(6.0)	1.9	(3.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4
							〃	3

Tab. 5 出土土器法量表5 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
81	土師質土器	小杯	7.0	2.4	3.0	---	浅黄橙色・10YR 8/4 〃	T 2 4	
82	〃	〃	6.9	2.0	5.0	---	にぶい赤褐色・2.5YR 5/4 橙色・5YR 7/8	T 3 4	
83	〃	〃	(6.9)	2.1	3.2	---	浅黄橙色・7.5YR 8/4 〃	T 2 4	
84	〃	〃	(6.0)	1.9	(2.8)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4 〃	T 2 5	
85	〃	〃	(6.6)	2.0	(3.2)	---	にぶい褐色・7.5YR 5/4 〃	T 15 3	
86	〃	〃	(7.6)	2.2	(3.4)	---	にぶい橙色・7.5YR 6/4 黄橙色・10YR 8/6	T 8 3	
87	〃	〃	(7.4)	2.5	(3.4)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4 〃	T 2 4	
88	〃	〃	(6.6)	2.6	4.4	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4 〃	T 9 3	
89	〃	〃	(7.8)	2.6	4.4	---	橙色・5YR 7/6 〃・7.5YR 7/6	T 13 3	
90	〃	〃	(8.0)	2.2	(4.2)	---	浅黄橙色・7.5YR 8/6 〃	T 3 4	
91	〃	〃	(6.5)	2.7	3.0	---	にぶい橙色・7.5YR 6/4 〃・7.5YR 7/4	T 1 5	
92	〃	〃	(5.6)	2.6	(4.0)	---	浅黄橙色・10YR 8/3 〃	T 5 4	
93	〃	〃	(7.9)	2.4	4.1	---	浅黄橙色・10YR 8/3 〃	T 1 3	
94	〃	杯	(10.9)	2.7	5.5	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4 橙色・7.5YR 7/6	T 1 4	
95	〃	〃	10.2	2.7	4.2	---	橙色・5YR 6/6 〃	T 4 3	
96	〃	〃	(9.8)	2.5	4.6	---	橙色・7.5YR 7/6 〃	T 1 3	
97	〃	〃	(10.7)	2.8	(4.4)	---	橙色・7.5YR 7/6 〃	T 4 3	
98	〃	〃	10.2	2.7	5.4	---	橙色・5YR 7/6 〃	T 1 3	
99	〃	〃	10.6	3.0	4.8	---	橙色・7.5YR 7/6 〃	T 1 3	
100	〃	〃	(10.2)	2.9	(5.0)	---	橙色・7.5YR 7/6 〃	T 1 4	

Tab. 6 出土土器法量表6 (( )は復元及び残存値)

挿図 番号	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 (内)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
101	土師質土器	杯	(10.4)	2.9	(5.0)	---	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	3	
102	〃	〃	(10.8)	2.6	5.7	---	橙色・5YR 6/6	T 1	
							〃	4	
103	〃	〃	(12.0)	2.6	5.6	---	橙色・7.5YR 7/6	T 8	
							〃	3	
104	〃	〃	(9.8)	2.5	(4.8)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							橙色・7.5YR 7/6	3	
105	〃	〃	(10.4)	2.7	(5.0)	---	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	3	
106	〃	〃	(10.8)	3.2	(4.5)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							橙色・7.5YR 7/6	3	
107	〃	〃	(10.7)	3.1	5.8	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							〃	4	
108	〃	〃	(10.4)	2.5	(4.5)	---	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	3	
109	〃	〃	(10.8)	2.3	(6.0)	---	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	3	
110	〃	〃	(11.0)	2.6	5.8	---	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	4	
111	〃	〃	(10.4)	2.4	(5.4)	---	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 2	
							〃	4	
112	〃	〃	(11.0)	2.6	5.0	---	浅黄橙色・7.5YR 8/3	T 2	
							〃	4	
113	〃	〃	(11.0)	2.5	5.7	---	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	3	
114	〃	〃	(11.0)	2.6	(4.9)	---	にぶい橙色・7.5YR 6/4	T 1	
							〃	3	
115	〃	〃	10.6	2.9	4.6	---	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	4	
116	〃	〃	(10.2)	2.6	(4.5)	---	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃	4	
117	〃	〃	(11.4)	2.7	(6.2)	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	4	
118	〃	〃	10.4	2.9	4.5	---	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							〃	5	
119	〃	〃	(10.2)	3.2	3.8	---	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 1	
							〃	3	
120	〃	〃	(11.8)	2.9	6.3	---	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							にぶい黄橙色・10YR 7/4	4	

Tab. 7 出土土器法量表7

〔( )は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
121	土師質土器	杯	(11.3)	2.7	(5.8)	—	橙色・7.5YR 6/6		T 1
							〃		3
122	〃	〃	(10.2)	2.9	(3.0)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4		T 3
							〃		3
123	〃	〃	10.2	2.9	4.4	—	赤橙色・10R 6/6		T 9
							〃		3
124	〃	〃	(10.8)	3.1	(5.0)	—	浅黄橙色・10YR 8/3		T 5
							〃		3
125	〃	〃	(11.0)	2.8	5.6	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4		T 2
							〃		4
126	〃	〃	(10.8)	2.6	(5.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 3
							〃		4
127	〃	〃	(10.5)	2.7	4.9	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3		T 1
							〃		3
128	〃	〃	(10.2)	2.9	(4.6)	—	浅黄橙色・10YR 8/4		T 9
							〃		3
129	〃	〃	(10.3)	2.7	4.4	—	淡赤橙色・2.5YR 7/4		T 9
							〃		3
130	〃	〃	(10.6)	3.0	(5.1)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3		T 1
							〃		4
131	〃	〃	(10.2)	2.6	5.0	—	にぶい橙色・7.5YR 8/4		T 4
							〃		3
132	〃	〃	(10.8)	2.8	5.3	—	にぶい橙色・7.5YR 6/4		T 1
							橙色・7.5YR 6/6		3
133	〃	〃	(10.6)	3.4	(4.4)	—	浅黄橙色・10YR 8/4		T 9
							〃		3
134	〃	〃	(10.2)	3.0	(4.9)	—	にぶい橙色・10YR 7/3		T 1
							〃		3
135	〃	〃	(11.0)	3.0	(5.2)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3		T 9
							〃		3
136	〃	〃	(11.0)	3.0	(4.4)	—	浅黄橙色・10YR 8/4		T 5
							〃		3
137	〃	〃	(10.6)	3.0	(4.4)	—	浅黄橙色・10YR 8/3		T 9
							〃		3
138	〃	〃	(11.6)	3.2	(5.0)	—	淡赤橙色・2.5YR 7/4		T 3
							〃		4
139	〃	〃	11.0	3.5	4.4	—	浅黄橙色・10YR 8/3		T 9
							〃		3
140	〃	〃	(11.5)	2.8	(5.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 6/4		T 1
							〃		3



Tab. 8 出土土器法量表 8 (( ) は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
141	土師質土器	杯	(10.7)	3.3	4.8	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃		5
142	〃	〃	(10.7)	2.7	(4.8)	—	にぶい橙色・10YR 7/3	T 1	
							〃	4	
143	〃	〃	(10.2)	3.9	(4.2)	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃	5	
144	〃	〃	(10.3)	2.8	5.3	—	にぶい黄橙色・10YR 7/2	T 2	
							浅黄橙色・10YR 8/4	4	
145	〃	〃	(10.2)	3.1	4.6	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 2	
							浅黄橙色・10YR 8/3	4	
146	〃	〃	10.0	3.0	4.8	—	にぶい黄橙色・10YR 7/2	T 1	
							〃 7/3	5	
147	〃	〃	(10.7)	3.0	5.0	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 2	
							〃	5	
148	〃	〃	10.6	3.3	4.0	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							橙色・7.5YR 7/6	4	
149	〃	〃	(10.3)	3.0	4.0	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃	4	
150	〃	〃	(10.5)	2.8	4.8	—	浅黄橙色・7.5YR 8/3	T 1	
							〃	5	
151	〃	〃	11.0	3.3	4.4	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 2	
							〃	4	
152	〃	〃	10.8	3.5	5.0	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 2	
							〃	5	
153	〃	〃	(11.0)	3.0	4.6	—	浅黄橙色・10YR 8/4	T 3	
							〃	3	
154	〃	〃	(11.2)	2.9	(5.0)	—	浅黄橙色・7.5YR 8/3	T 3	
							〃	4	
155	〃	〃	10.4	3.1	5.6	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃	4	
156	〃	〃	10.5	3.4	4.4	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 2	
							〃	4	
157	〃	〃	(10.2)	4.0	(4.4)	—	淡橙色・5YR 8/4	T 2	
							にぶい橙色・5YR 7/4	4	
158	〃	〃	10.7	3.1	4.4	—	にぶい橙色・2.5YR 6/4	T 1	
							にぶい橙色・5YR 7/4	3	
159	〃	〃	(10.8)	3.0	(4.8)	—	にぶい橙色・5YR 7/4	T 3	
							〃	3	
160	〃	〃	(11.2)	2.9	(4.4)	—	赤橙色・10YR 6/6	T 1	
							〃	3	

Tab. 9 出土土器法量表9

〔( )は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外	出土地区
			口径	器高	底径	高台高		内 (断)	層 位
161	土師質土器	杯	(10.8)	3.0	4.6	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 8	
							〃	3	
162	〃	〃	(9.8)	2.7	(4.0)	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 1	
							〃	5	
163	〃	〃	(10.2)	2.9	(5.2)	—	浅黄橙色・10YR 8/4	T 1	
							〃	4	
164	〃	〃	(10.8)	3.1	(4.2)	—	赤橙色・10YR 6/6	T 1	
							〃	3	
165	〃	〃	(10.2)	3.2	(4.3)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 1	
							〃	4	
166	〃	〃	(10.0)	2.7	4.4	—	浅黄橙色・10YR 8/4	T 2	
							〃	4	
167	〃	〃	(11.0)	2.7	5.2	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1	
							〃	3	
168	〃	〃	(10.6)	3.3	4.8	—	浅黄橙色・10YR 8/3	T 6	
							〃	3	
169	〃	〃	10.8	3.1	5.0	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 2	
							〃	3	
170	〃	〃	(11.4)	3.6	4.4	—	浅黄橙色・10YR 8/4	T 2	
							〃	5	
171	〃	〃	(11.8)	3.1	(5.2)	—	赤橙色・10YR 8/6	T 1	
							〃	5	
172	〃	〃	(11.8)	3.8	4.7	—	にぶい橙色・10YR 7/4	T 1	
							〃	・7.5YR 7/4	3
173	〃	〃	(10.1)	3.1	(5.6)	—	橙色・7.5YR 6/6	T 1	
							〃	3	
174	〃	〃	(9.8)	3.8	(5.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	3	
175	〃	〃	(14.2)	3.3	(7.8)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							〃	5	
176	〃	〃	(12.0)	3.5	(5.2)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4	
							〃	3	
177	〃	〃	(9.8)	3.4	(4.8)	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1	
							〃	4	
178	〃	〃	(14.4)	4.2	7.6	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 1	
							〃	5	
179	〃	〃	(11.8)	3.8	4.7	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 1	
							橙色・7.5YR 6/6	3	
180	〃	〃	(10.8)	4.2	(5.0)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 1	
							にぶい橙色・7.5YR 6/4	4	

Tab.10 出土土器法量表10 (( ) は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
181	土師質土器	杯	(9.2)	2.7	4.4	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 4	
							〃	3	
182	〃	〃	(10.0)	2.6	(4.2)	-----	浅黄橙色・10YR 8/4	T 1	
							〃	4	
183	〃	〃	(9.4)	3.1	4.4	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 9	
							〃	4	
184	〃	〃	(10.2)	3.3	(4.8)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 2	
							〃	5	
185	〃	〃	(10.2)	2.1	(5.2)	---	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 1	
							〃	4	
186	〃	〃	(10.8)	3.0	(5.0)	---	浅黄橙色・10YR 8/3	T 4	
							〃	3	
187	〃	〃	(10.2)	2.8	(4.4)	—	橙色・7.5YR 6/6	T 8	
							〃	4	
188	〃	〃	(10.4)	3.1	(5.6)	-----	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 5	
							〃	4	
189	〃	〃	(10.0)	3.2	4.0	—	橙色・5YR 7/6	T 2	
							〃	4	
190	〃	〃	(10.4)	3.2	(4.2)	—	橙色・7.5YR 7/6	T 9	
							〃	4	
191	〃	〃	(11.0)	3.1	4.0	---	橙色・5YR 7/6	T 5	
							にぶい橙色・7.5YR 7/4	4	
192	〃	〃	(9.8)	3.6	(4.2)	-----	浅黄橙色・10YR 8/4	T 3	
							〃	3	
193	〃	〃	(10.6)	3.2	(5.4)	---	灰黄褐色・10YR 5/2	T 2	
							〃	5	
194	〃	〃	(10.5)	3.5	(5.2)	---	にぶい橙色・5YR 7/4	T 1	
							橙色・5YR 7/6	3	
195	〃	〃	(10.8)	3.7	(5.6)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 4	
							〃	3	
196	〃	〃	(11.2)	3.8	(5.0)	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 1	
							〃	5	
197	〃	〃	(10.7)	3.5	(3.6)	—	浅黄橙色・7.5YR 8/4	T 1	
							〃	3	
198	〃	〃	(11.2)	3.7	(5.0)	-----	にぶい橙色・7.5YR 7/4	T 4	
							〃	3	
199	〃	〃	(11.6)	4.0	4.4	---	にぶい黄褐色・10YR 7/4	T 4	
							橙色・7.5YR 7/6	3	
200	〃	〃	(11.8)	3.5	5.2	---	にぶい橙色・7.5YR 6/4	T 1	
							〃	4	

Tab. 11 出土土器法量表11 (( ))は復元及び残存値

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 (内 断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
201	土師質土器	杯	(10.0)	3.0	4.5	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 2	
							〃	5	
202	〃	〃	(10.6)	3.1	5.4	—	にぶい黄橙色・10YR 7/4	T 4	
							〃7.5YR 7/4	4	
203	〃	〃	(10.6)	3.8	6.0	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4	
							〃	4	
204	〃	〃	10.8	3.3	4.4	—	橙色・5YR 7/8	T 6	
							〃	4	
205	〃	〃	(11.0)	3.5	5.6	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4	
							〃	4	
206	〃	〃	11.0	3.8	6.0	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4	
							〃	3	
207	〃	〃	(10.8)	3.6	5.1	—	橙色・5YR 7/6	T 4	
							〃	3	
208	〃	〃	(11.0)	3.8	4.6	—	橙色・7.5YR 7/6	T 4	
							〃	3	
209	〃	〃	(10.8)	4.1	4.4	—	橙色・7.5YR 7/6	T 2	
							〃	5	
210	〃	〃	—	(3.0)	6.4	2.3	にぶい黄橙色・10YR 7/3	T 2	
							〃	5	
211	青磁	皿	(12.1)	2.95	(6.1)	0.5	オリーブ灰色・2.5GY 7/1	T 1	
							(オリーブ黄色・5Y 6/3)	3	
212	〃	〃	(12.0)	(2.7)	—	—	オリーブ灰色・10Y 6/2	T 2	
							(灰白色・10Y 7/1)	4	
213	〃	稜花皿	(12.8)	(2.1)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 2	
							(灰白色・5Y 7/1)	4	
214	〃	碗	(9.8)	(3.2)	—	—	灰白色・10Y 7/2	T 2	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	5	
215	〃	〃	(11.9)	(2.5)	—	—	明オリーブ灰色・5GY 7/1	T 1	
							(灰白色・5Y 8/2)	5	
216	〃	〃	(13.6)	(4.7)	—	—	灰オリーブ色・5Y 6/2	T1(SX1)	
							(灰褐色・7.5YR 6/2)	4	
217	〃	〃	(15.0)	(3.2)	—	—	オリーブ灰色・10Y 6/2	T 3	
							(にぶい黄橙色・10YR 7/2)	3	
218	〃	〃	(16.0)	(2.7)	—	—	明オリーブ灰色・5GY 7/1	T 9	
							(灰白色・2.5Y 7/1)	3	
219	〃	〃	—	(4.6)	4.5	1.3	淡黄色・5Y 8/3	T 1	
							(淡黄色・2.5Y 8/4)	3	
220	〃	〃	—	(2.3)	4.8	0.9	灰オリーブ色・5Y 6/2	T 1	
							(褐色・10YR 6/1)	4	

Tab. 12 出土土器法量表12

〔 ( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
221	青磁	碗	—	(3.3)	(5.0)	0.7	灰白色・7.5Y 7/2	T 5	
							(明黄褐色・10YR 6/6)	3	
222	"	"	—	(4.1)	(4.6)	1.2	明オリーブ灰色・5GY 7/1	T 2	
							(灰色・10Y 6/1)	3	
223	"	"	—	(1.3)	(5.0)	0.5	明オリーブ灰色・2.5GY 7/1	T 2	
							(灰色・5Y 8/2)	3	
224	"	"	—	(2.1)	5.5	0.6	灰白色・2.5GY 8/1	T 8	
							(灰黄褐色・10YR 6/2)	3	
225	"	盤	—	(2.8)	—	—	オリーブ灰色・10Y 5/2	T 1	
							(灰白色・10Y 8/1)	4	
226	"	香炉	(7.0)	(2.4)	—	—	オリーブ灰色・7.5Y 6/2	T 1	
							(明緑灰色・7.5GY 8/1)	3	
227	白磁	皿	(10.2)	(1.9)	—	—	灰白色・10Y 7/1	T 5	
							(灰黄褐色・10YR 6/2)	3	
228	"	"	(11.0)	(2.2)	—	—	灰白色・10Y 7/1	T 1	
							(灰白色・10Y 8/1)	5	
229	"	"	(11.6)	(1.8)	—	—	灰白色・10Y 7/1	T 2	
							(灰白色・10YR 8/2)	5	
230	"	"	(12.0)	(2.2)	—	—	明オリーブ灰色・2.5GY 7/1	T 8	
							(明褐色・5YR 7/1)	3	
231	"	"	(11.2)	(2.4)	(6.2)	0.4	灰白色・10Y 7/1	T 2	
							(灰白色・10YR 7/1)	5	
232	"	"	(11.6)	(2.8)	(5.8)	0.4	灰白色・2.5Y 8/1	T 4	
							(灰白色・5Y 8/2)	4	
233	"	"	(11.8)	(2.4)	—	—	灰白色・7.5Y 8/1	T 5	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	4	
234	"	"	(12.4)	(3.1)	(6.8)	0.5	灰白色・7.5Y 8/1	T 2	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	4	
235	"	"	(10.6)	(3.2)	(6.0)	0.5	灰白色・5Y 8/1	T 9	
							(灰白色・2.5Y 7/2)	3	
236	"	"	(13.1)	(2.5)	—	—	灰白色・10Y 8/1	T 6	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	3	
237	"	"	(13.6)	(3.5)	(7.6)	0.5	灰白色・7.5Y 8/1	T 2	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	3	
238	"	"	—	(1.8)	(6.0)	0.7	灰白色・10Y 8/1	T 7	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	3	
239	"	碗	(14.0)	(5.7)	(4.8)	0.8	灰白色・10Y 8/1	T 9	
							(灰白色・5Y 8/2)	4	
240	"	"	(12.2)	(2.9)	—	—	明青灰色・5B 7/1	T 5	
							(灰褐色・12.2-2.9)	4	

Tab.13 出土土器法量表13

〔( )は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
241	白磁	皿	(16.8)	(3.3)	—	—	明緑灰色・7.5GY 3/1	T 2	
							(灰白色10Y 8/1)	3	
242	染付	〃	(9.0)	(1.8)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・5Y 8/1)	3	
243	〃	〃	(9.6)	(1.9)	—	—	浅黄色・2.5Y 7/3	T 1	
							(浅黄色・2.5Y 8/4)	3	
244	〃	〃	(12.9)	(2.5)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・5Y 8/1)	3	
245	〃	〃	(10.0)	(1.5)	—	—	明緑灰色・5G 7/1	T 1・2	
							(灰白色・10YR 7/1)	3	
246	〃	〃	(9.2)	(2.6)	(3.6)	0.5	灰白色・2.5Y 7/1	T 2	
							(にぶい橙・7.5YR 7/3)	3	
247	〃	〃	(12.7)	(2.2)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・5Y 8/1)	4	
248	〃	〃	(10.1)	(2.3)	—	—	浅黄色・2.5Y 7/3	T 1	
							(浅黄色・2.5Y 7/4)	3	
249	〃	〃	(12.4)	(1.9)	—	—	明オリブ灰色・2.5GY 7/1	T 2	
							(淡赤橙色・2.5YR 7/4)	3	
250	〃	〃	(13.4)	(2.0)	—	—	明青灰色・5B 7/1	T 4	
							(灰白色・7.5YR 8/2)	4	
251	〃	〃	(12.8)	(2.8)	5.6	0.7	灰白色・5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・2.5Y 7/1)	3	
252	〃	〃	—	(2.3)	(8.6)	0.5	明緑灰色・5G 7/1	T1(SX1上)	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	4	
253	〃	〃	(11.4)	(2.7)	(6.0)	0.5	明青灰色・5B 7/1	T 2	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	4	
254	〃	〃	(13.2)	(2.7)	(6.0)	0.7	明緑灰色・5G 7/1	T 2	
							(灰白色・2.5Y 7/1)	3	
255	〃	〃	(13.0)	(2.3)	—	—	灰オリブ色・5Y 6/2	T15(土留)	
							(にぶい橙・5YR 6/3)	3	
256	〃	〃	(12.8)	(2.4)	—	—	灰白色・5GY 8/1	T1(SX1上)	
							(灰白色・5YR 8/2)	4	
257	〃	〃	(12.0)	(1.8)	—	—	明青灰色・10BG 7/1	T 3	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	3	
258	〃	〃	(13.8)	(3.9)	6.3	0.7	灰白色・7.5Y 8/1	T 2・4	
							(にぶい橙・7.5YR 7/3)	3	
259	〃	〃	(14.7)	(1.4)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	3	
260	〃	〃	(12.7)	(2.2)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 1	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	3	

Tab. 14 出土土器法量表14 [( )は復元及び残存値]

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
261	染付	皿	(17.0)	(2.3)	—	—	明青灰色・5B 7/1	T 1	
							(灰白色・7.5Y 8/1)	4	
262	◇	◇	(15.2)	(3.5)	(6.0)	0.3	明緑灰色・7.5GY 8/1	T 4	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	4	
263	◇	◇	—	(1.5)	(5.8)	0.9	灰黄色・2.5Y 7/2	T 3	
							(にぶい褐色・7.5YR 6/3)	3	
264	◇	◇	—	(1.2)	(5.6)	0.5	明緑灰色・10GY 8/1	T 1	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	3	
265	◇	◇	—	(1.4)	(5.6)	0.5	明青灰色・5BG 7/1	T 2	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	4	
266	◇	◇	—	(0.9)	(5.6)	0.3	明青灰色・5BG 7/1	T 1	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	3	
267	◇	◇	—	(1.1)	(4.4)	0.4	明青灰色・5BG 7/1	T1(SX1上)	
							(灰白色・2.5Y 8/1)	4	
268	◇	◇	—	(1.5)	(9.8)	0.4	明青灰色・5BG 7/1	T 6	
							(灰黄色・2.5Y 7/2)	2	
269	◇	◇	—	(2.0)	(4.0)	0.5	灰黄褐色・10YR 6/2	T 4	
							(にぶい黄褐色・10YR 7/3)	3	
270	◇	小杯	(5.6)	(1.6)	—	—	灰白色・7.5Y 8/1	T 5	
							(明褐色・7.5YR 7/2)	3	
271	◇	碗	—	(1.9)	(4.2)	—	灰白色・5Y 8/2	T 1	
							(浅黄褐色・10YR 8/3)	3	
272	◇	◇	(12.8)	(3.2)	—	—	灰白色・7.5Y 7/2	T 2	
							(灰白色・7.5YR 8/2)	4	
273	◇	◇	—	(2.0)	(6.0)	0.8	灰白色・10Y 7/1	T 1	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	3	
274	◇	◇	(12.0)	(2.2)	—	—	明青灰色・5BG 7/1	T 3	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	3	
275	◇	◇	(11.6)	(2.9)	—	—	灰白色・10Y 7/1	T11	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	3	
276	◇	◇	(13.4)	(3.2)	—	—	明緑灰色・10GY 8/1	T 1	
							(灰白色・10Y 8/1)	5	
277	◇	◇	(12.4)	(4.3)	—	—	灰白色・2.5GY 8/1	T 2	
							(灰白色・10YR 7/1)	3	
278	◇	◇	(13.0)	(2.6)	—	—	明緑灰色・10GY 8/1	T11	
							(灰白色・10YR 8/2)	3	
279	◇	◇	(12.4)	(2.8)	—	—	灰白色・10Y 8/1	T 4	
							(灰白色・5Y 8/1)	4	
280	◇	◇	(12.0)	(3.3)	—	—	灰白色・10Y 8/1	T 6	
							(灰白色・2.5Y 8/2)	4	

Tab. 15 出土土器法量表15

〔( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (W)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
281	染付	碗	(13.5)	(4.8)	—	—	灰白色・5Y 8/2		T 1
							(浅黄色・2.5Y 8/3)		4
282	"	"	(14.0)	(3.3)	—	—	明青灰色・5BG 7/1		T 8・9
							(灰褐色・7.5YR 6/2)		3
283	"	"	(14.0)	(3.9)	—	—	明青灰色・5BG 7/1		T 5
							(灰白色・10YR 8/1)		4
284	"	"	(15.0)	(3.3)	—	—	明青灰色・5BG 7/1		T5・6・8・9
							(灰白色・10YR 8/2)		2・3・4
285	"	"	(12.0)	(4.4)	—	—	明緑灰色・10GY 8/1		T 3
							(灰白色・10YR 8/1)		4
286	"	"	(10.8)	(4.0)	—	—	灰白色・5Y 8/1		T11
							(灰白色・10YR 8/1)		3
287	"	"	(13.0)	(2.5)	—	—	明緑灰色・10GY 7/1		T 2
							灰白色・10Y 8/1		3
288	"	"	(12.2)	(3.2)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1		T 1
							(灰白色・10Y 8/1)		4
289	"	"	—	(2.2)	4.4	0.5	淡黄色・5Y 8/4		T 3
							(にぶい黄橙色・10YR 7/3)		3
290	"	"	—	(5.5)	(15.7)	0.6	明青灰色・5BG 7/1		T 4
							(灰白色・2.5Y 8/1)		4
291	"	"	—	(3.6)	(5.0)	0.9	明緑灰色・10GY 8/1		T 1
							(灰白色・2.5Y 8/1)		4
292	"	"	—	(2.0)	(4.4)	0.7	明緑灰色・10GY 7/1		T 1
							(灰白色・10YR 8/1)		3
293	"	"	—	(1.8)	4.2	1.2	明青灰色・5BG 7/1		T 1
							(灰白色・10YR 8/1)		4
294	"	"	—	(3.4)	(6.0)	1.0	明緑灰色・7.5GY 8/1		T 4
							(灰白色・2.5Y 8/1)		4
295	"	"	—	(4.2)	—	—	明緑灰色・7.5GY 8/1		T 3
							(灰黄色・2.5Y 7/2)		3
296	"	"	—	(2.4)	4.8	0.4	にぶい黄橙色・10YR 7/3		T11
							(灰白色・7.5YR 8/1)		3
297	"	"	—	(2.3)	(6.4)	1.2	灰白色・2.5GY 8/1		T 2
							(にぶい橙色・5YR 7/4)		3
298	"	"	—	(1.7)	4.6	0.6	灰白色・5Y 7/1		T 2
							(灰褐色・5YR 6/2)		5
299	青釉陶器	小皿	(6.0)	(1.1)	(3.8)	0.2	—		T 1
							—		3
300	瀬戸美濃系	大目茶碗	(12.6)	(4.9)	—	—	黒色・10YR 1.7/1		T 3
							灰白色・7.5YR 8/2)		4



Tab. 16 出土土器法量表16 ( ) は復元及び残存値

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
301	瀬戸美濃系	天目茶碗	(10.6)	(4.5)	—	—	黒色・7.5YR 2/1 (浅黄橙色・7.5YR 8/3)	T 1 4	
302	〃	〃	(11.4)	(5.3)	—	—	黒褐色・5YR 2/2 (浅黄橙色・7.5YR 8/3)	T 2・4 4	
303	〃	〃	(9.1)	(2.8)	—	—	暗赤褐色・5YR 3/2 (灰黄色・2.5Y 7/2)	T 1 3	
304	〃	香炉	(11.2)	(2.3)	—	—	黒色・7.5YR 2/1 (にぶい橙色・7.5YR 7/3)	III(土壘) 3	
305	〃	皿	(28.0)	(3.1)	—	—	淡黄色・5Y 8/3 (にぶい黄褐色・7.10YR 7/4)	T 2 4	
306	備前	〃	(24.4)	(3.7)	(14.6)	—	暗赤褐色・7.5R 3/3 灰赤色・7.5R 4/2	T 4 3	
307	〃	鉢	(23.2)	(10.6)	—	—	暗赤灰色・5R 3/1 〃	T 1 3	
308	〃	摺鉢	(29.0)	(12.8)	(10.0)	—	にぶい赤色・7.5R 4/4 〃	T 5・8・9 3	
309	〃	〃	(38.8)	(4.8)	—	—	灰赤色・7.5R 3/4 〃	T 4 3	
310	〃	甕	(37.0)	(6.1)	—	—	暗赤褐色・2.5YR 2/3 暗赤灰色・2.5YR 3/1	T 9 3	
311	〃	〃	—	(7.3)	(38.6)	—	灰赤色・7.5R 6/2 灰黄褐色・10YR 6/2	T 9 3	
312	常滑	甕	(37.4)	(5.4)	—	—	黒褐色・7.5YR 3/1 灰赤色・2.5YR 4/2	T 9 3	
313	土師質土器	鍋	(21.6)	(3.0)	—	—	橙色・5YR 6/6 〃	T 5 3	
314	〃	〃	(20.6)	(3.5)	—	—	にぶい黄褐色・10YR 7/4 明黄褐色・10YR 7/6	T 4 3	
315	〃	鉢	(28.8)	(7.7)	—	—	にぶい橙色・7.5YR 6/4 にぶい褐色・7.5YR 5/4	T 5・8・9 3	
316	〃	鍋	(28.8)	(7.0)	—	—	暗赤褐色・5YR 3/2 明赤褐色・5YR 5/6	T 3・5 3	
317	〃	鉢	(20.6)	(9.3)	—	—	橙色・7.5YR 7/6 浅黄褐色・7.5YR 8/4	T 1 4	
318	〃	〃	(17.5)	(12.2)	—	—	橙色・5YR 6/6 〃	T 1 4	
319	〃	不明	(28.8)	(6.3)	—	—	浅黄褐色・10YR 8/3 浅黄褐色・10YR 8/4	T 2 5	
320	〃	火鉢	(40.2)	(18.6)	(38.2)	脚高2.7	にぶい橙色・7.5YR 7/4 にぶい褐色・5YR 7/4	T 4・6・8・9 3・4	

Tab. 17 出土土器法量表17

〔( ) は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 (内 断)	出土地区 層 位
			口径	器高	底径	高台高			
321	土師質土器	不明	—	(13.6)	—	—	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 2
							〃 6/4		3
322	瓦	—	全長 (8.8)	全幅 (8.9)	全厚 (1.7)	重量(g) 368.0	黒灰色		T 1
							〃		3
323	羽口	—	〃 (13.4)	直径 10.8	孔径 2.5	〃 1,070.0	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 1
							〃		3
324	〃	—	〃 (9.1)	〃 10.3	〃 2.3	〃 770.0	にぶい橙色・5YR 7/3		T 2
							橙色・2.5YR 7/6		3
325	土師質土器	火鉢脚	—	脚高 (5.5)	直径 4.1	〃 150.0	にぶい橙色・7.5YR 7/4		T 9
							〃		3
326	〃	埴塙	6.8	3.1	—	〃 82.0	暗赤灰色・10R 4/1		T 1
							〃		3
327	土製品	犬	全長 4.6	全幅 3.5	全高 2.5	〃 23.1	淡黄色・2.5Y 8/3		T 4
							—		4
328	土鉢	—	〃 3.5	直径 1.4	孔径 0.4	〃 7.5	にぶい橙色・7.5YR 6/4		T 4
							—		3
329	〃	—	〃 3.2	〃 1.4	〃 0.4	〃 5.0	にぶい橙色・7.5YR 6/4		T 4
							—		4
330	〃	—	〃 3.8	〃 1.5	〃 0.5	〃 8.3	橙色・7.5YR 6/6		T 1
							—		3
331	〃	—	〃 4.4	〃 1.5	〃 0.5	〃 9.2	橙色・2.5YR 7/6		T 1
							—		5
332	〃	—	〃 4.4	〃 1.4	〃 0.4	〃 6.8	にぶい赤褐色・2.5YR 4/4		T 6
							—		3
333	〃	—	〃 4.4	〃 1.3	〃 0.6	〃 5.8	にぶい黄橙色・10YR 7/3		T 6
							—		3
334	〃	—	〃 3.7	〃 1.2	〃 0.3	〃 4.5	にぶい赤褐色・2.5YR 5/4		表採
							—		—
335	〃	—	〃 4.3	〃 1.3	〃 0.4	〃 8.0	にぶい黄橙色・10YR 6/4		T 9
							—		4
396	砥石	—	〃 5.3	全幅 3.1	全厚 1.2	〃 26.9	石質—砂岩		T 5
							—		4

Tab. 18 出土金属器計測表1 [( )は復元及び残存値]

挿図 番号	種別	法 量 (cm)				出土地点	層 位	備 考
		全長	全幅	全厚	重量(g)			
336	円錐状製品	4.3	0.6	0.9	3.1	T 4	3	
337	〃	3.6	0.8	0.9	2.0	T 3	3	
338	〃	4.0	0.7	0.9	2.8	T 4	4	
339	〃	4.1	0.9	1.0	5.1	T 4	4	
340	〃	4.2	1.0	0.8	5.9	T 2	5	
341	〃	4.8	1.5	1.2	7.6	T 1	4	
342	引手金具	4.7	3.9	1.4	15.0	T 6	3	
343	飾金具	4.7	1.7	0.1	2.4	T 5	3	
344	火 挟	13.2	1.1	0.8	22.0	T 1	3	孔径3.5mm
345	彈 丸	1.2	1.2	1.2	8.2	T 5	3	
346	鉛 製 品	4.8	4.8	2.3	190.0	T 7	3	土器
347	鑿状工具	9.3	4.5	0.7	17.8	T 3	3	
348	針状製品	7.2	0.4	1.5	2.0	T 5	4	
349	火 箸	22.0	0.5	0.5	28.5	T 7	4	
350	鉄 釘	(2.6)	0.8	0.4	(1.7)	T 1	4	S X I 上
351	〃	(2.9)	0.5	0.5	(2.4)	T 7	3	
352	〃	(3.6)	0.9	0.5	(2.1)	T 4	3	
353	〃	(4.0)	1.1	0.5	(3.3)	T 4	4	
354	〃	(5.1)	1.1	0.6	(6.9)	T 1	3	
355	〃	(5.0)	1.2	0.7	(10.5)	T 1	3	

Tab.19 出土金属器計測表2 [( ) は復元及び残存値]

挿図 番号	種 別	法 量 (cm)				出土地点	層 位	備 考
		全長	全幅	全厚	重量(g)			
356	鉄 釘	(4.0)	1.0	0.4	(3.6)	T 6	埋土中	S K 1
357	〃	(3.9)	1.2	0.6	(6.0)	T 3	3	
358	〃	11.2	0.9	0.8	20.8	T 4	4	
359	〃	8.3	1.3	0.7	10.9	T 1	4	
360	〃	8.1	1.3	0.6	9.3	T 1	5	
361	〃	(5.3)	1.2	0.8	(6.0)	T 6	3	
362	〃	5.6	1.1	0.4	4.2	T 5	4	
363	〃	(5.3)	0.6	0.6	(6.6)	T 6	3	
364	〃	6.0	1.2	0.4	8.0	T 1	4	S X 1 上
365	〃	(3.4)	1.3	0.9	(10.8)	T 5	4	
366	〃	(7.9)	1.4	0.7	(9.7)	T 1	4	
367	〃	7.2	1.3	0.8	12.9	T 9	3	
368	〃	(6.9)	0.8	0.8	(7.7)	T 5	3	
369	〃	6.8	0.7	0.4	5.2	T 9	4	
370	〃	6.2	0.7	0.3	4.7	T 4	4	
371	〃	5.7	0.8	0.6	7.5	T 1	4	
372	〃	7.5	0.9	0.6	15.4	T 3	3	
373	〃	10.3	0.7	0.6	12.2	T 6	3	
374	〃	(5.3)	0.7	0.6	(5.8)	T 4	4	
375	〃	(4.8)	0.5	0.4	(3.6)	T 10	3	

Tab. 20 出土金属器計測表 3 (( ) は復元及び残存値)

挿図 番号	種 別	法 量 (cm)				出土地点	層 位	備 考
		全長	全幅	全厚	重量(g)			
376	鉄 釘	(6.1)	0.7	0.6	(7.5)	T 8	3	
377	棒状製品	7.9	0.5	0.5	5.6	T 4	4	
378	◇	9.3	0.4	0.8	8.0	T 3	4	
379	◇	9.6	0.5	0.6	13.2	T 1	3	
380	◇	(10.8)	0.4	0.4	(7.7)	T 6	埋土中	S K 1
381	◇	11.7	0.5	0.3	9.4	T 1	3	
382	◇	(9.7)	0.9	0.5	(11.3)	T 3	3	
383	◇	(6.1)	0.5	0.1	(1.9)	T 2	4	
384	◇	(10.0)	0.9	0.4	(11.5)	T 3	4	
385	◇	12.0	1.3	0.7	45.0	T 1	4	
386	◇	(3.8)	1.1	0.5	(5.2)	T 7	3	
387	鉄 釘	7.1	0.5	0.5	9.8	T 7	3	
388	◇	8.5	0.6	0.5	21.8	T 10	3	
389	◇	5.9	0.6	0.5	6.9	T 1	4	
390	◇	6.5	0.4	0.6	5.5	T 9	3	
391	◇	4.0	0.3	0.4	3.3	T 10	3	
392	不 明	3.7	0.6	0.6	7.9	T 1	4	
393	◇	5.0	0.6	0.6	9.5	T 1	4	孔径0.5cm
394	◇	4.0	0.6	0.6	5.2	T 1	4	S X 1 上 孔径0.7cm
395	環状製品	3.4	3.1	0.5	7.6	T 8	3	

Tab. 21 出土銭計測表 (( ) は復元及び残存値)

挿図 番号	銭種	初 鑄 年 次		銭 径 (mm)		量目 (g)	出土地点	層 位	備 考
		年号	西暦	外径	内径				
397	開元通寶	武徳4年	621	(24)	(21)	(1.6)	T 2	4	破片
398	至道元寶	至道元年	995	25	17	2.4	W	2	左側に2孔あり。孔径3mm
399	至道元寶	至道元年	995	25	18	2.4	T 2	4	
400	天禧通寶	天禧元年	1017	25	20	3.4	T 2	4	
401	熙寧元寶	熙寧元年	1068	24	20	2.1	T 9	4	
402	熙寧元寶	熙寧元年	1068	25	20	2.4	T 2	4	
403	熙寧元寶	熙寧元年	1068	23	17	1.8	T 5	3	
404	元豊通寶	元豊元年	1078	24	19	3.4	T 1	4	
405	紹聖元寶	紹聖元年	1094	24	19	2.4	T 5	4	
406	元祐通寶	元祐元年	1086	24	20	2.5	T 4	3	
407	政和通寶	政和元年	1111	25	21	2.7	T 2	4	
408	不 明	—	—	24	19	3.1	T 2	3	磨耗
409	〃	—	—	24	—	2.1	T 6	3	〃
410	〃	—	—	(24)	(20)	(1.2)	T 6	4	〃
411	〃	—	—	—	—	(0.5)	T 6	3	破片
412	無 名 銭	—	—	—	—	(0.3)	T 4	4	〃
413	〃	—	—	(18)	—	(0.5)	T 3	3	
414	〃	—	—	(20)	—	(0.6)	T 9	4	
415	〃	—	—	(16)	—	(0.3)	T 4	4	
416	〃	—	—	18	—	0.7	T 2	5	
417	寛永通寶	寛永13年	1636	25	19	2.5	T 10	3上	土墨
418	〃	〃	〃	24	19	3.2	T 10	3上	〃

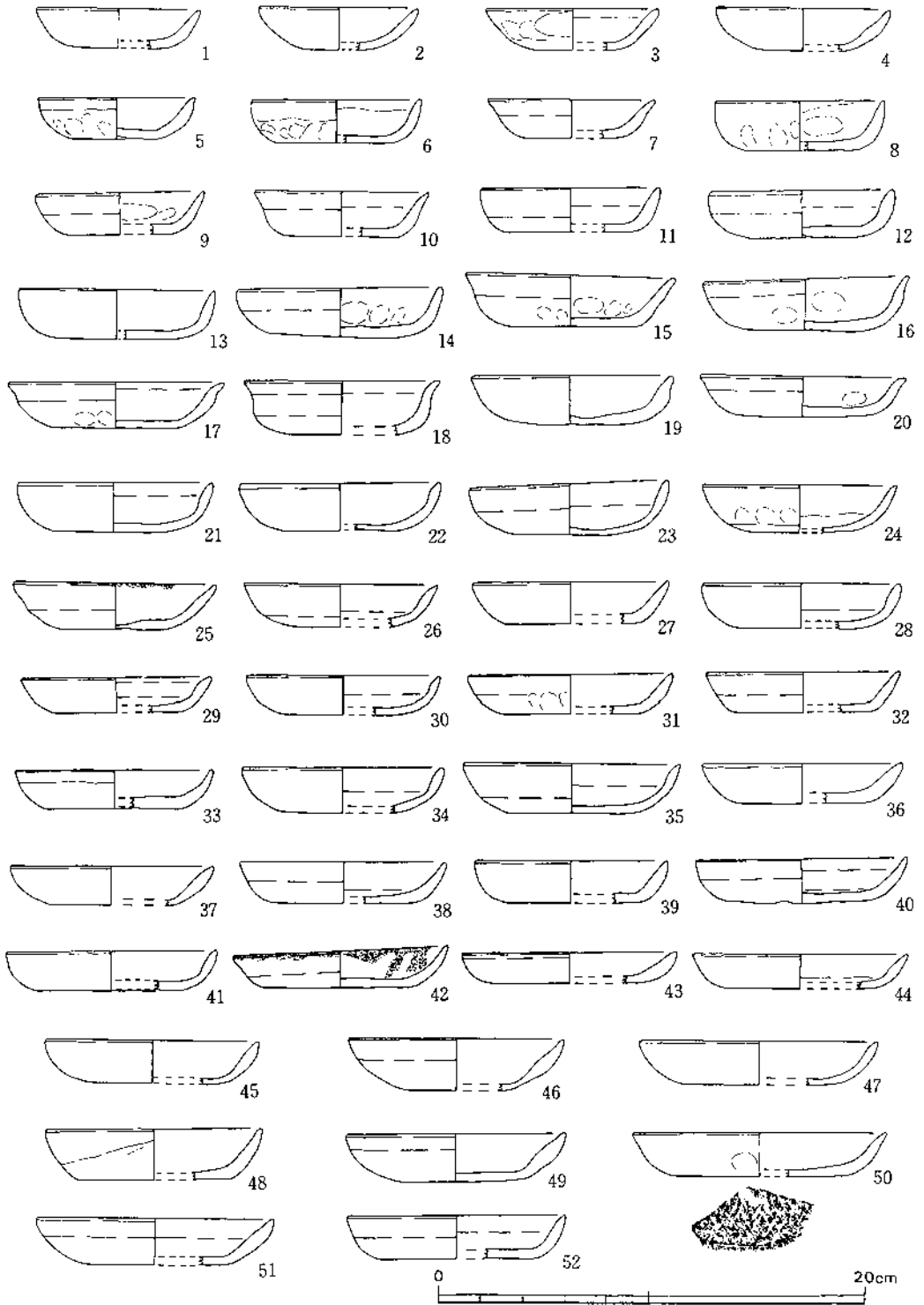


Fig.14 土師質土器 1 (皿)

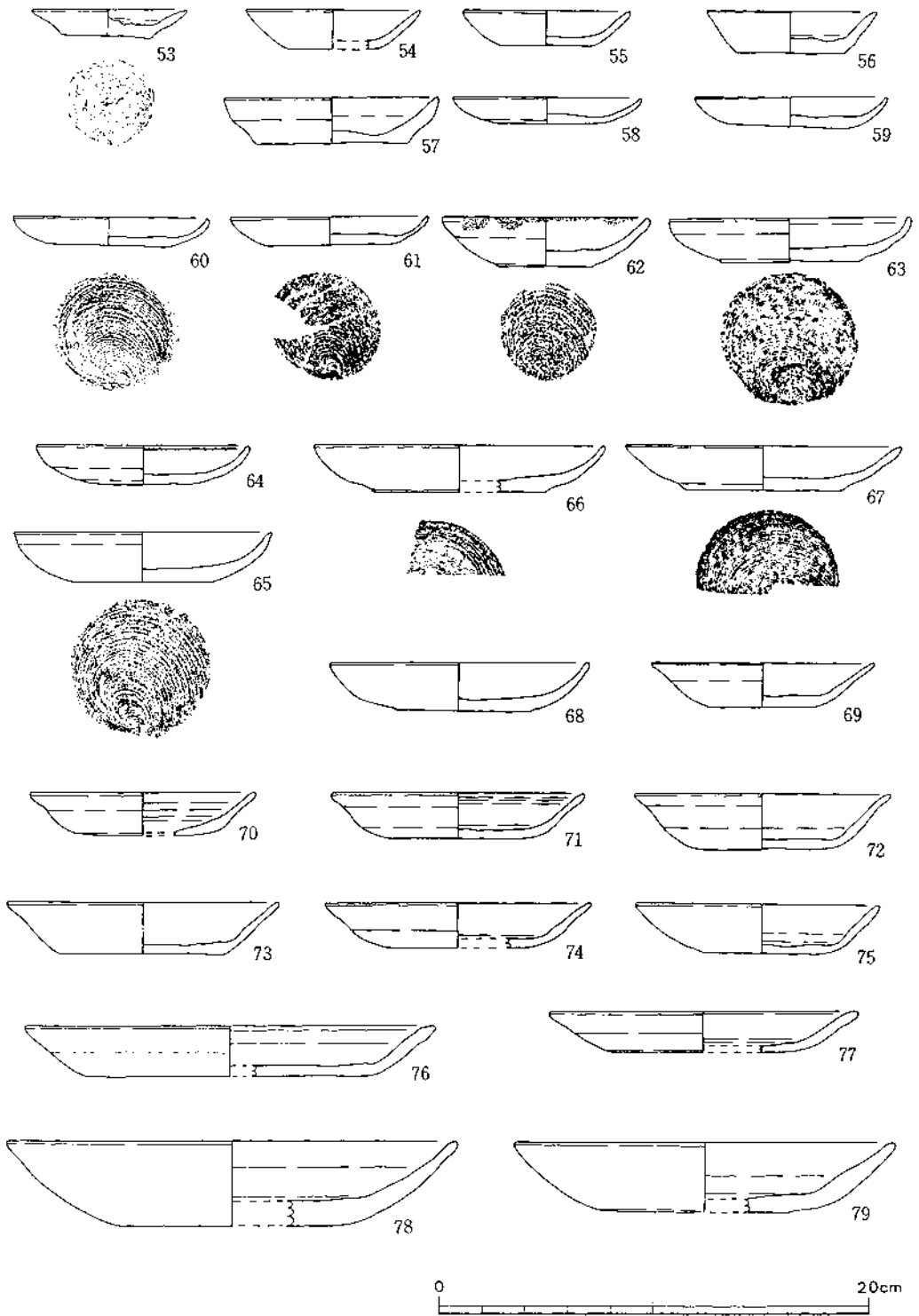


Fig.15 土師質土器 2 (小皿・皿)



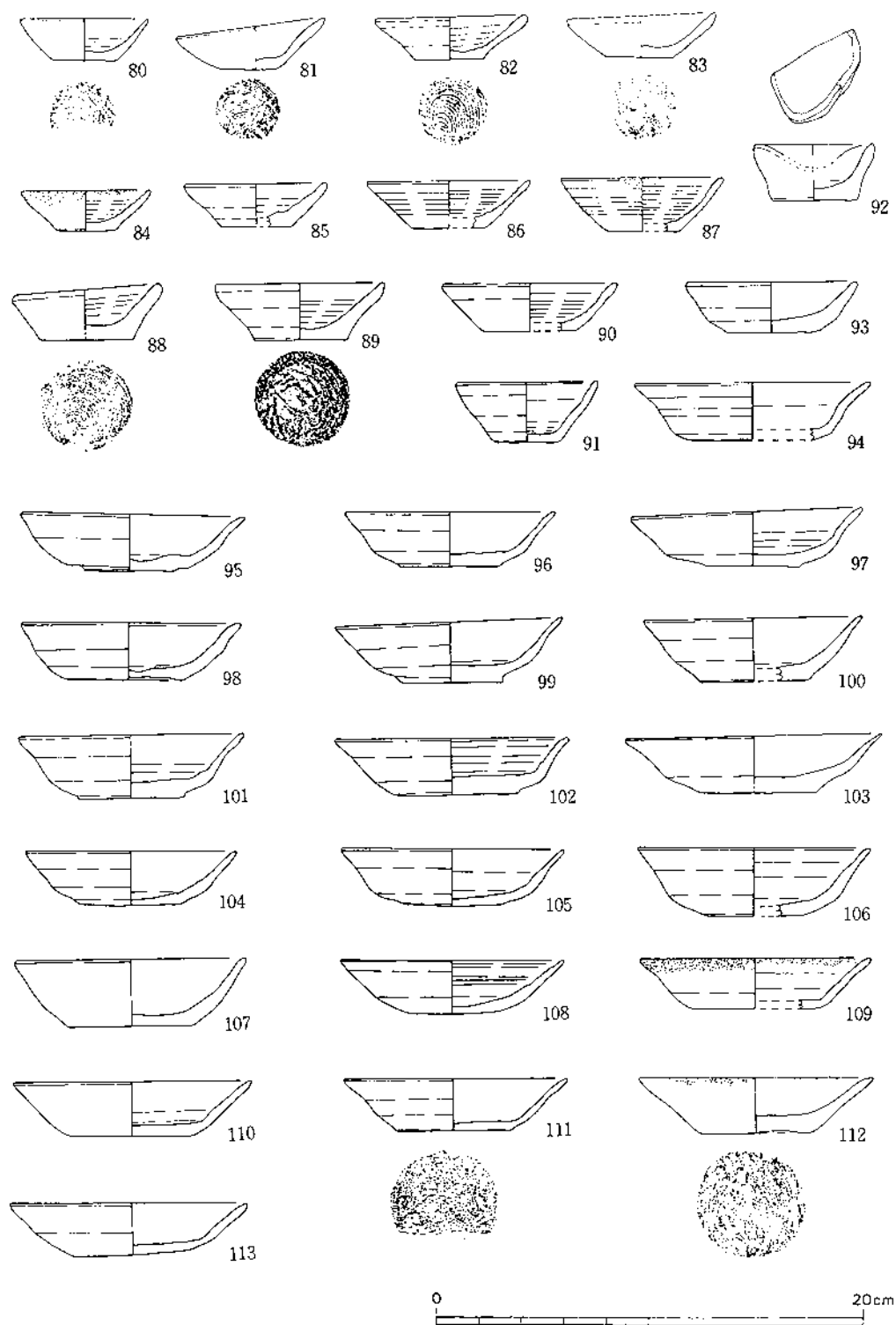


Fig. 16 土師質土器 3 (小杯・杯)

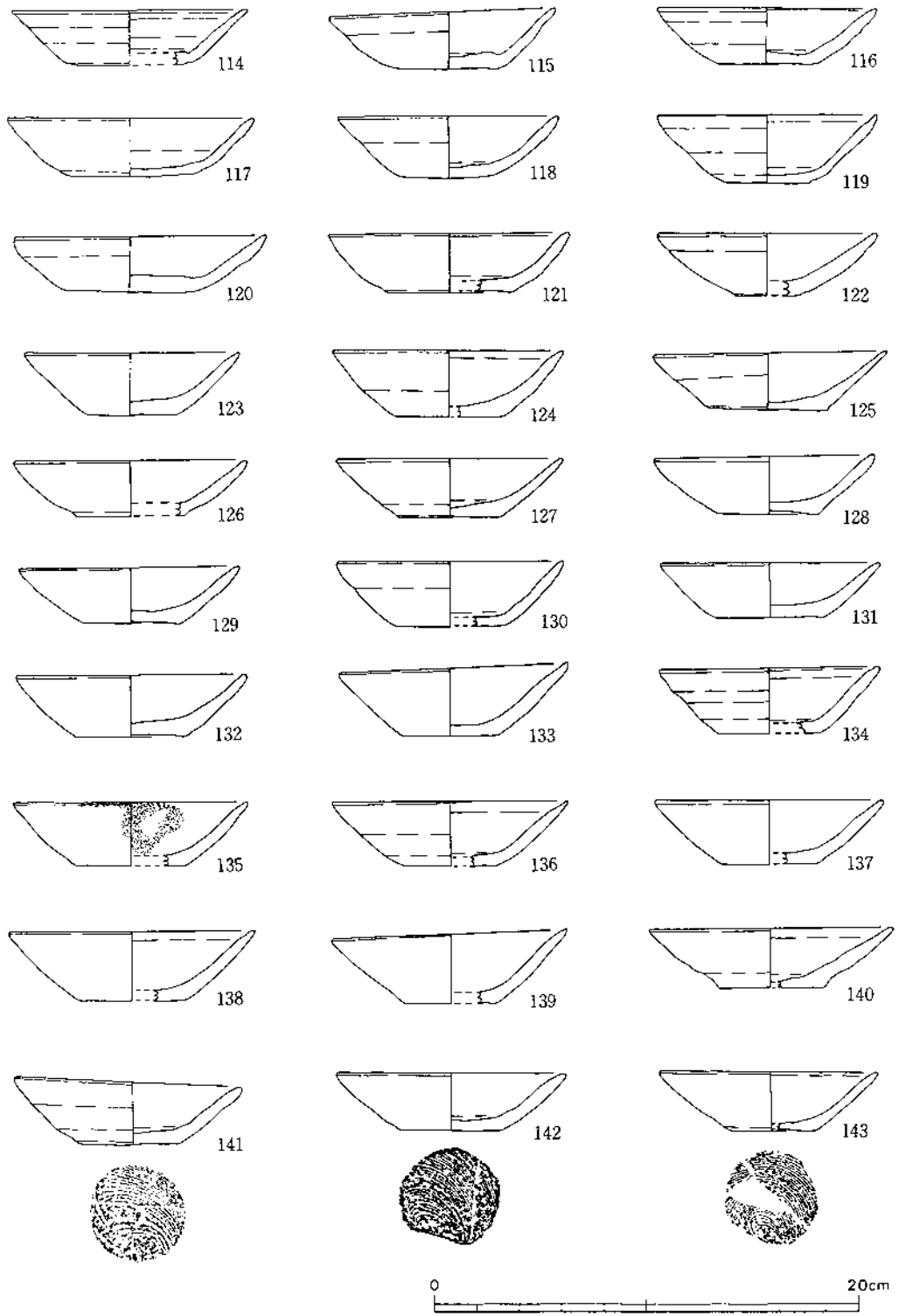


Fig. 17 土師質土器 4 (杯)

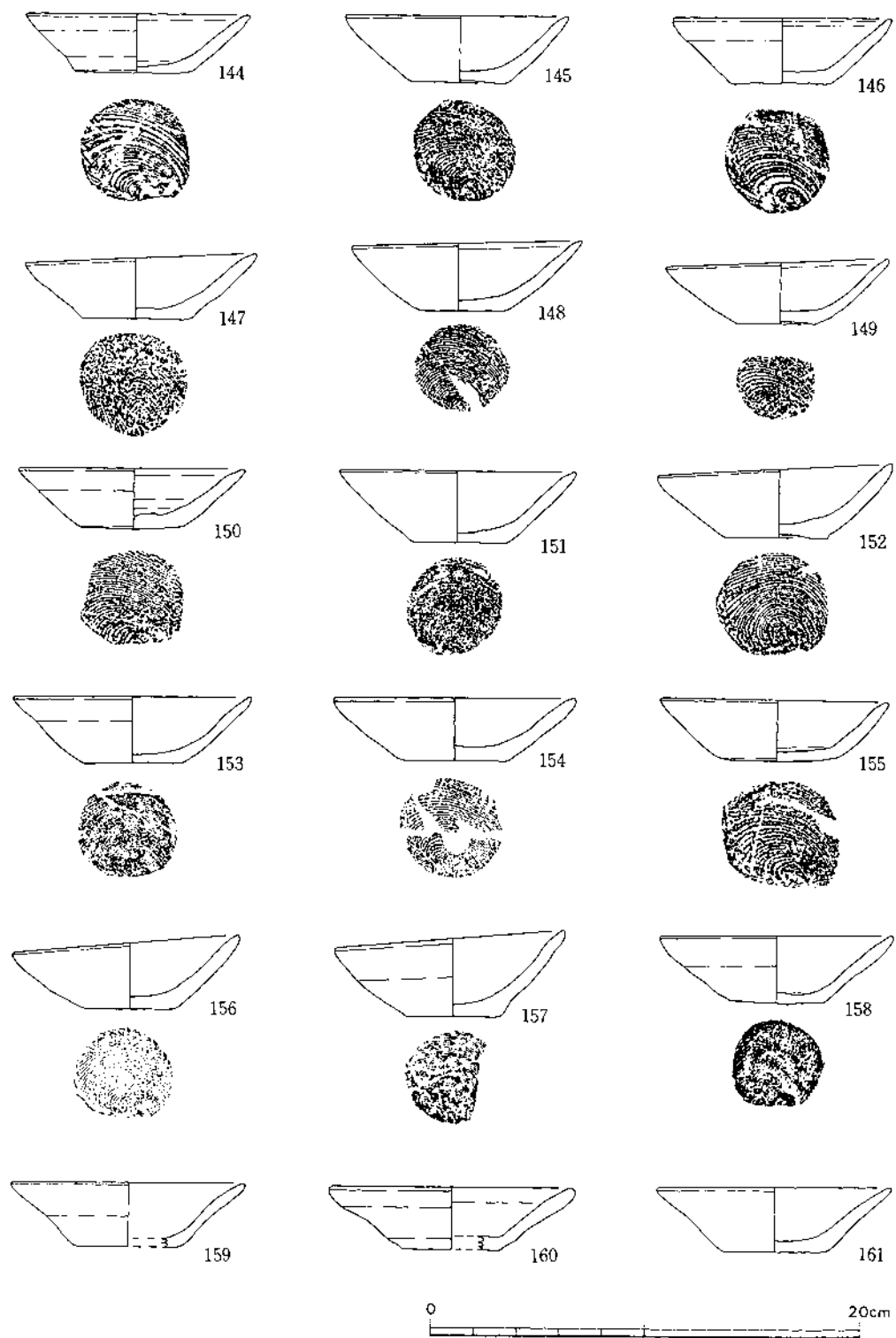


Fig. 18 土師質土器 5 (杯)

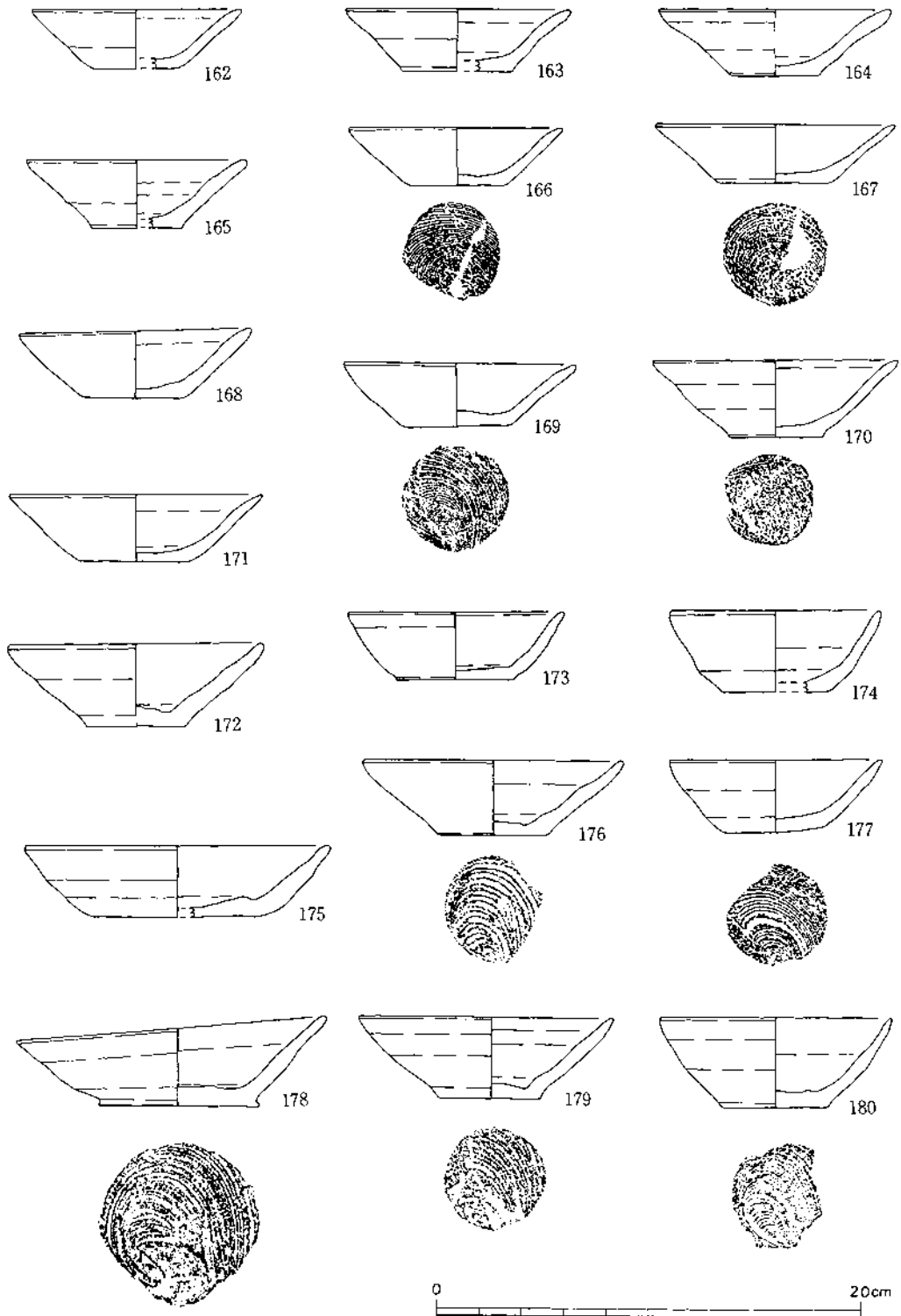


Fig. 19 土師質土器 6 (杯)

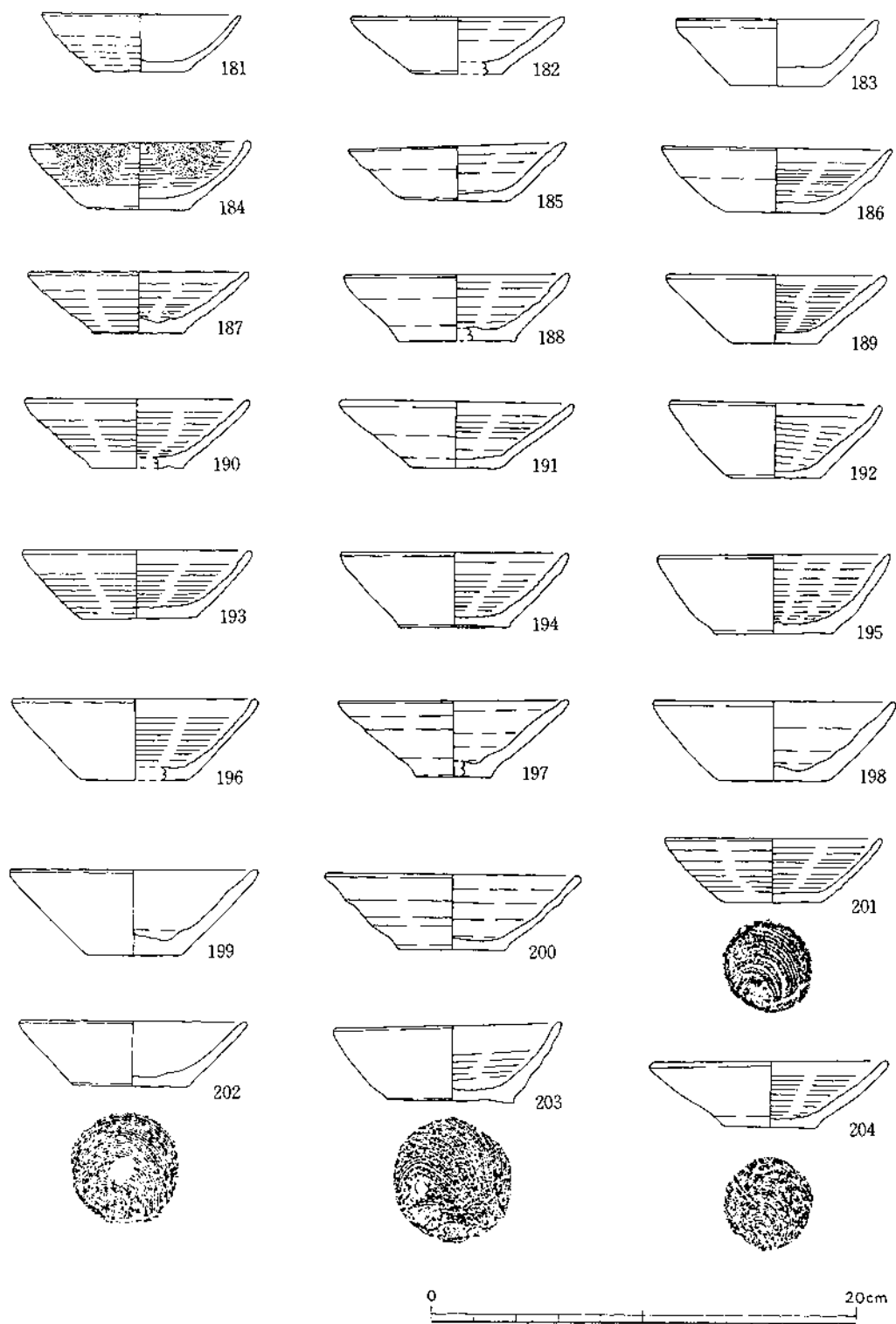


Fig. 20 土師質土器 7 (杯)

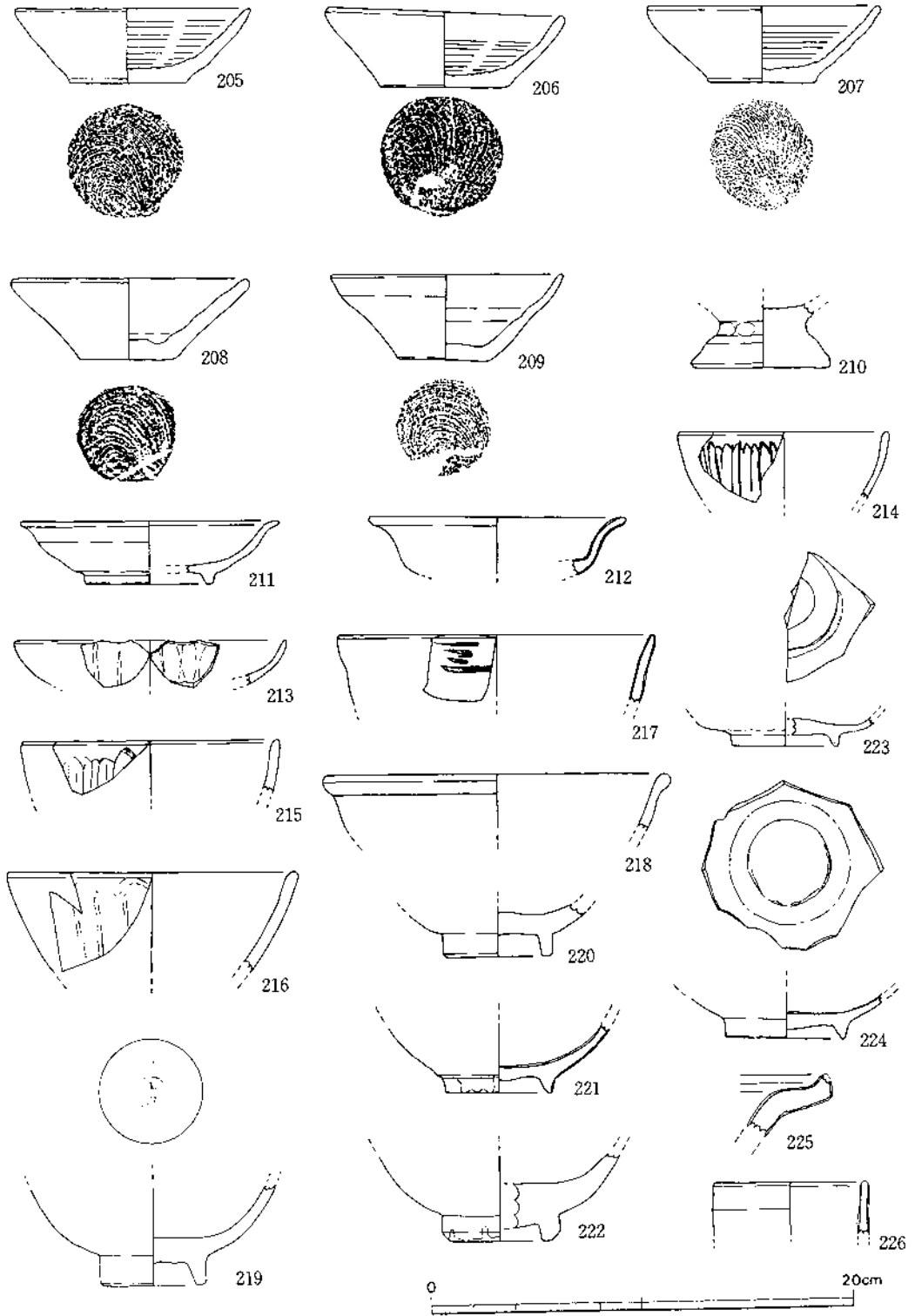


Fig. 21 土師質土器 8 (杯)・青磁

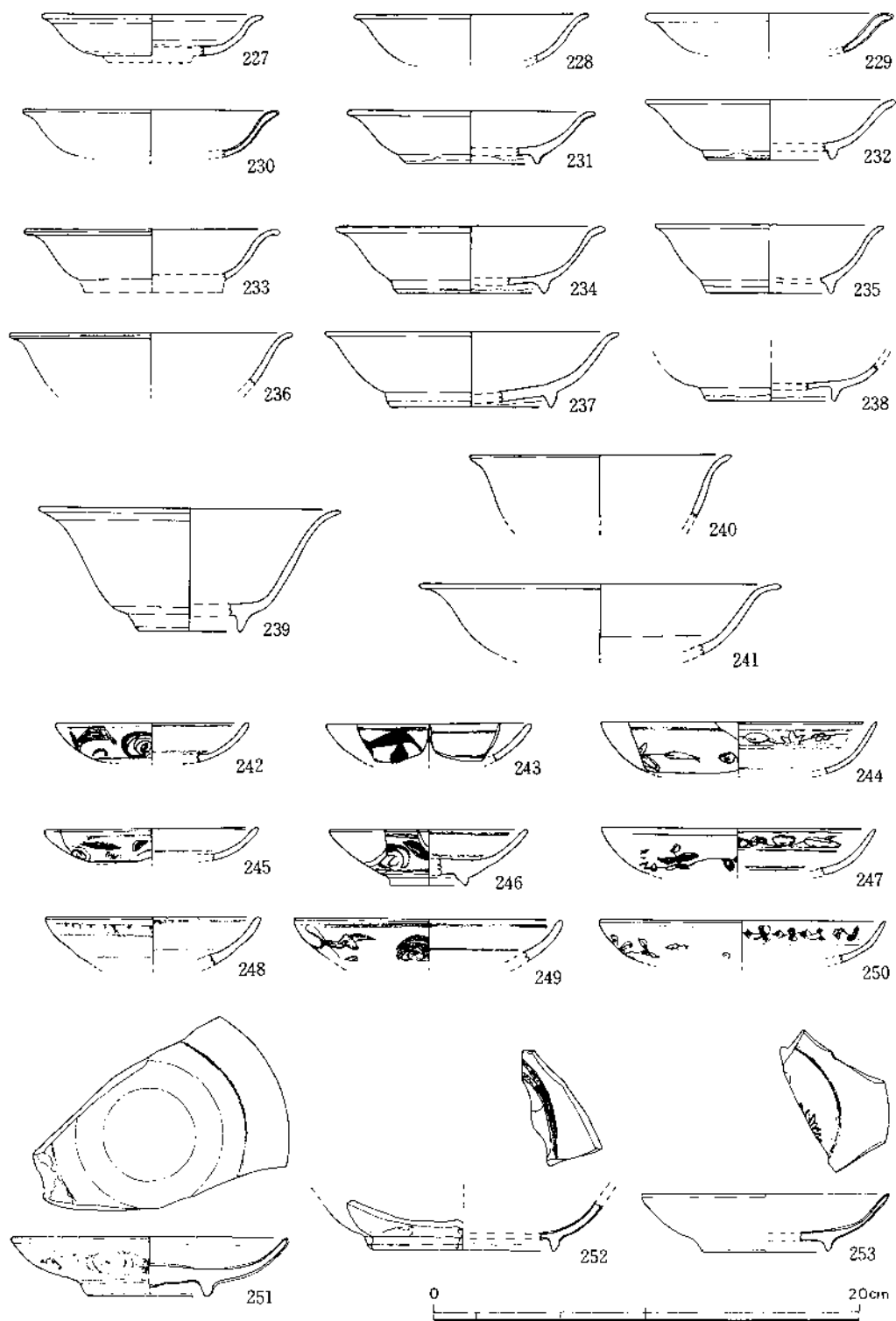


Fig. 22 白磁・染付 1

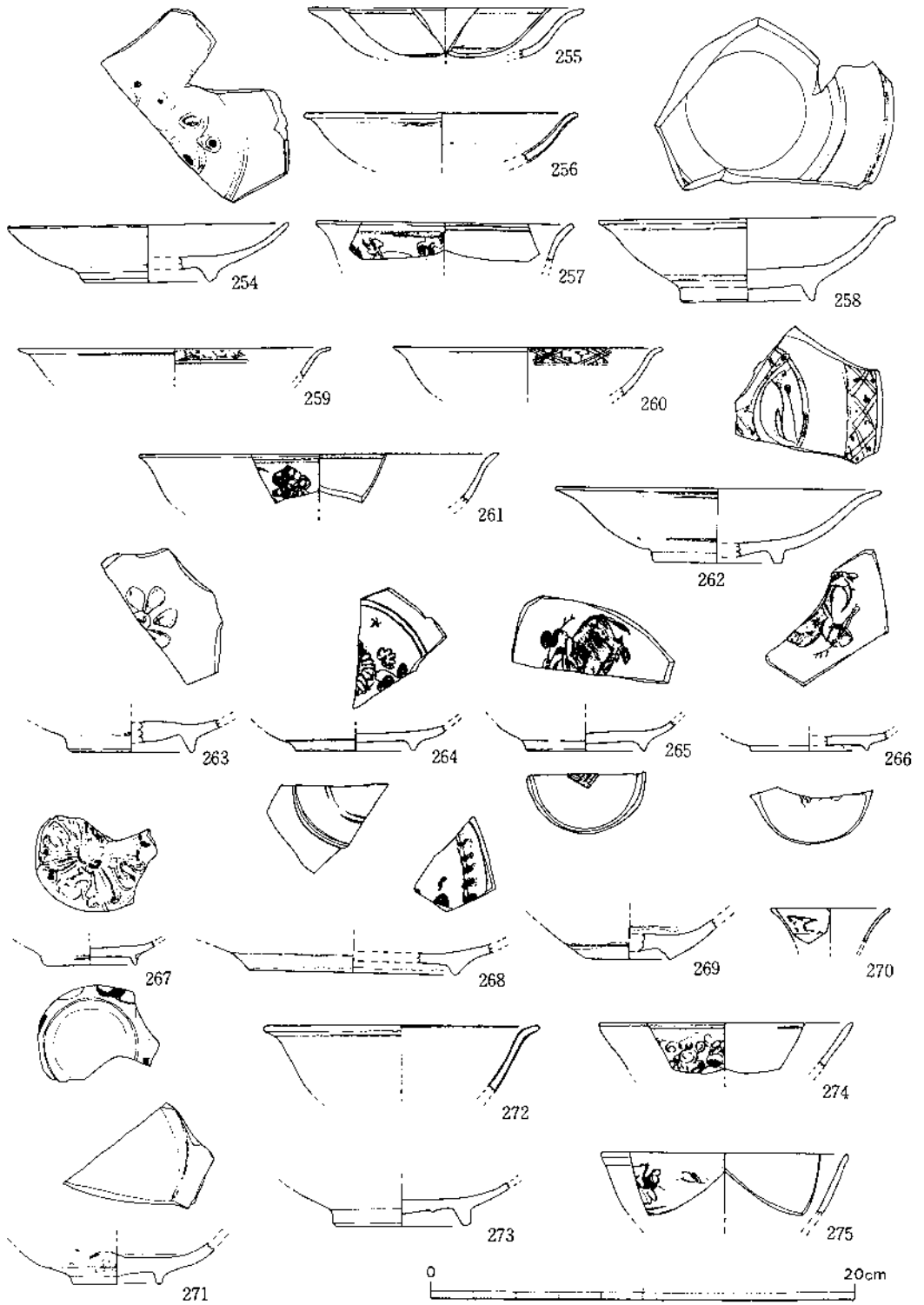


Fig. 23 染付 2



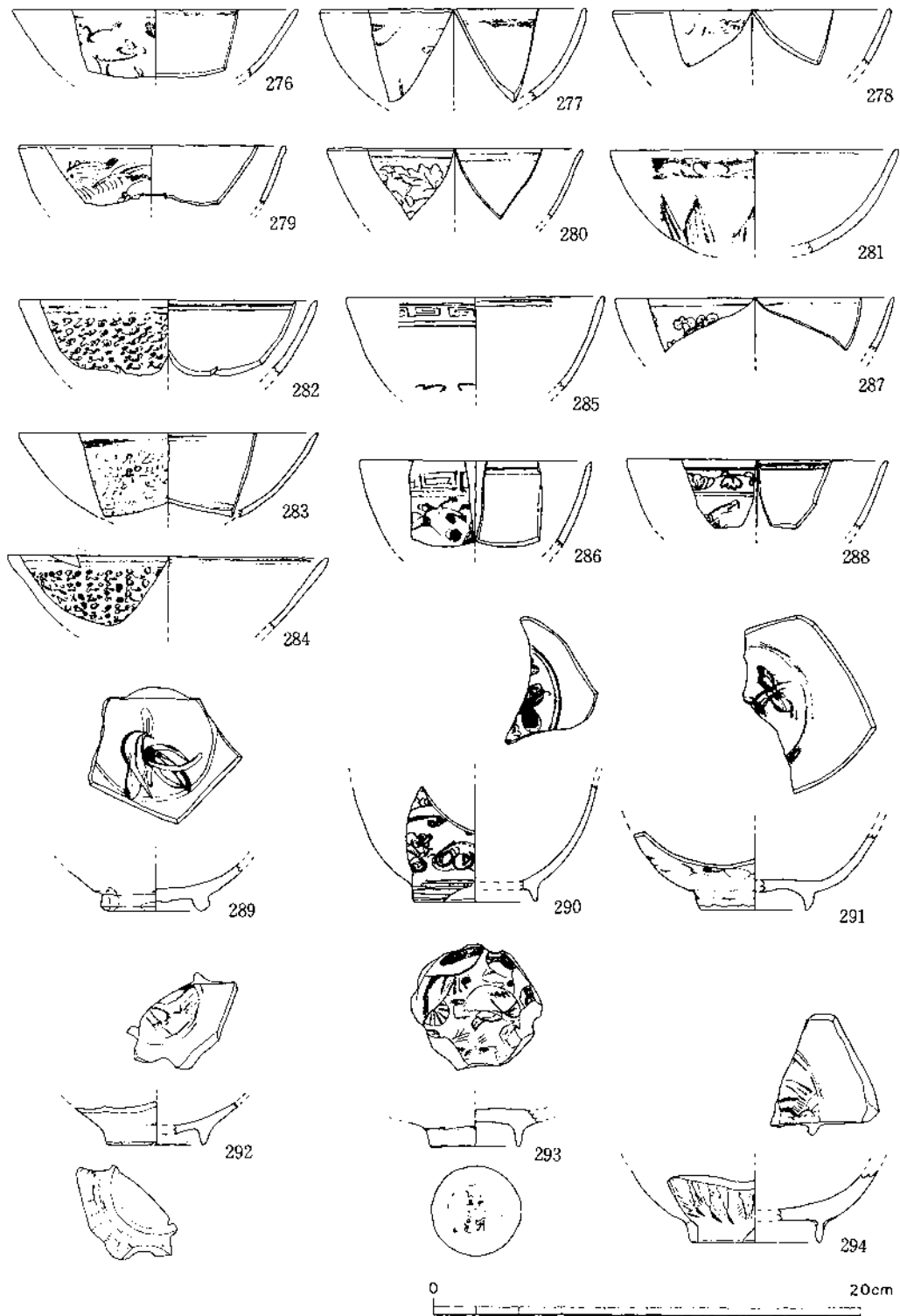


Fig. 24 染付 3

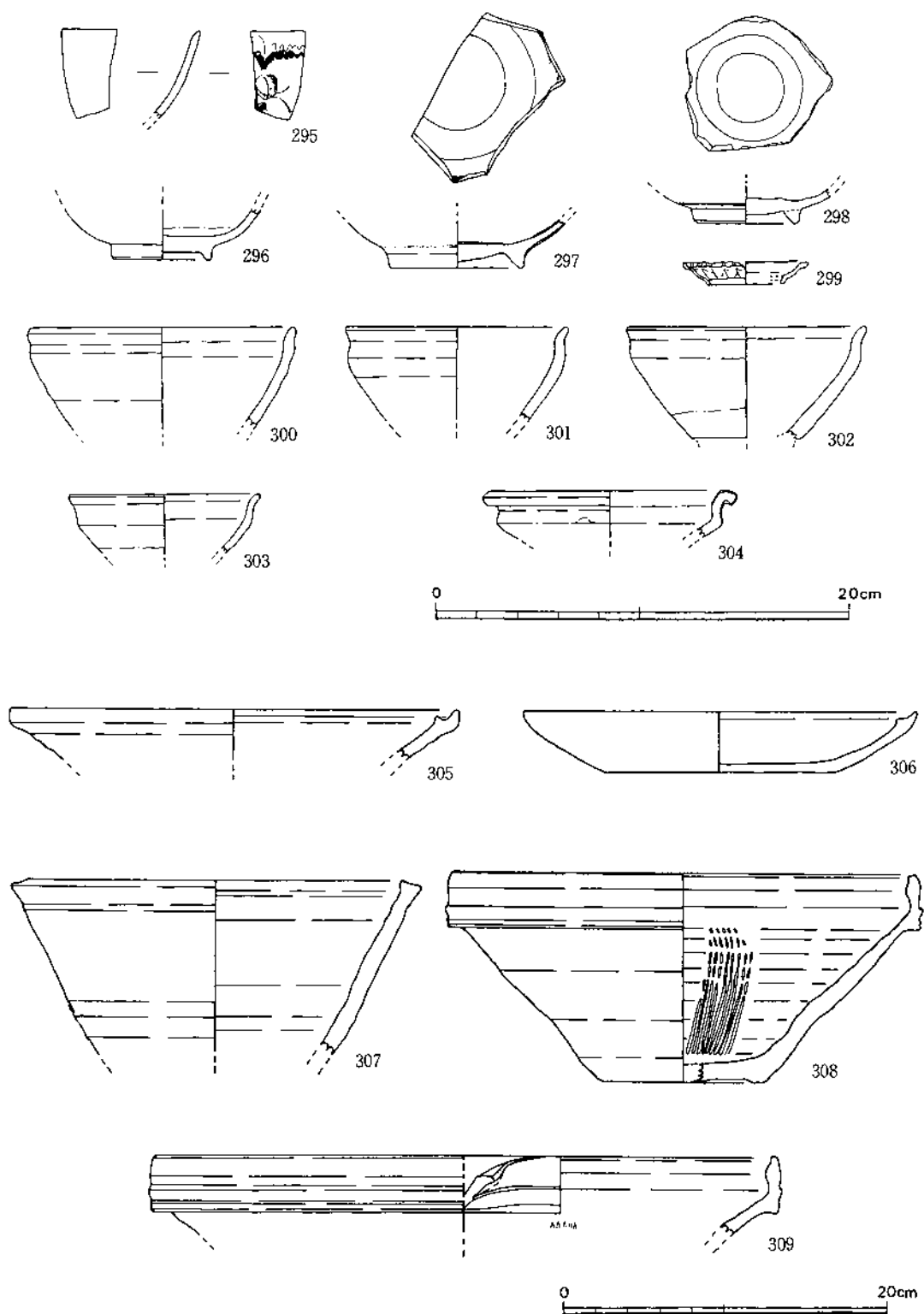


Fig. 25 染付4・瀬戸、美濃系・備前1

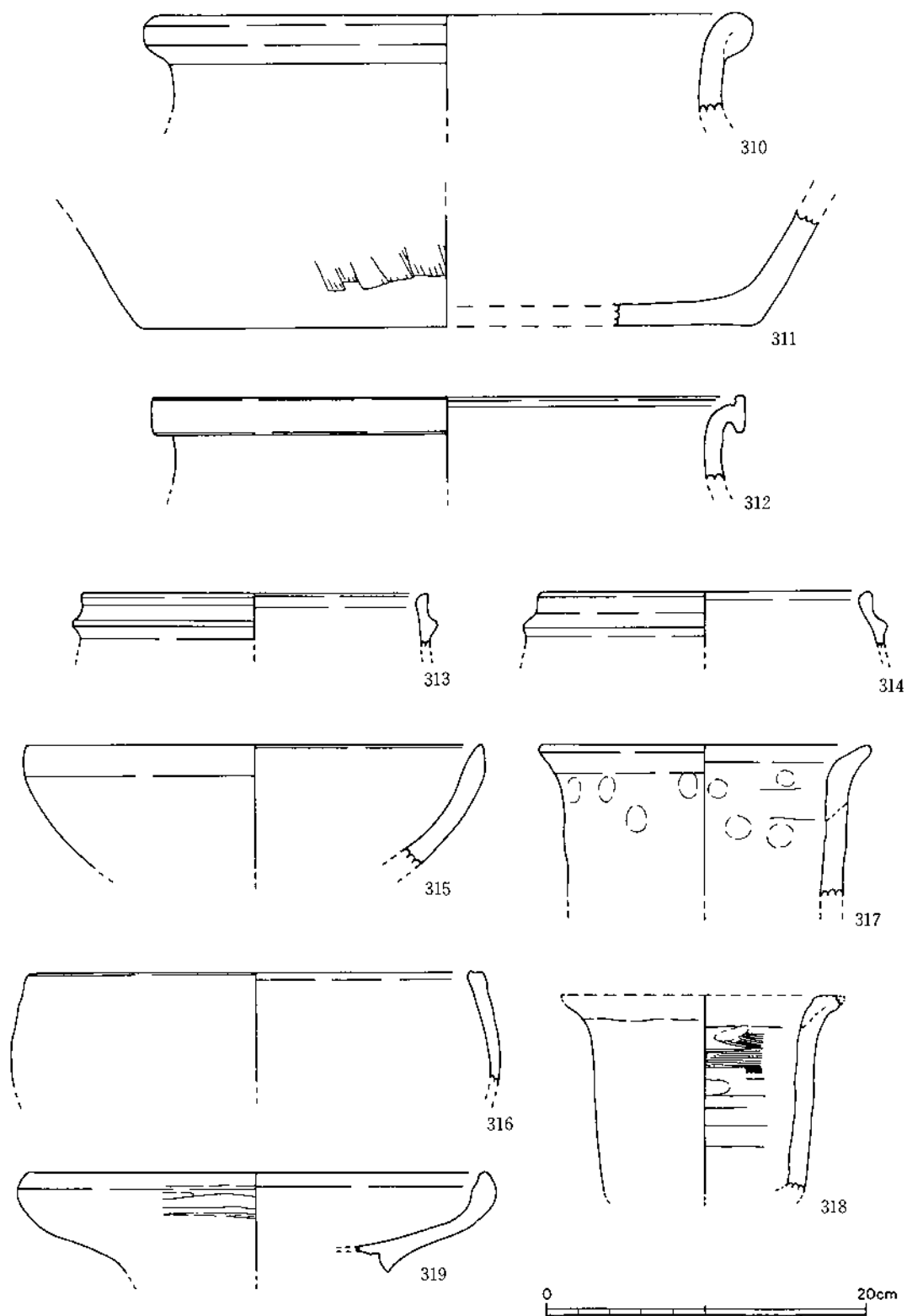


Fig. 26 備前 2・常滑・土師質土器

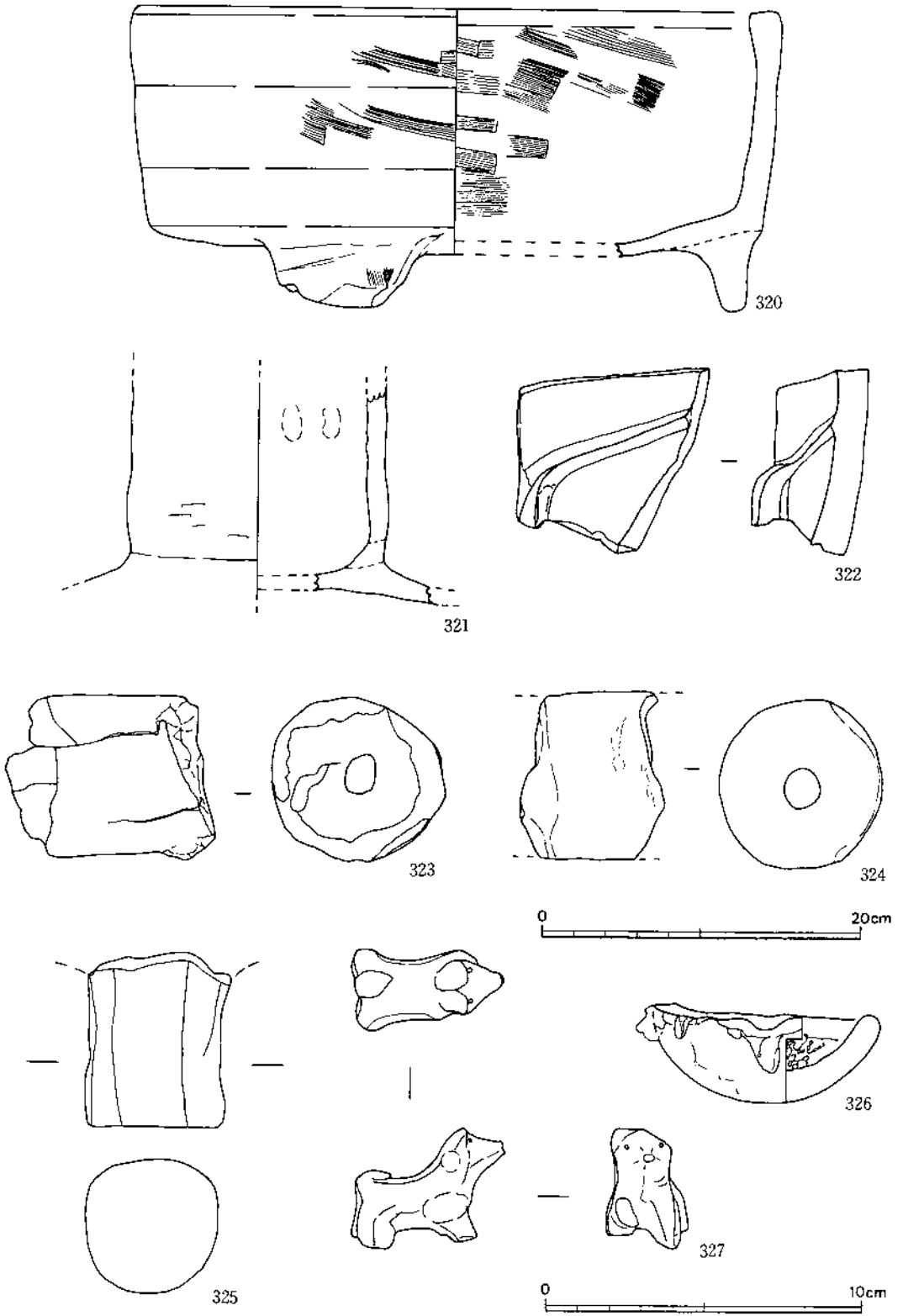


Fig. 27 土師質土器・瓦・羽口・埴塙・土製犬

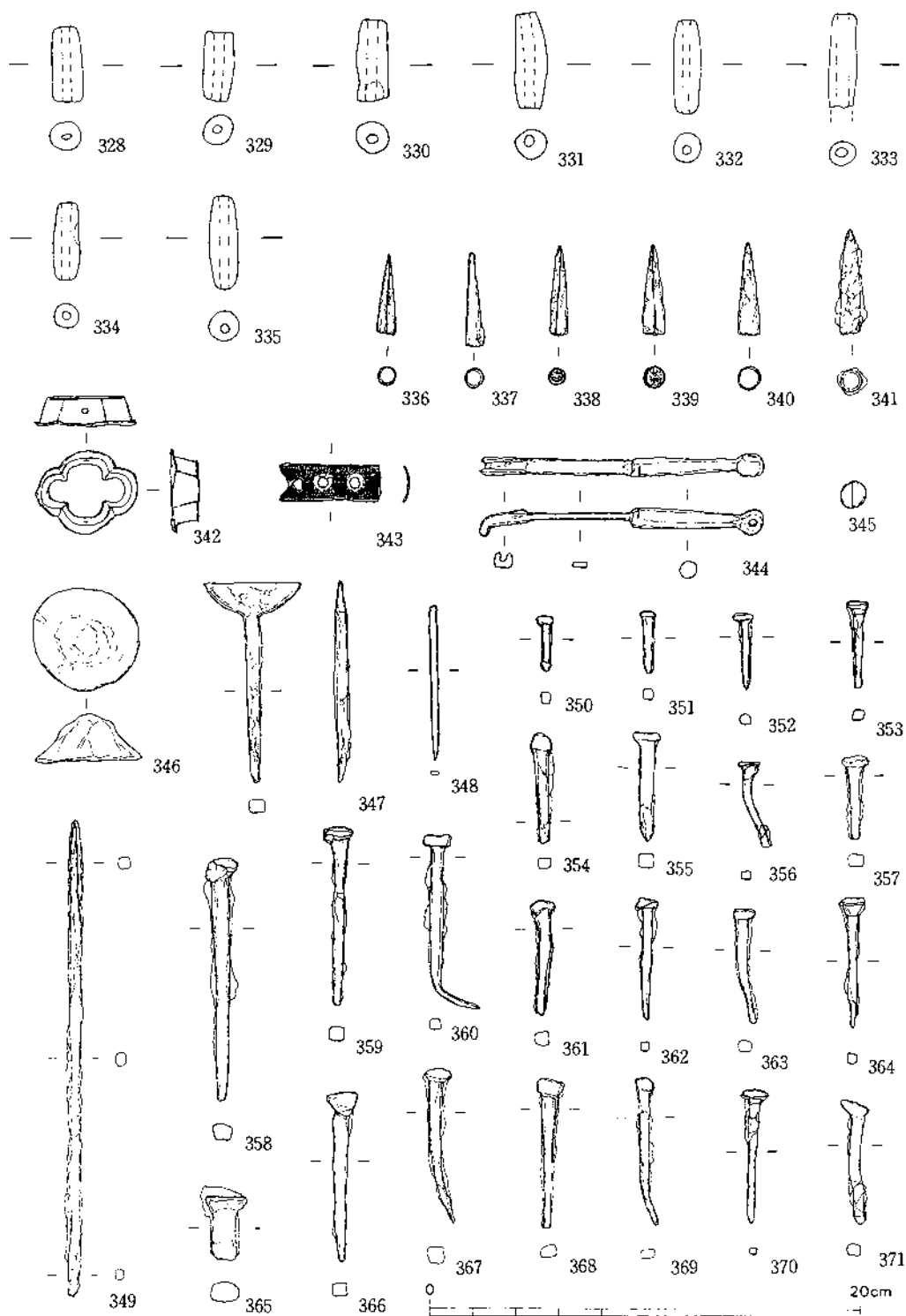


Fig. 28 土錘・金属製品 1

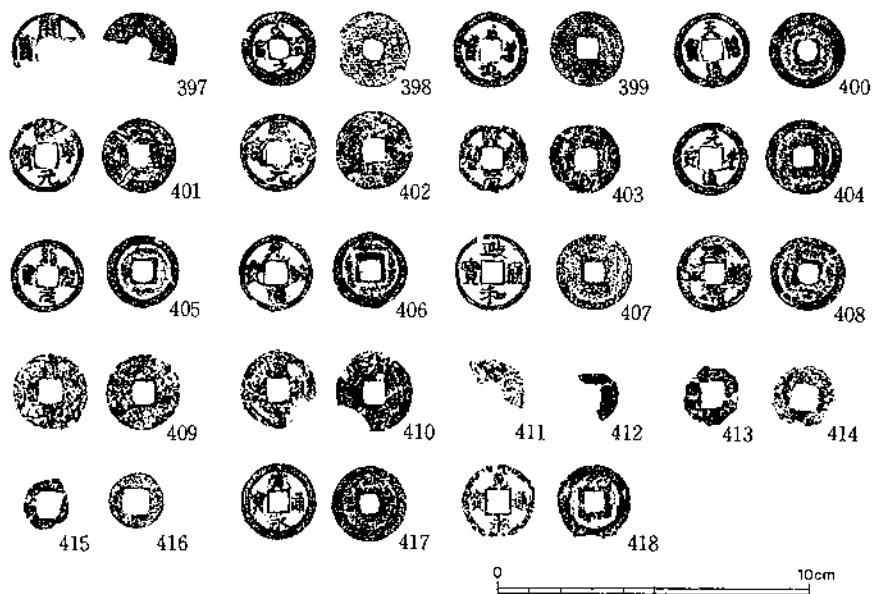
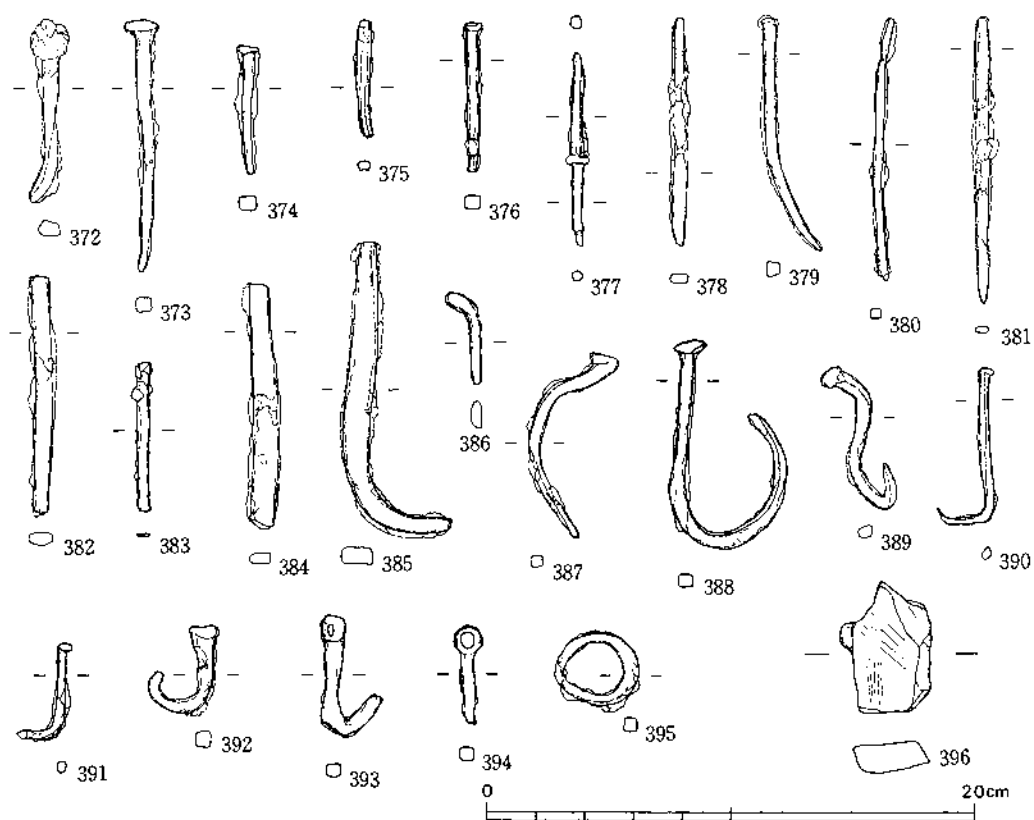


Fig. 29 金属製品2・砥石・出土銭

# 写真図版







遠 景 (東より)



遠 景 (南より)

PL. 2



T区 調査前 (東より)



T区 調査前 (北より)



T区 調査前（北西より）

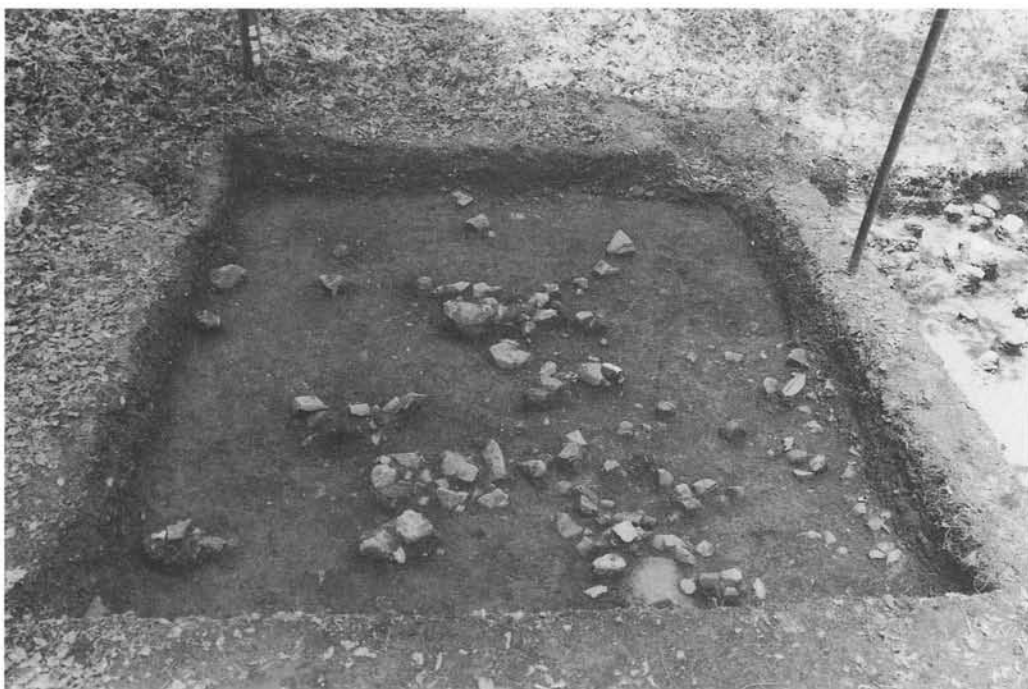


T区 虎口部（南より）

PL. 4



T 8 区 調査状況



T 9 区 調査状況



T11区 土壘石積み（東より）



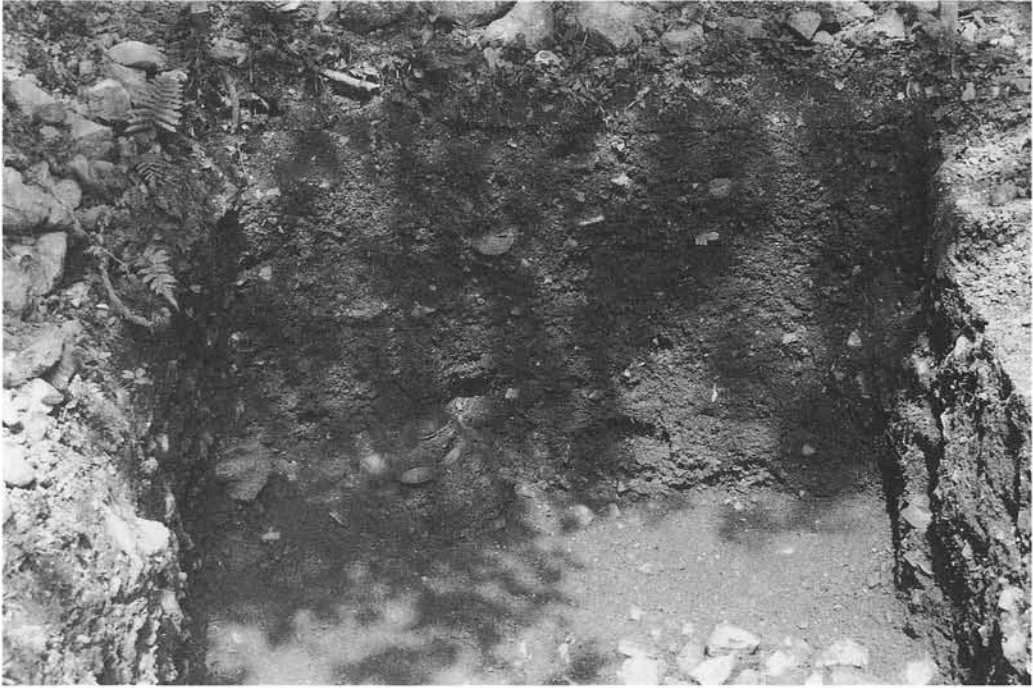
T11区 土壘石積み（南より）



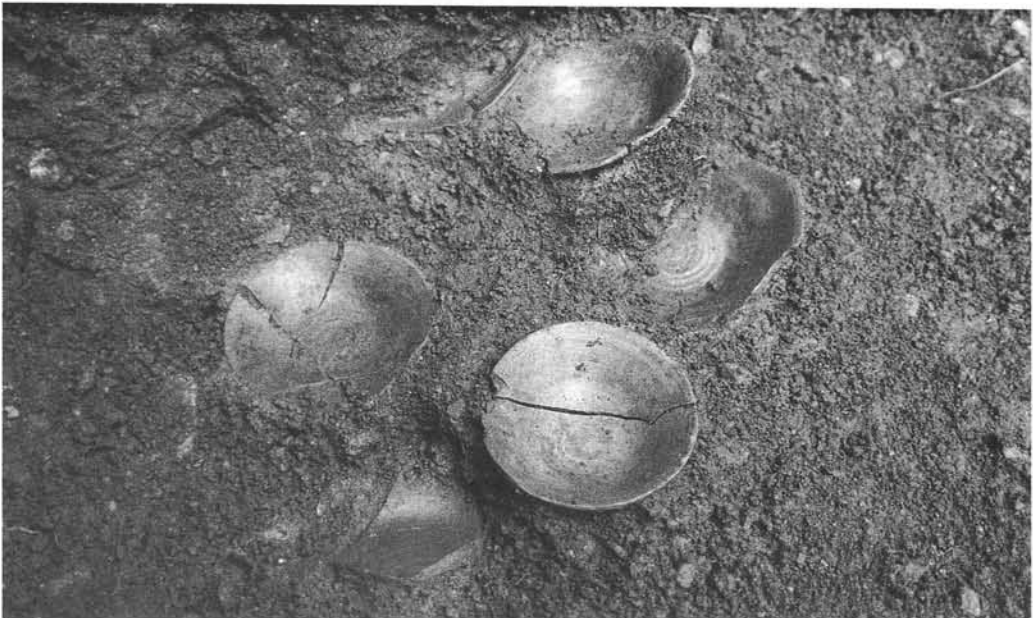
T区 拡張前 調査区全景（南西より）



T区 拡張前 調査区全景（東より）



T1区 拡張前 東壁セクション



T1区 拡張前 東壁土師質土器出土状態

PL. 8



調査区 全景（東より）



調査区 全景（南東より）





調査区 全景（北より）



調査区 全景（北西より）



T1・2区 東壁セクション



T1区 北壁セクション



SX1 検出状態



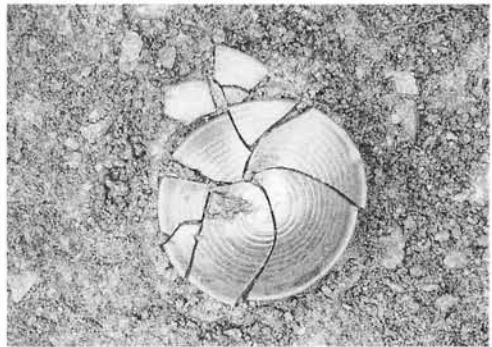
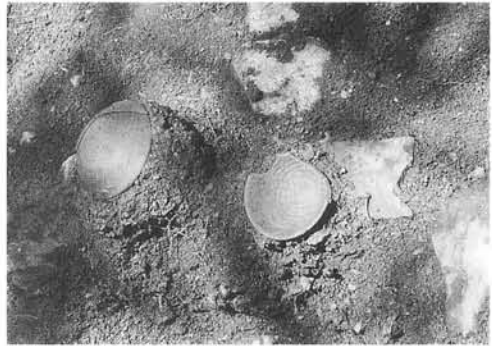
SX1 全景



SX1 断割状態



SX1 断面セクション



遺物出土状態 1

PL. 14



遺物出土状態 2



PL. 16



四ノ段南部郭 調査前（南より）



四ノ段南部郭 虎口部（東より）





U区 全景



U区 北壁セクション



V区 全景



W区 全景

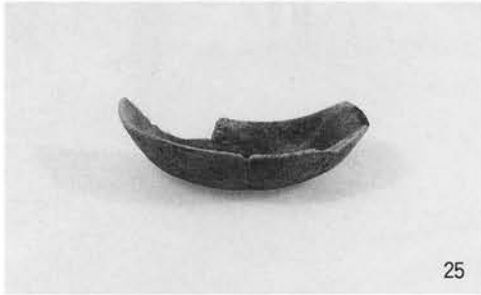
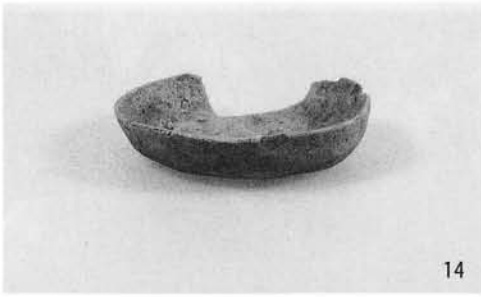


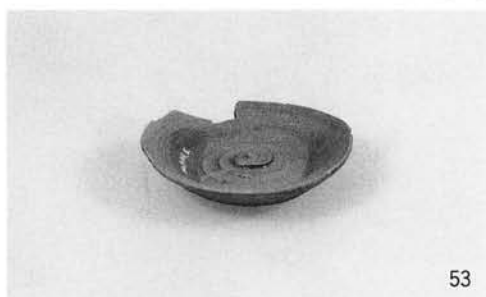
X区 調査前 (北より)



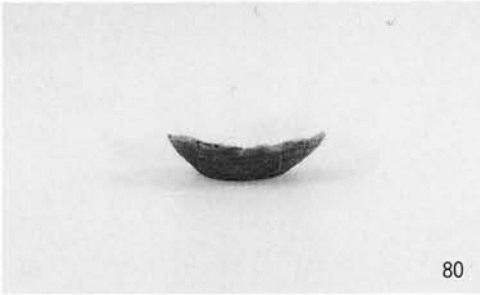
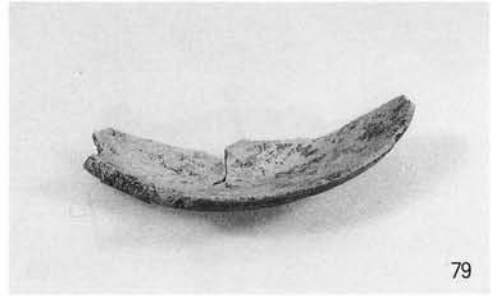
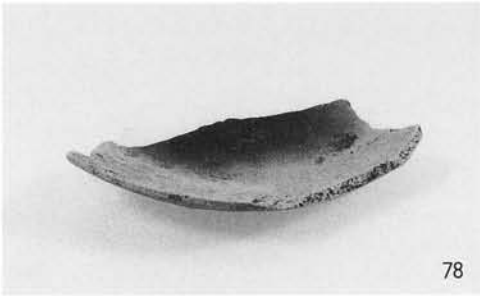
X区 全景

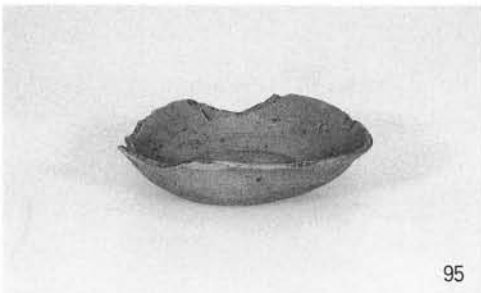
PL. 20



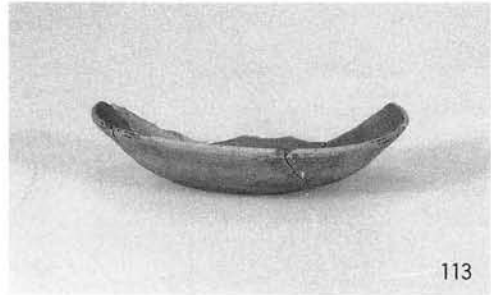


PL. 22

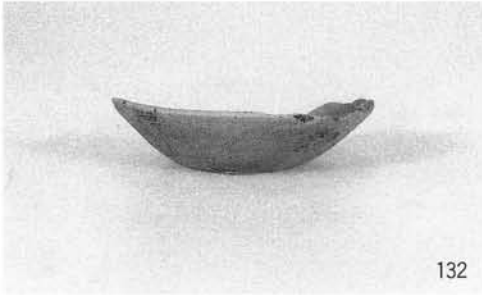
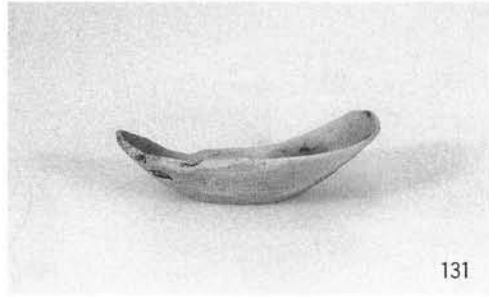




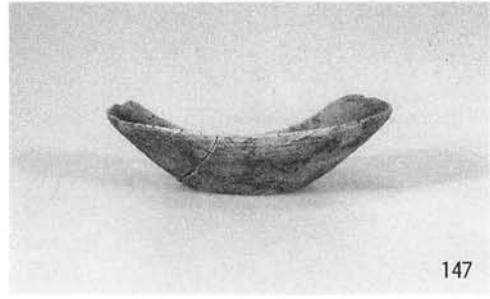
PL. 24

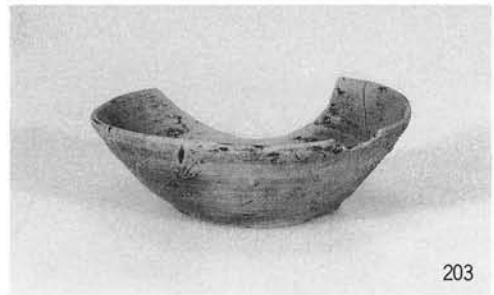
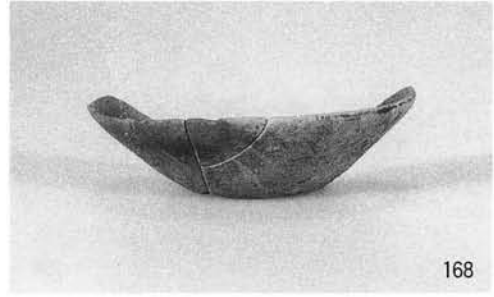


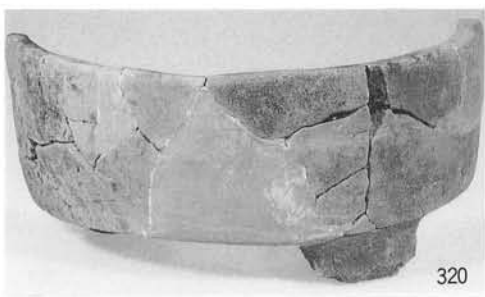


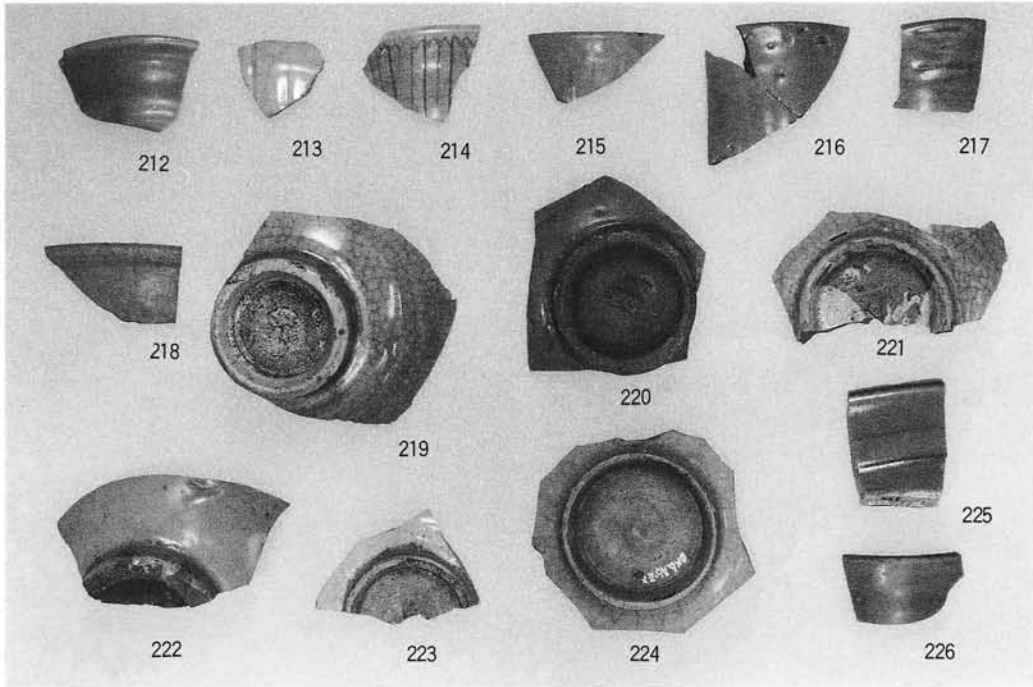


PL. 26

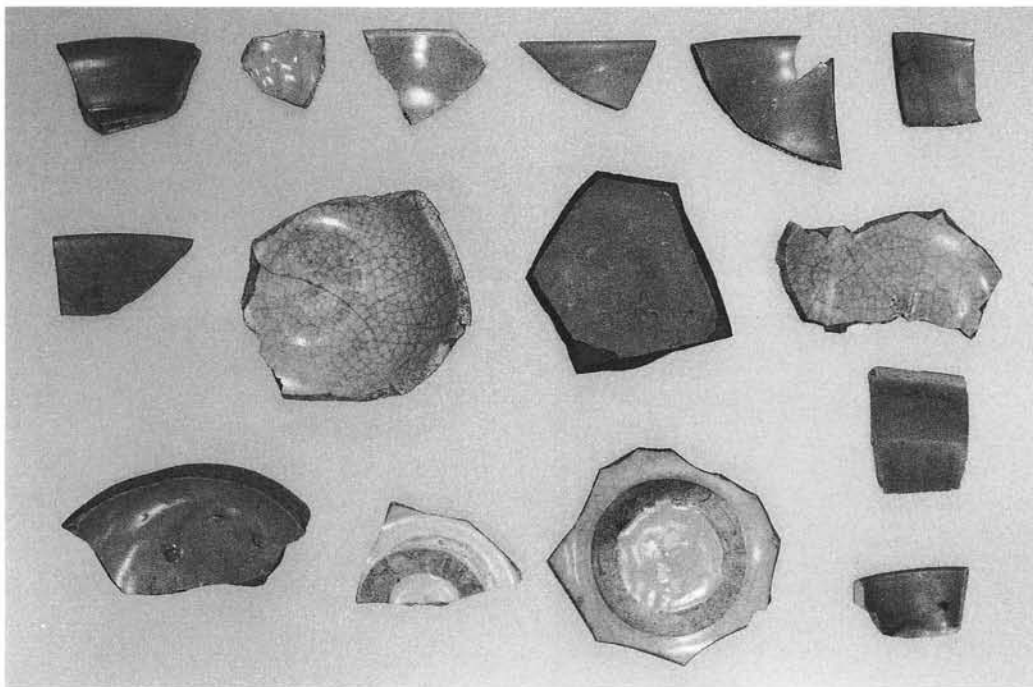




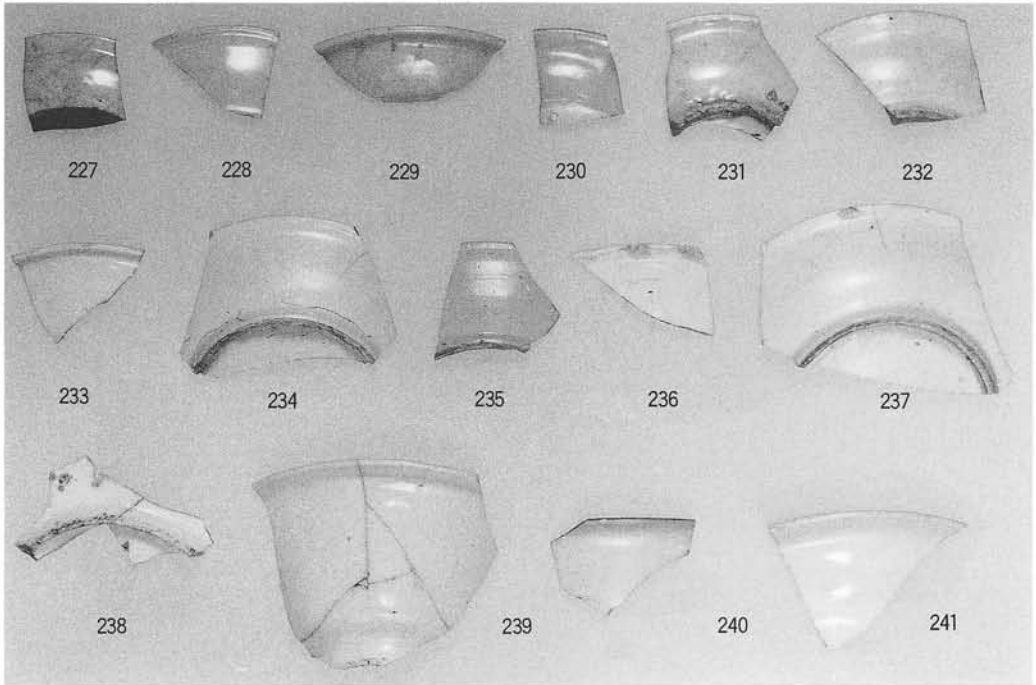




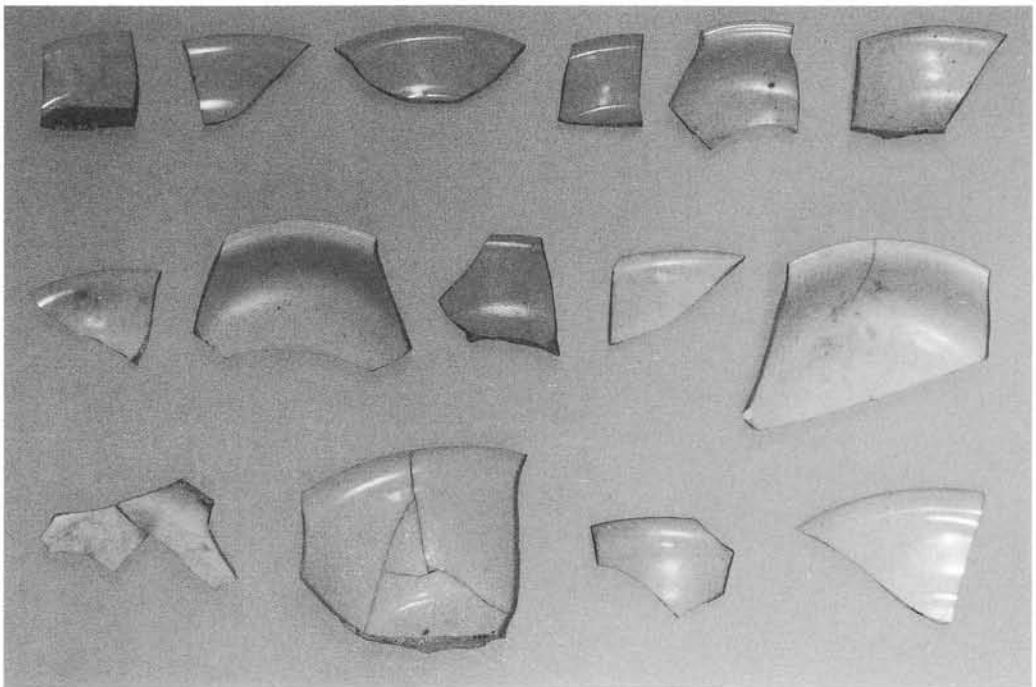
青磁 1 (外面)



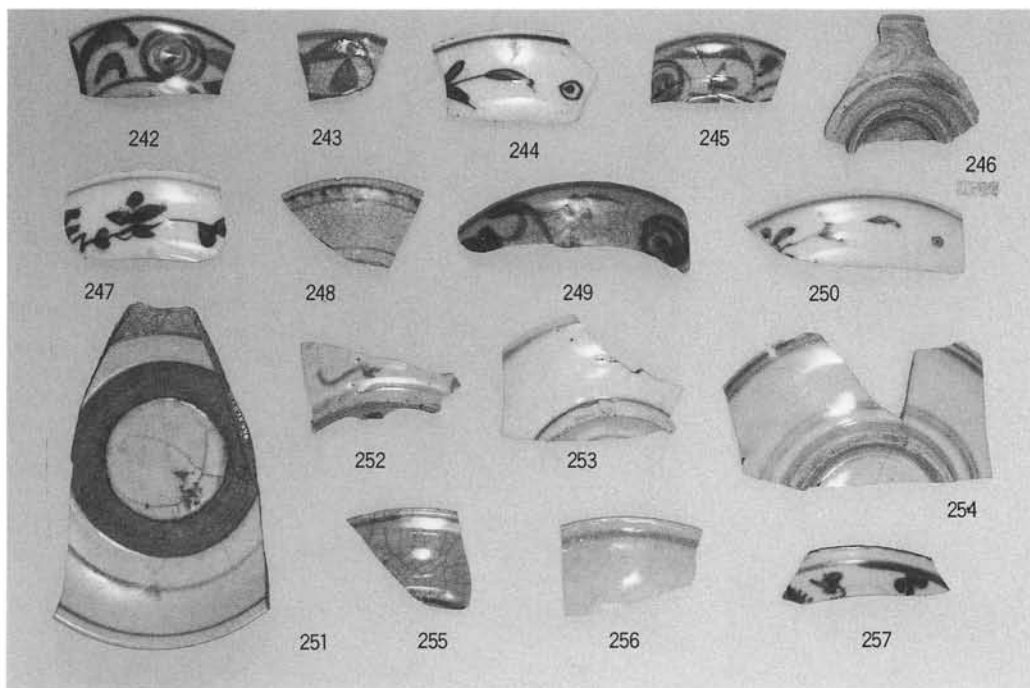
青磁 1 (内面)



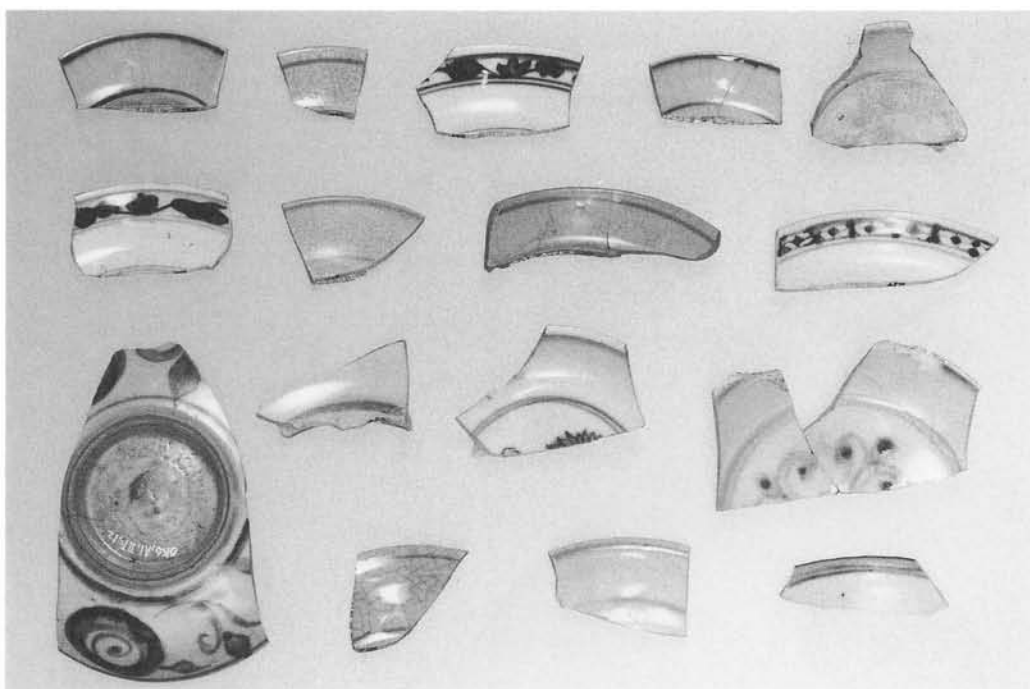
白磁1 (外面)



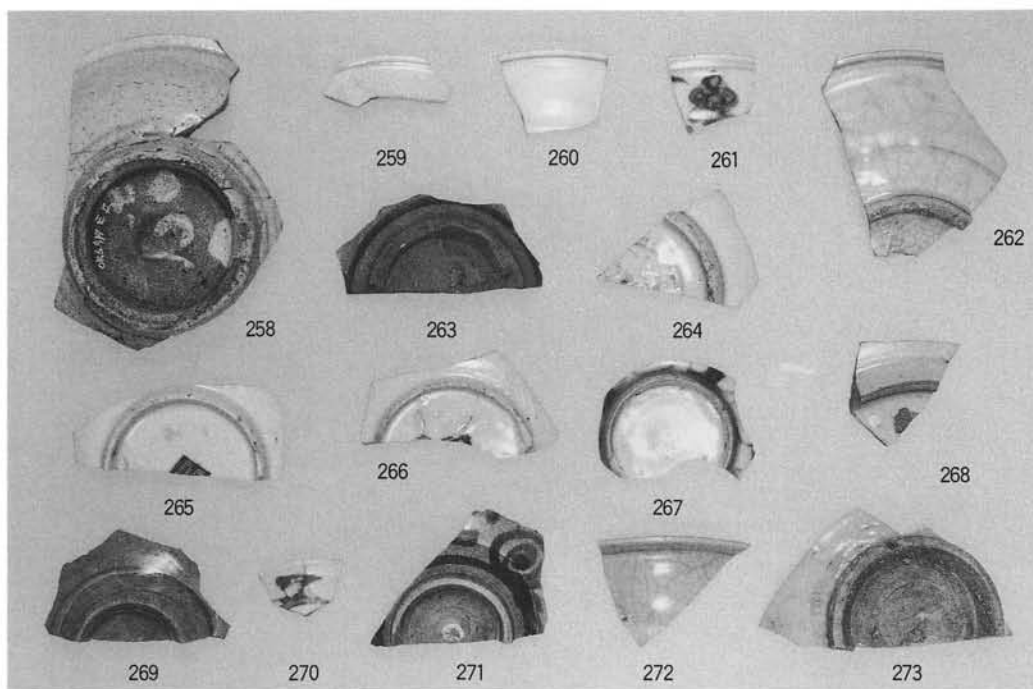
白磁1 (内面)



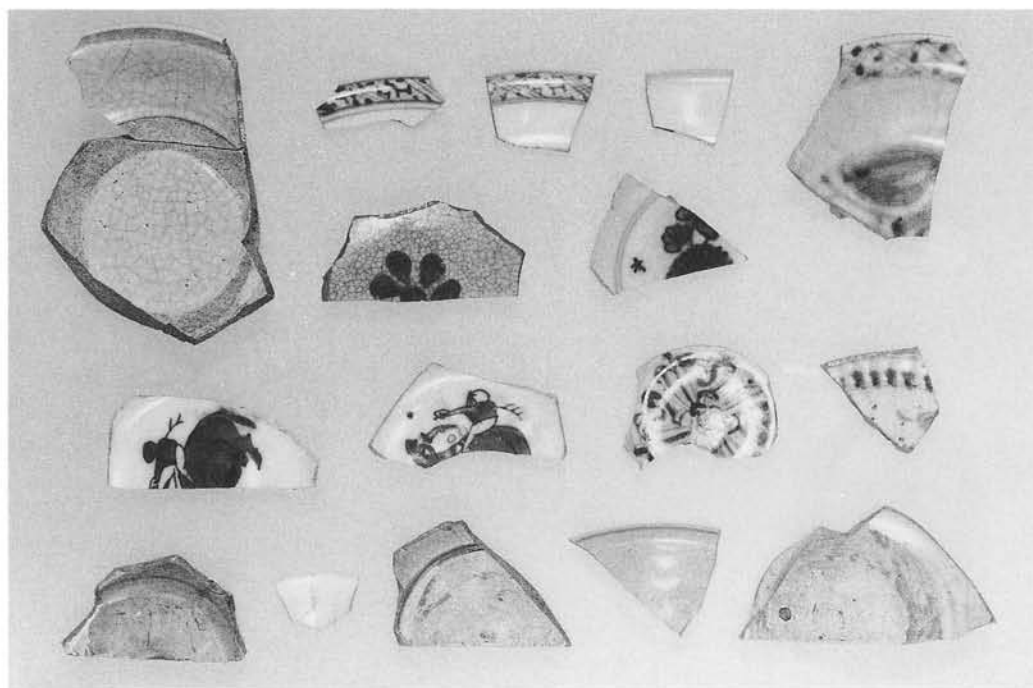
染付1 (外面)



染付1 (内面)

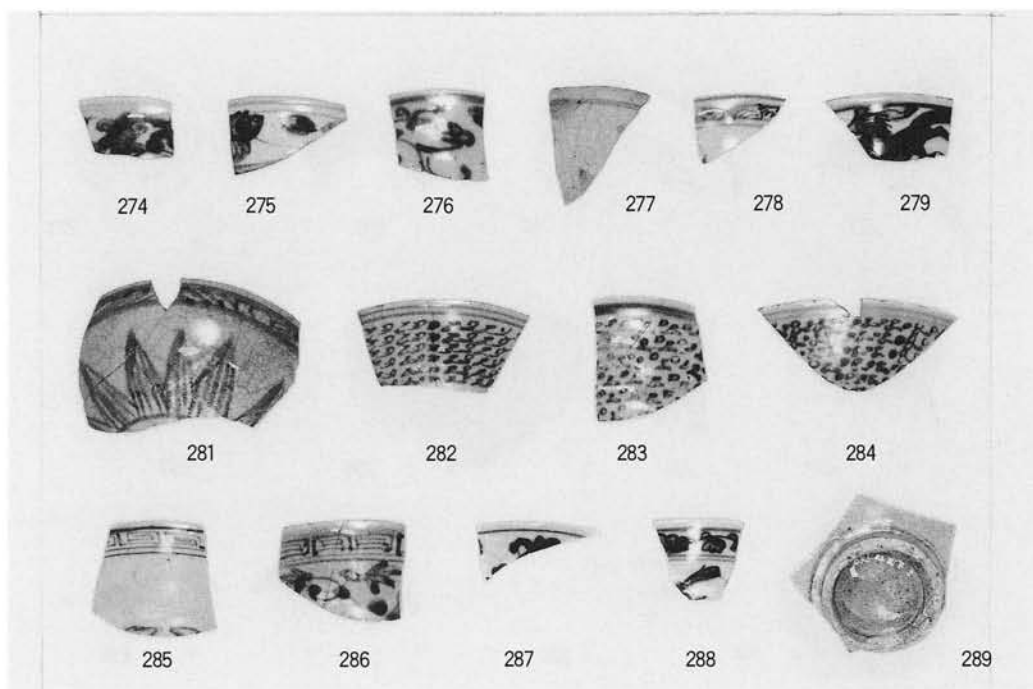


染付 2 (外面)

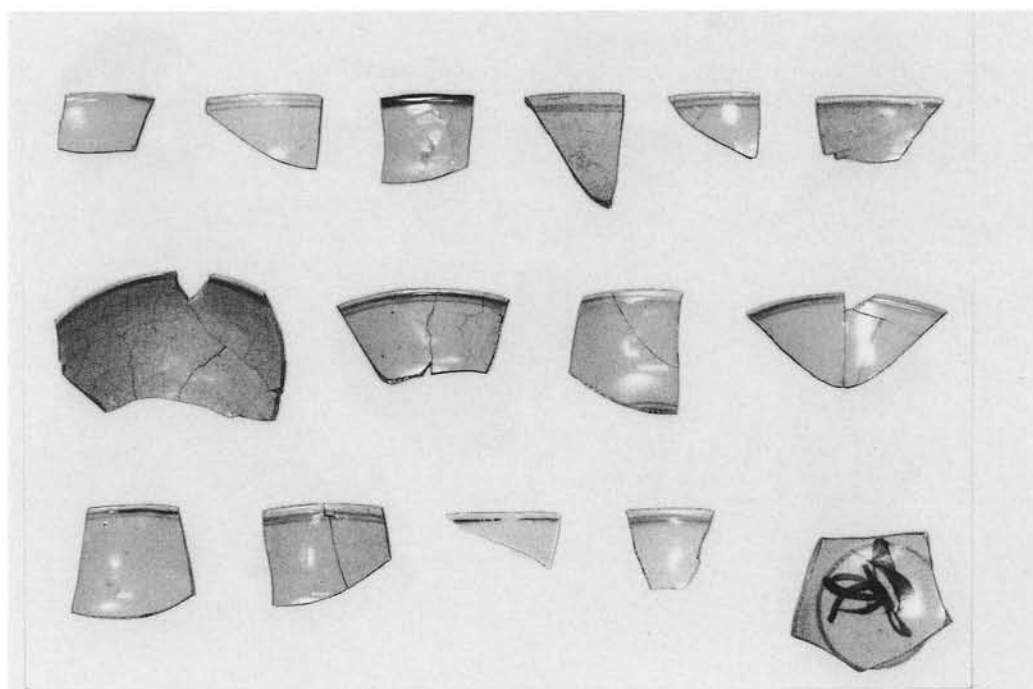


染付 2 (内面)

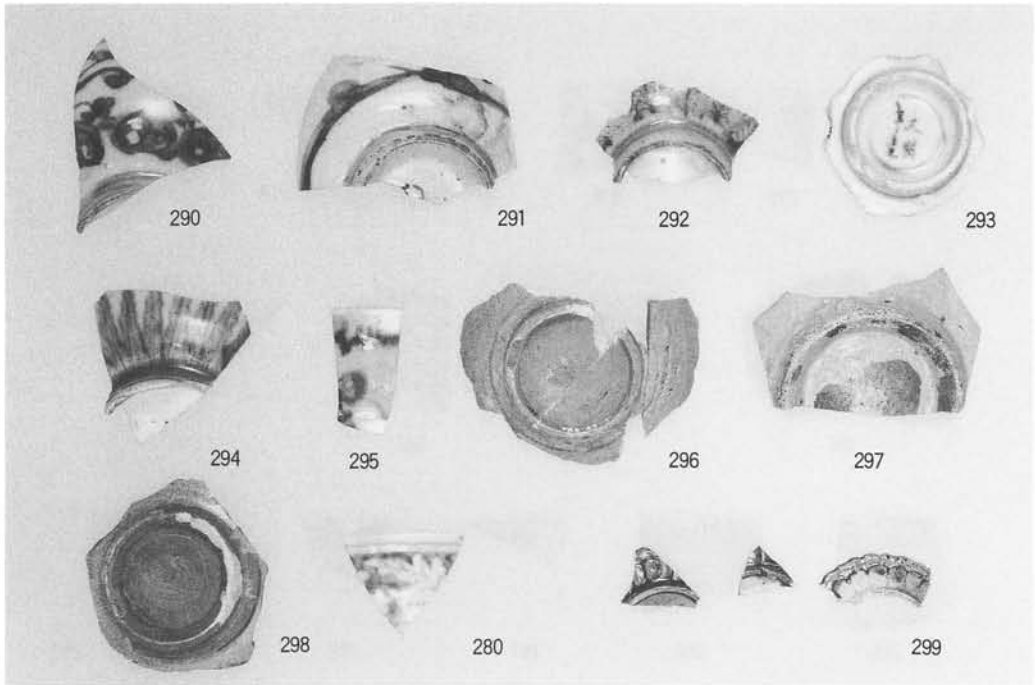




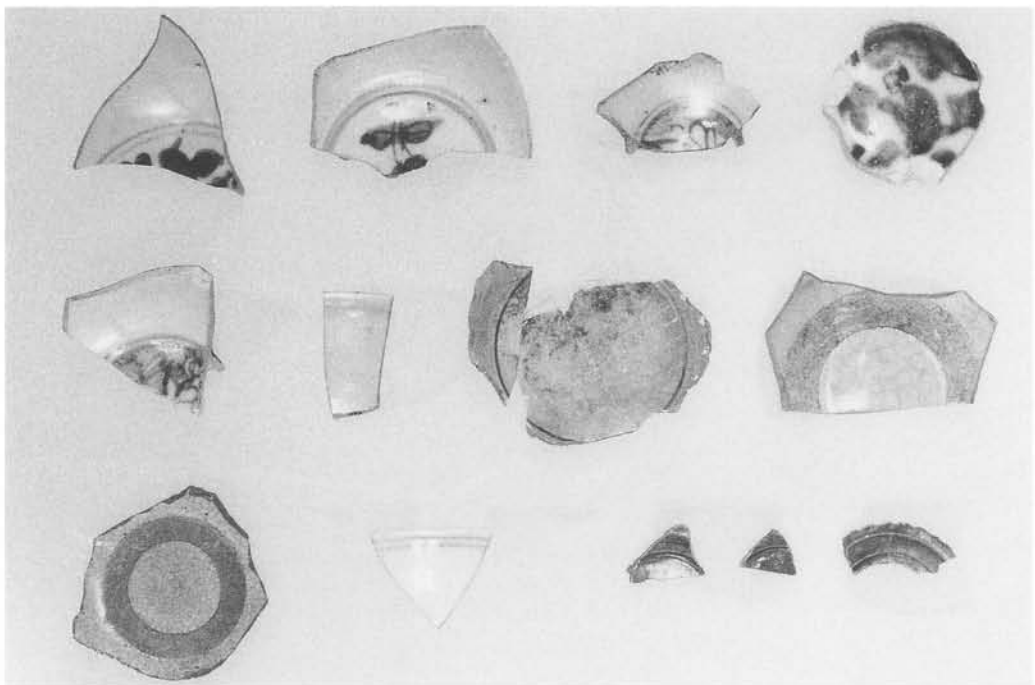
染付 3 (外面)



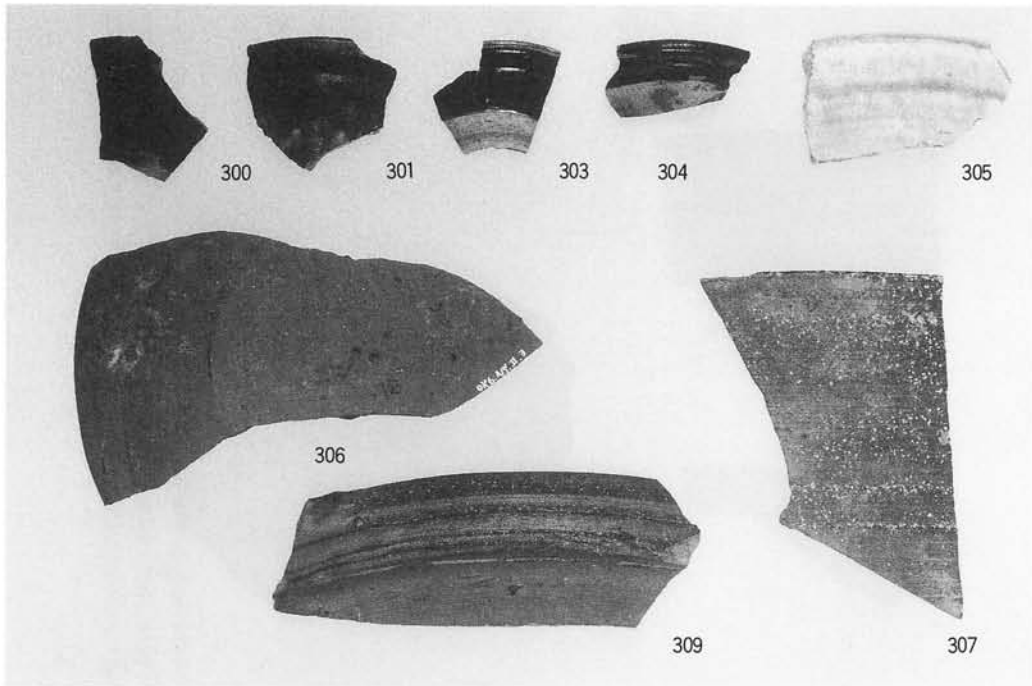
染付 3 (内面)



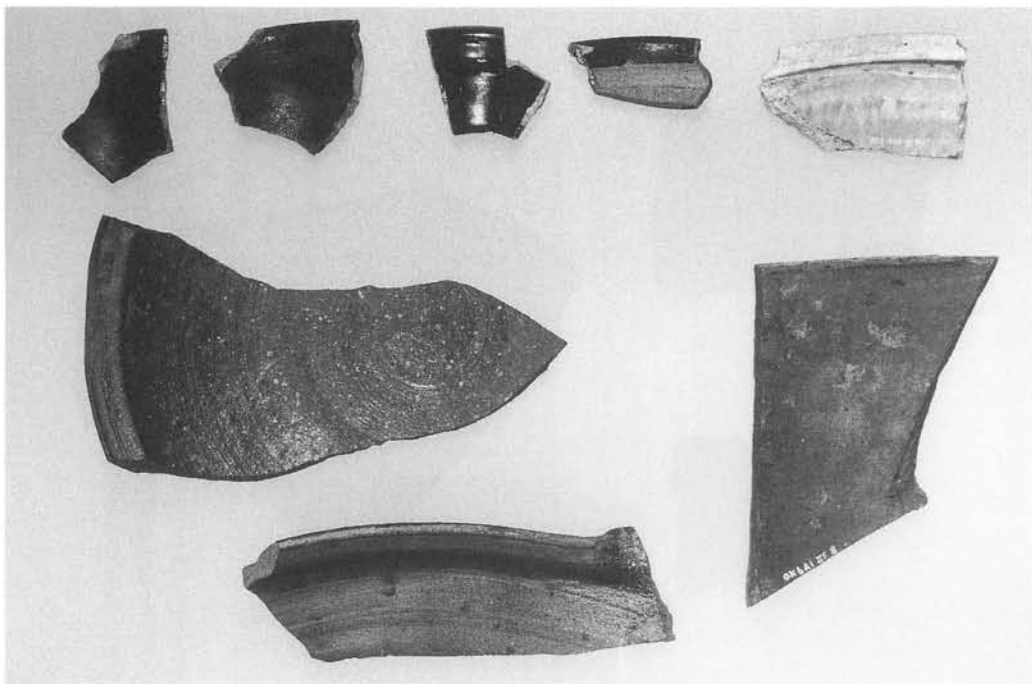
染付4・施釉陶器（外面）



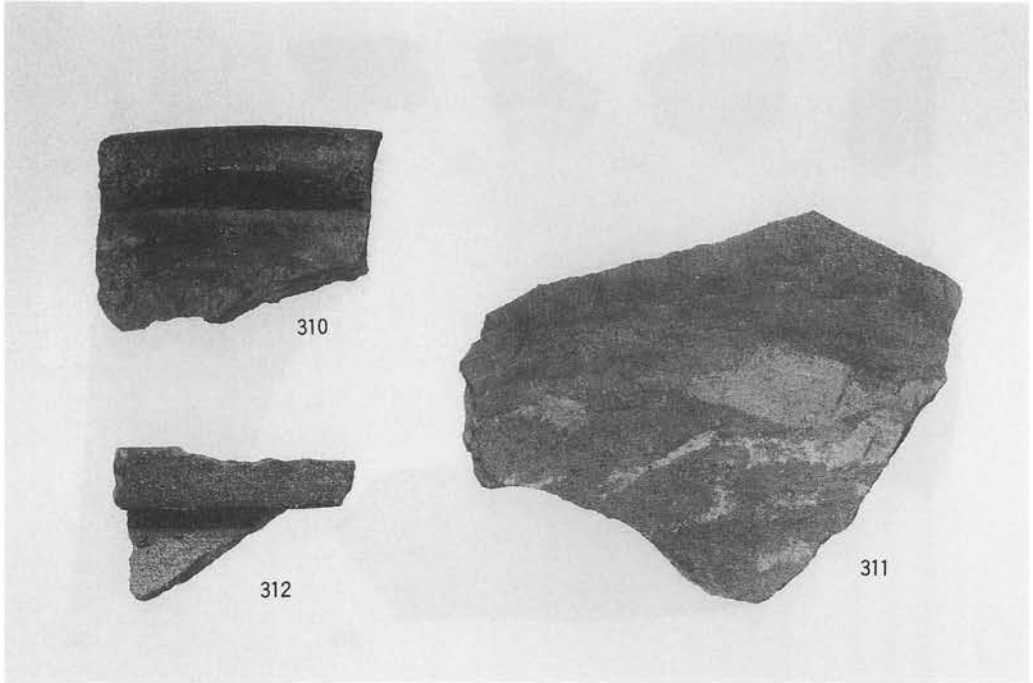
染付4・施釉陶器（内面）



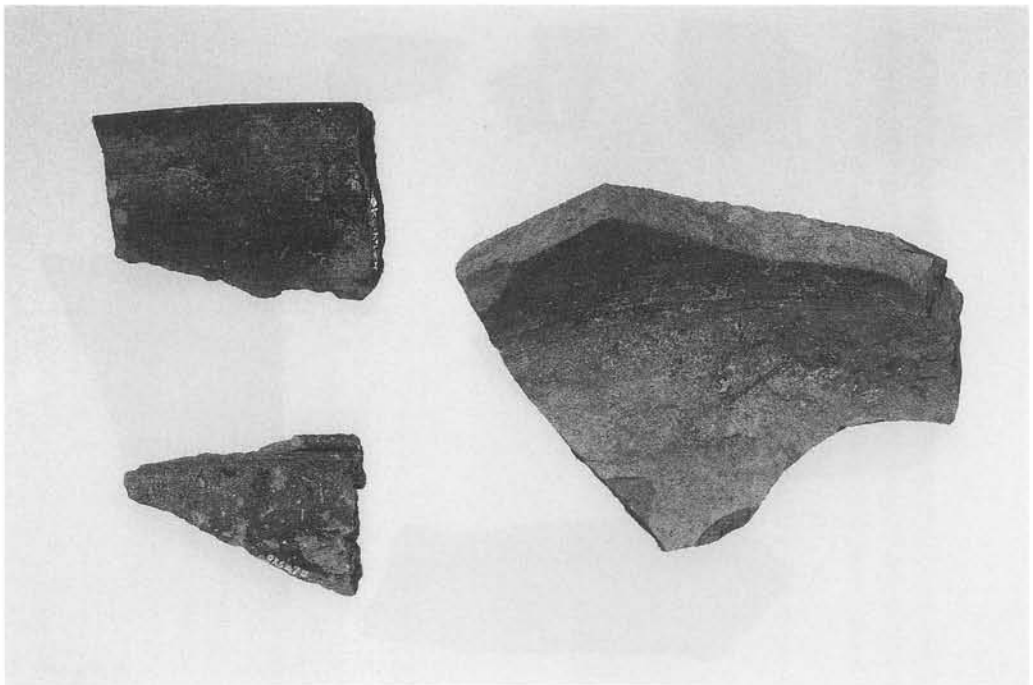
天目茶碗・瀬戸、美濃系皿・備前（外面）



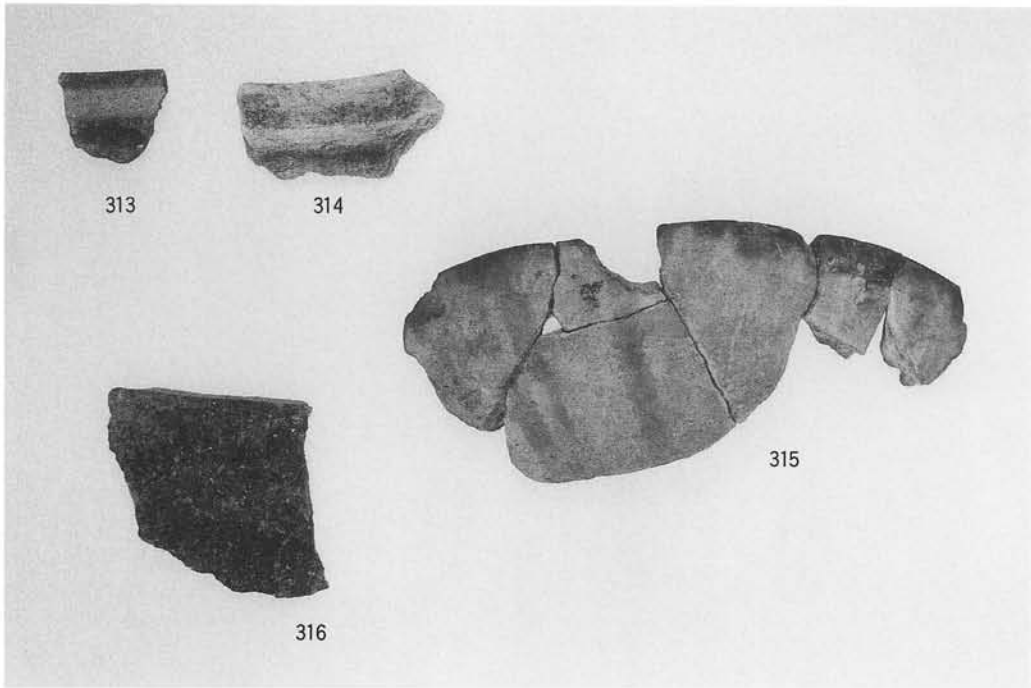
天目茶碗・瀬戸、美濃系皿・備前（内面）



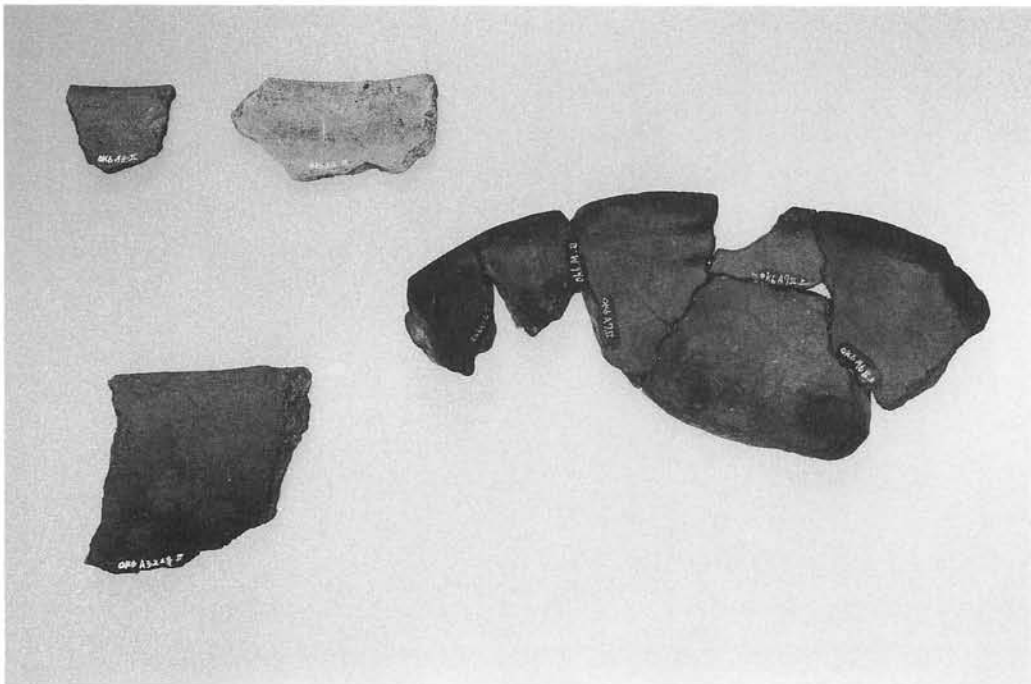
備前・常滑（外面）



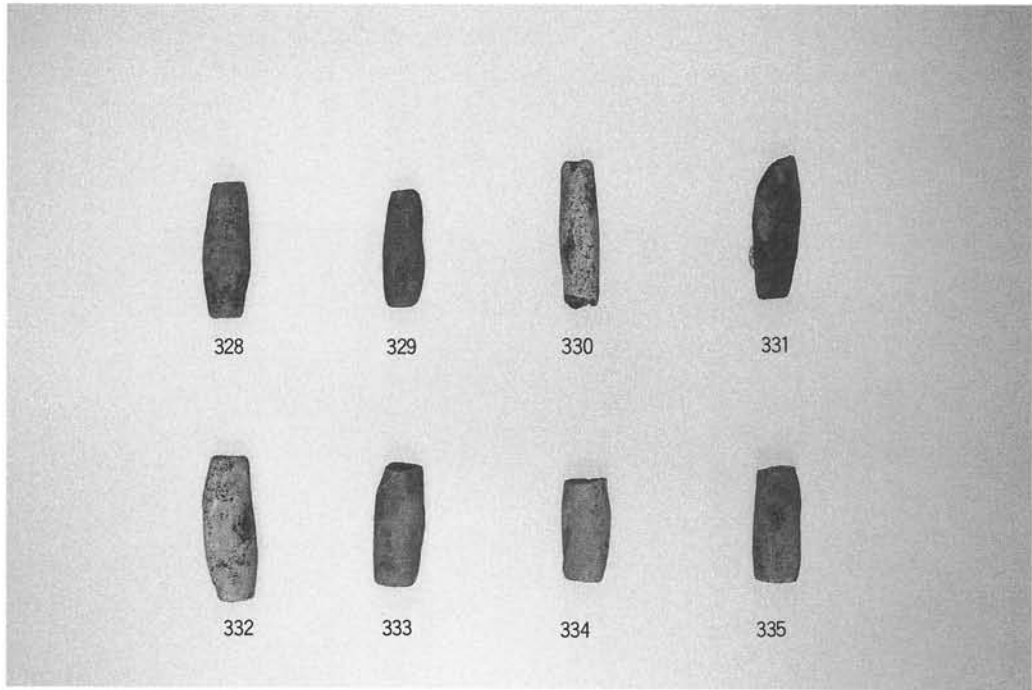
備前・常滑（内面）



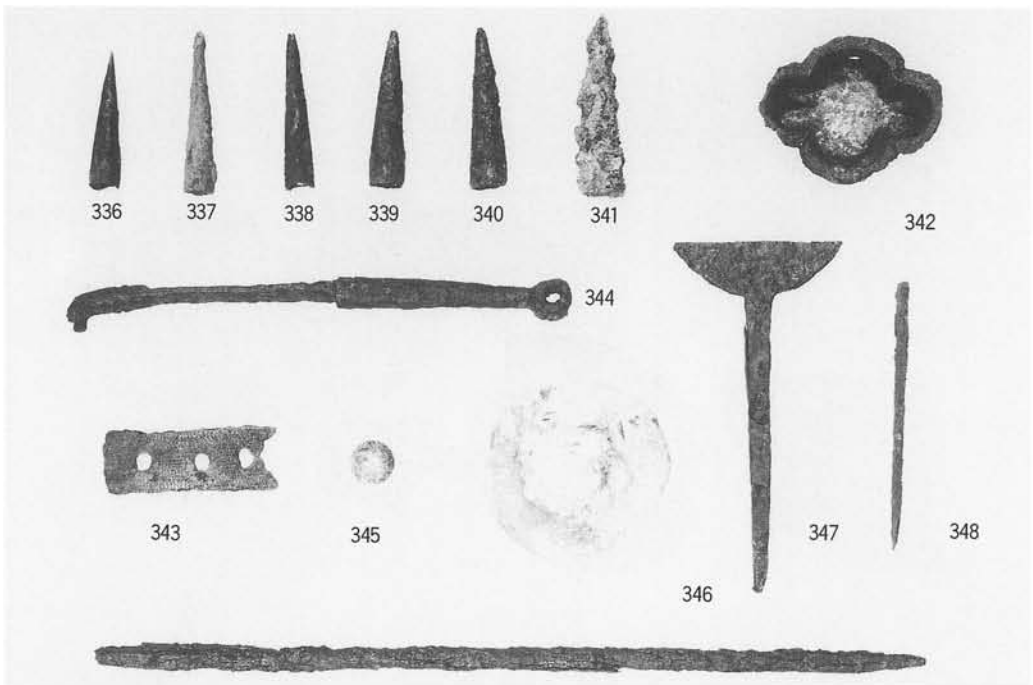
土師質土器 鍋・鉢（外面）



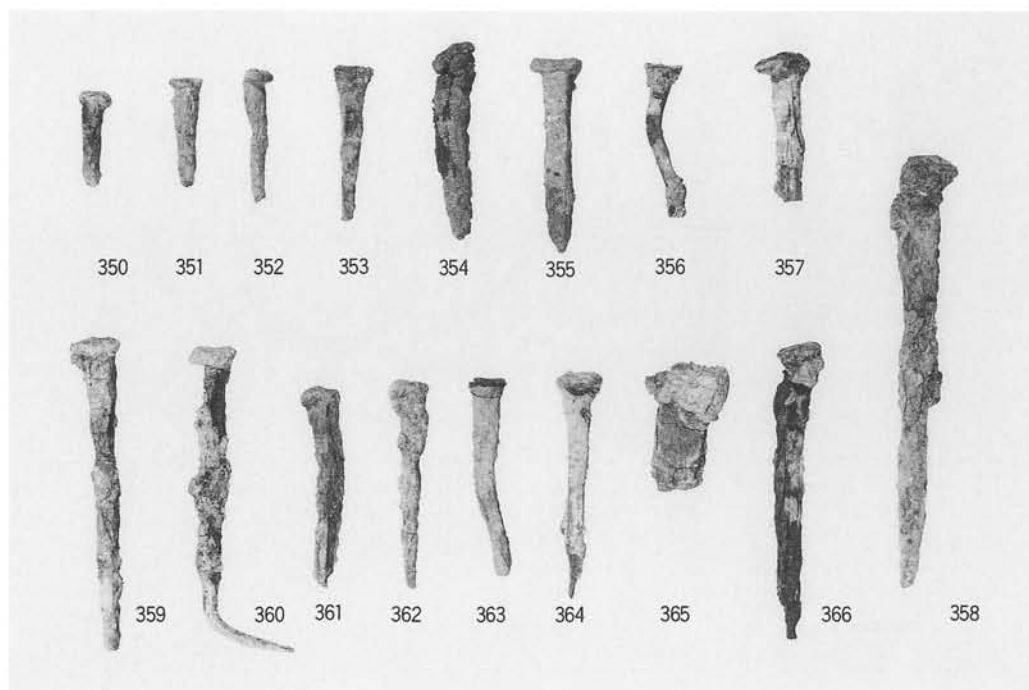
土師質土器 鍋・鉢（内面）



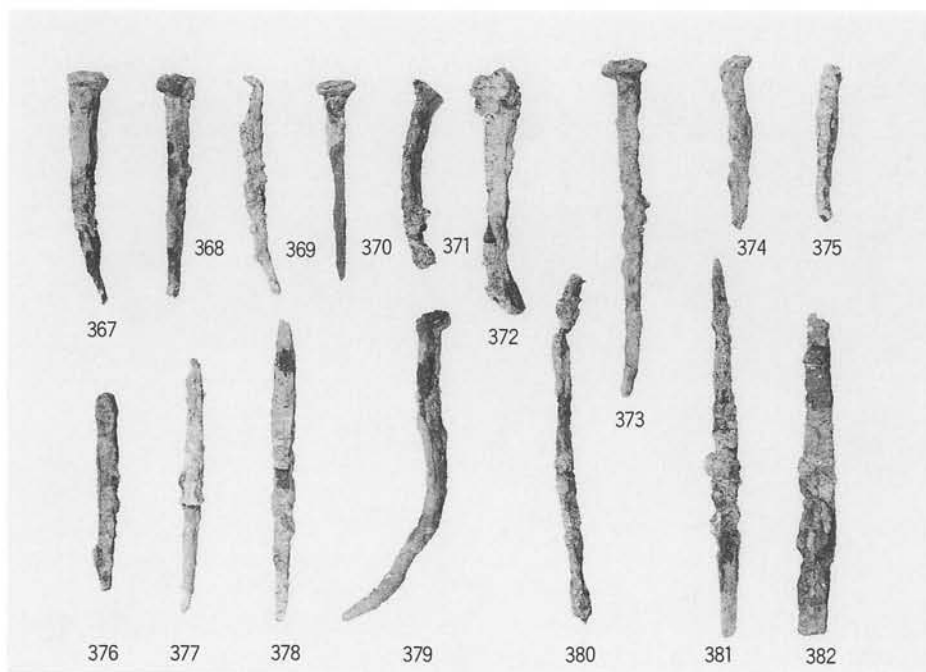
土 錘



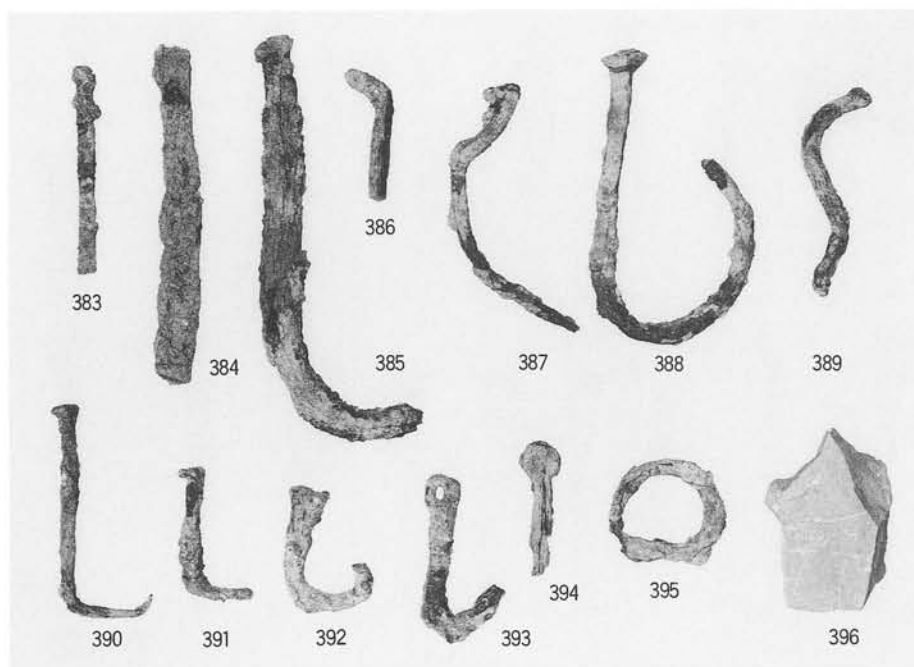
金屬製品 1



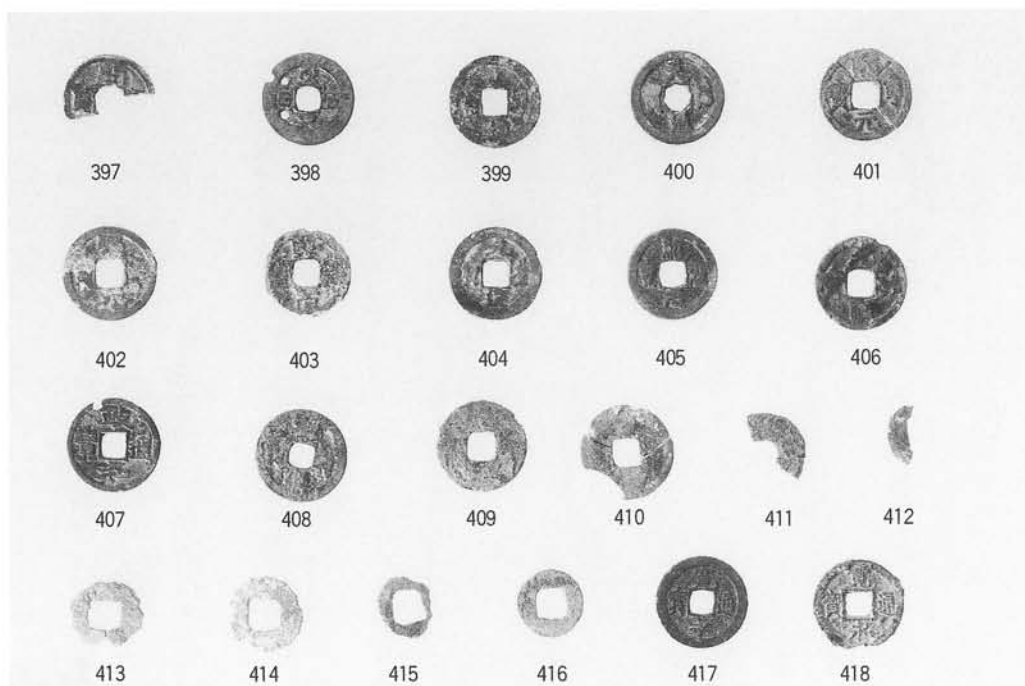
金属製品 2



金属製品 3

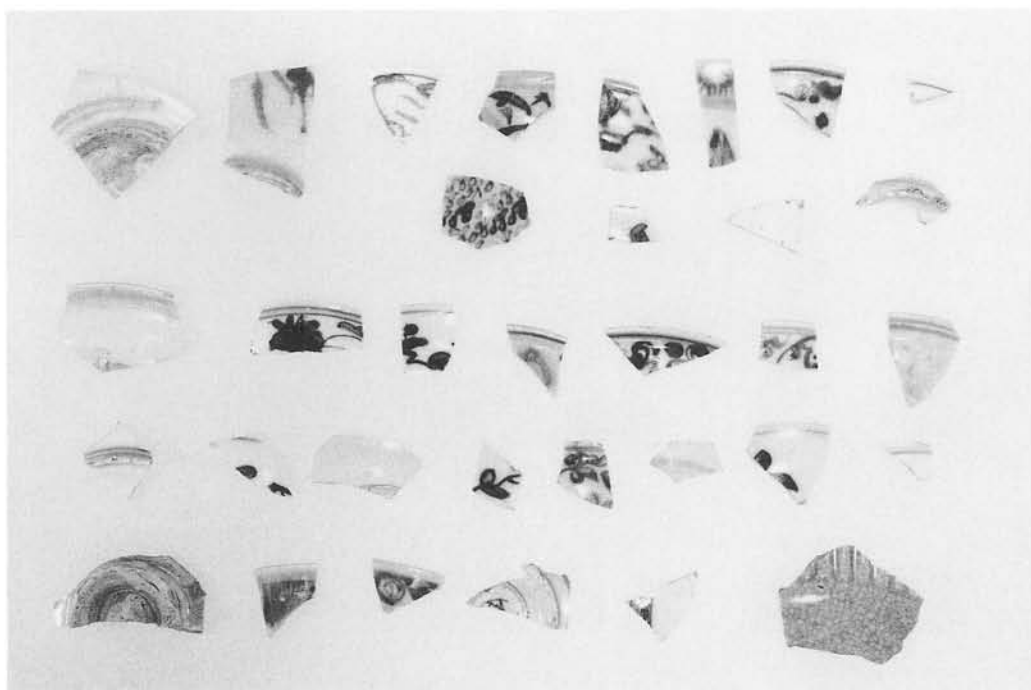


金屬製品 4

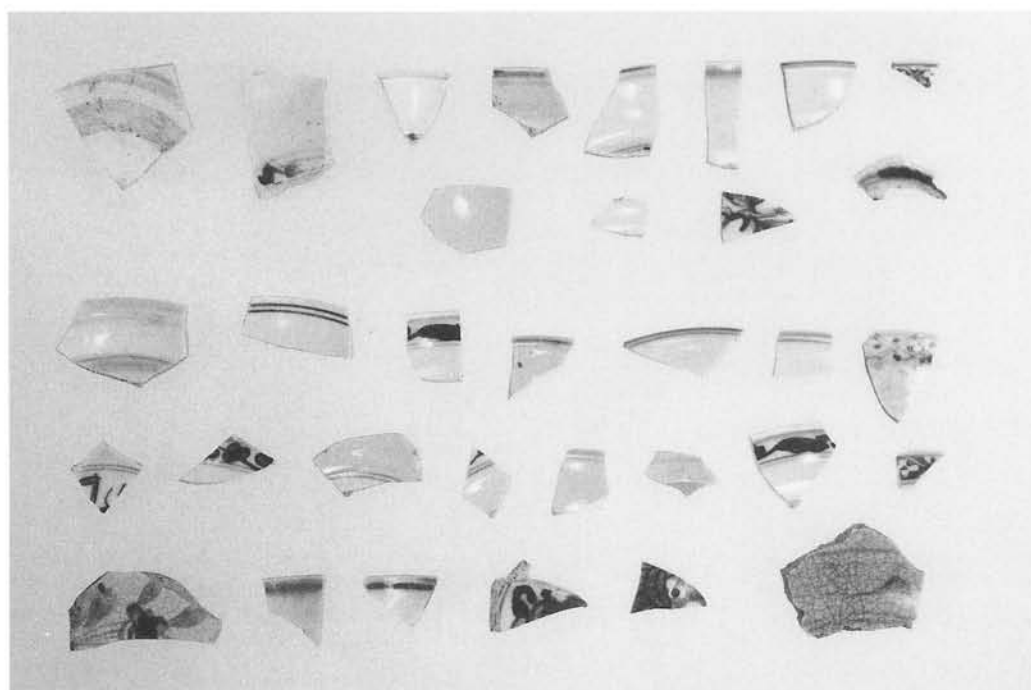


出土錢

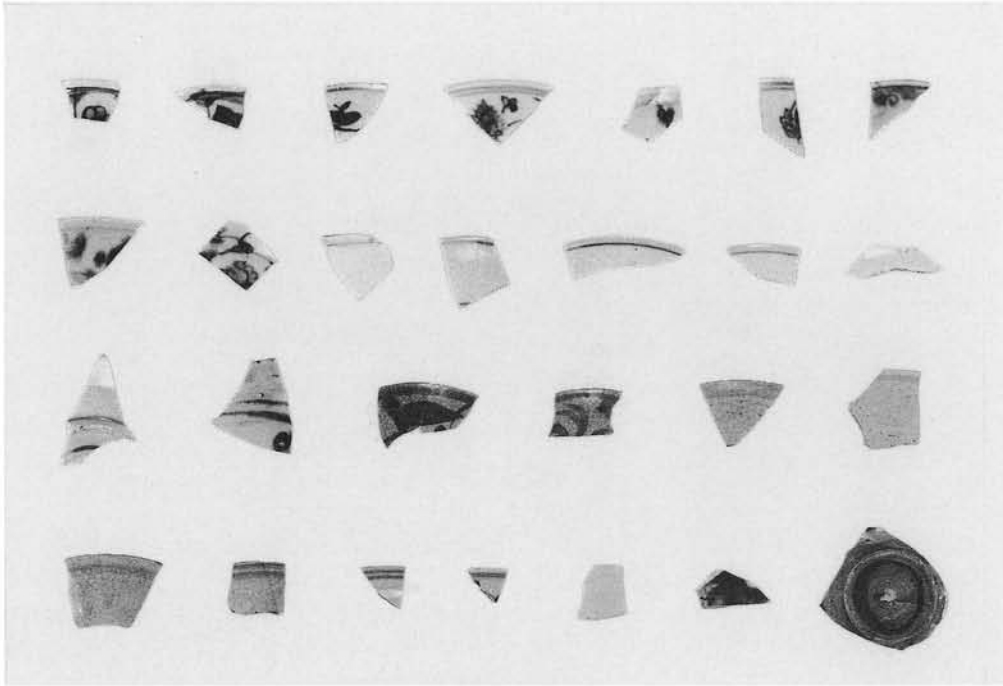




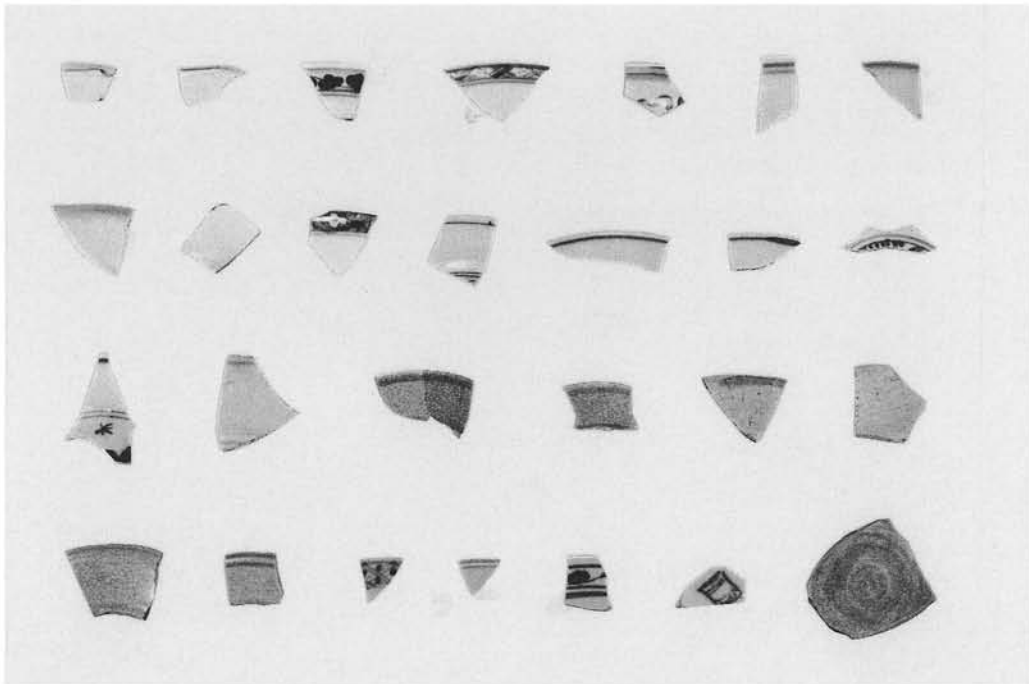
染付5 (外面)



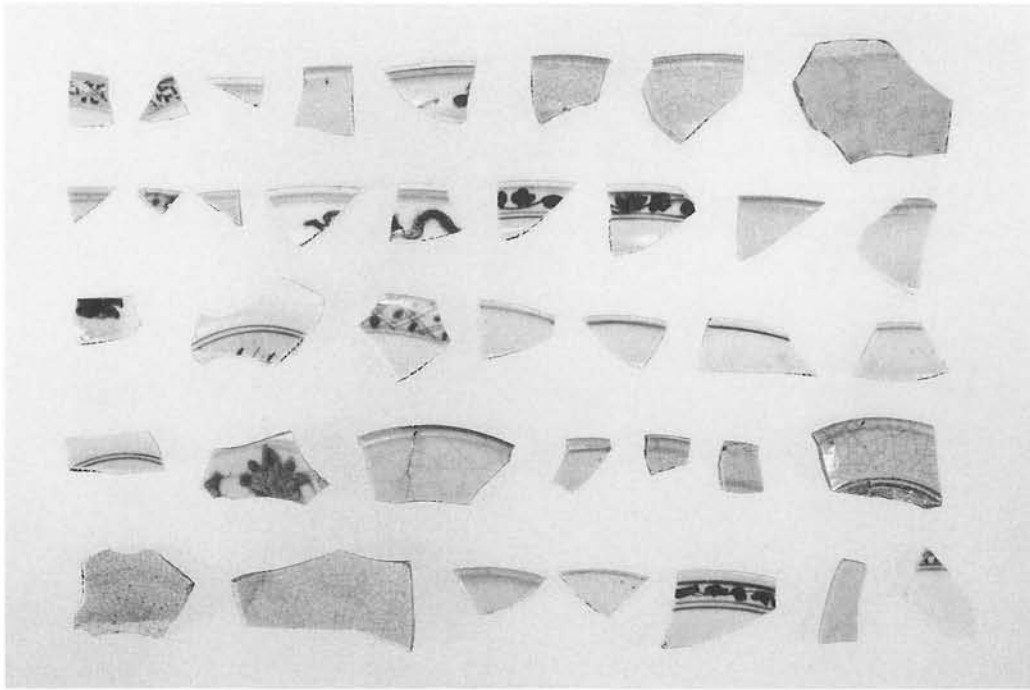
染付5 (内面)



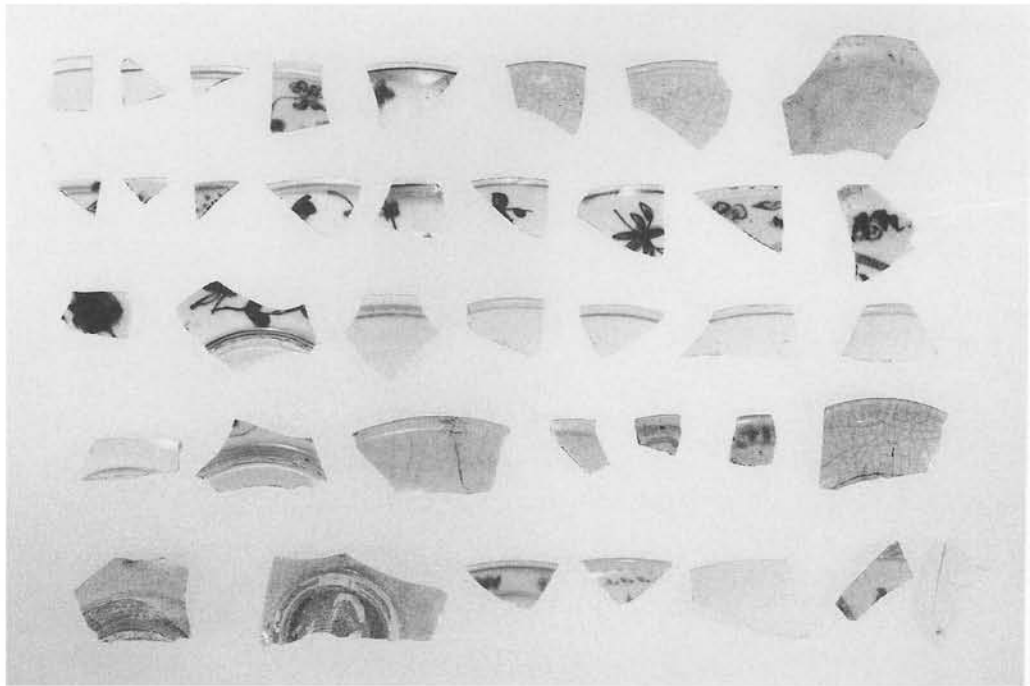
染付6 (外面)



染付6 (内面)

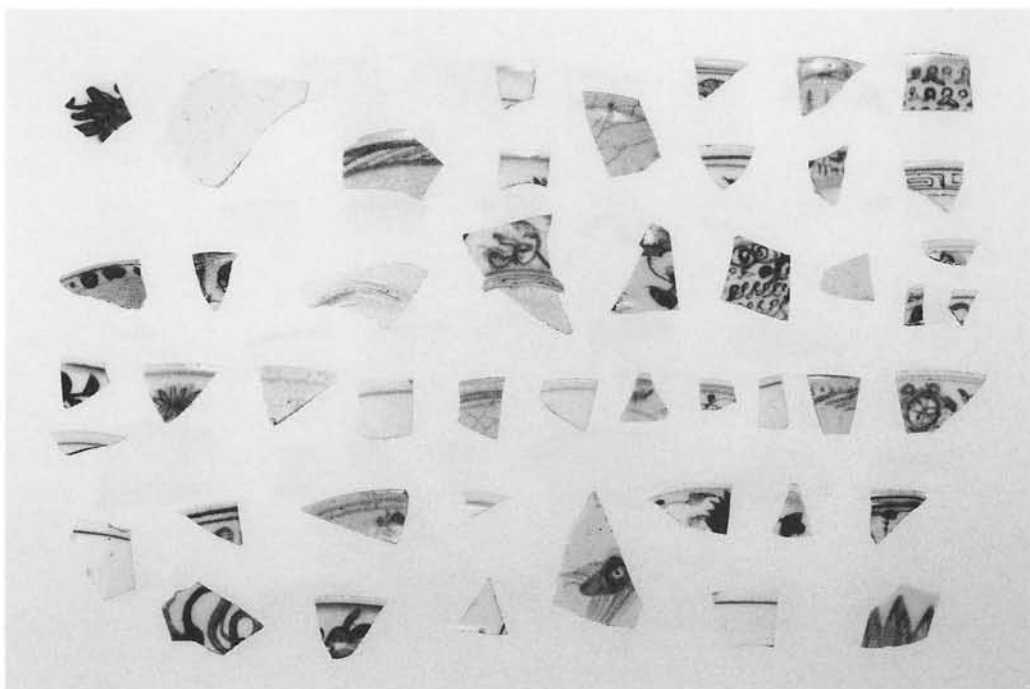


染付7 (外面)

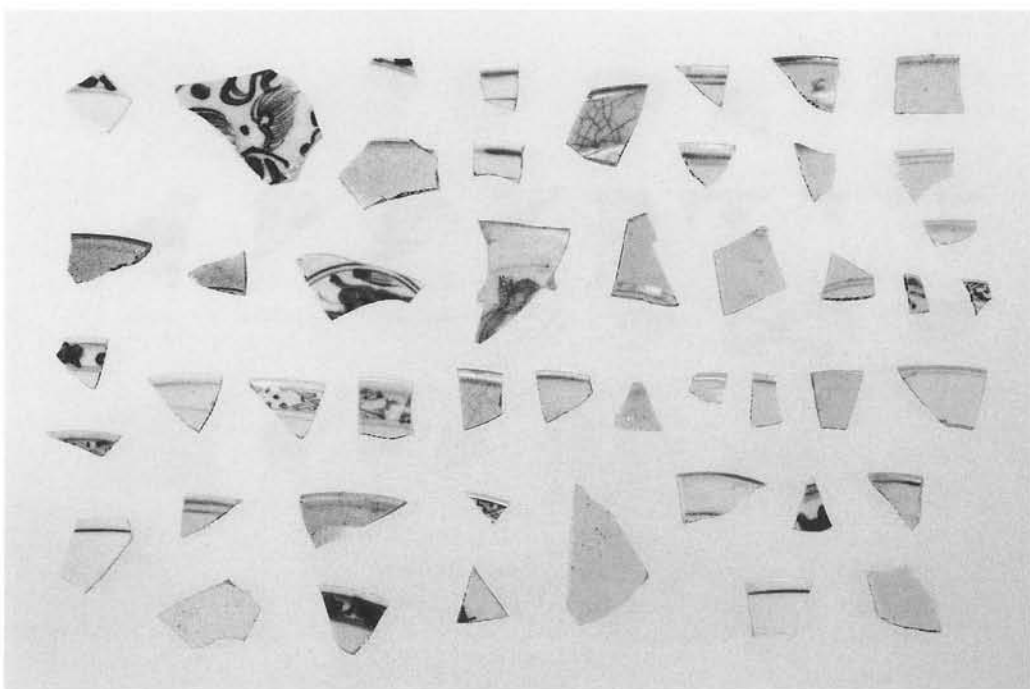


染付7 (内面)

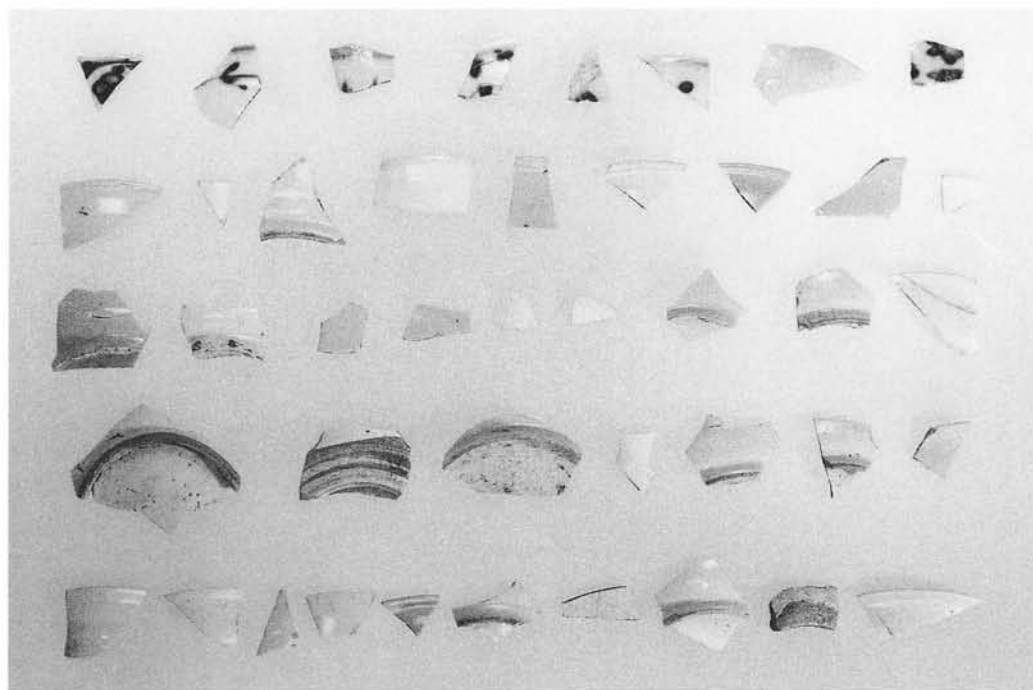
PL. 44



染付 8 (外面)



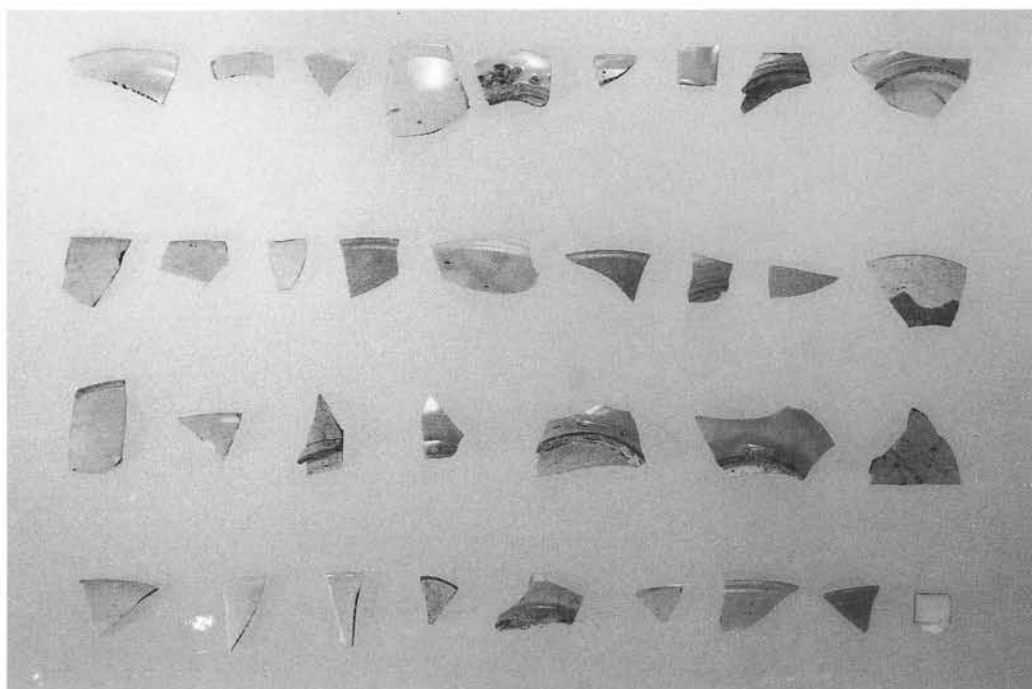
染付 8 (内面)



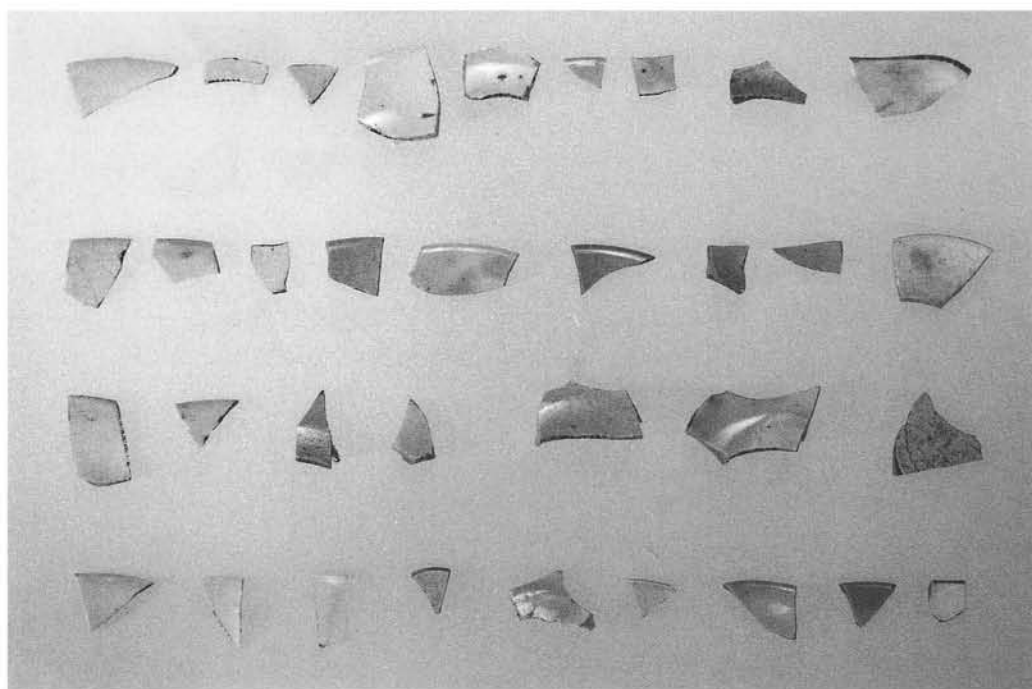
染付 9・白磁 2 (外面)



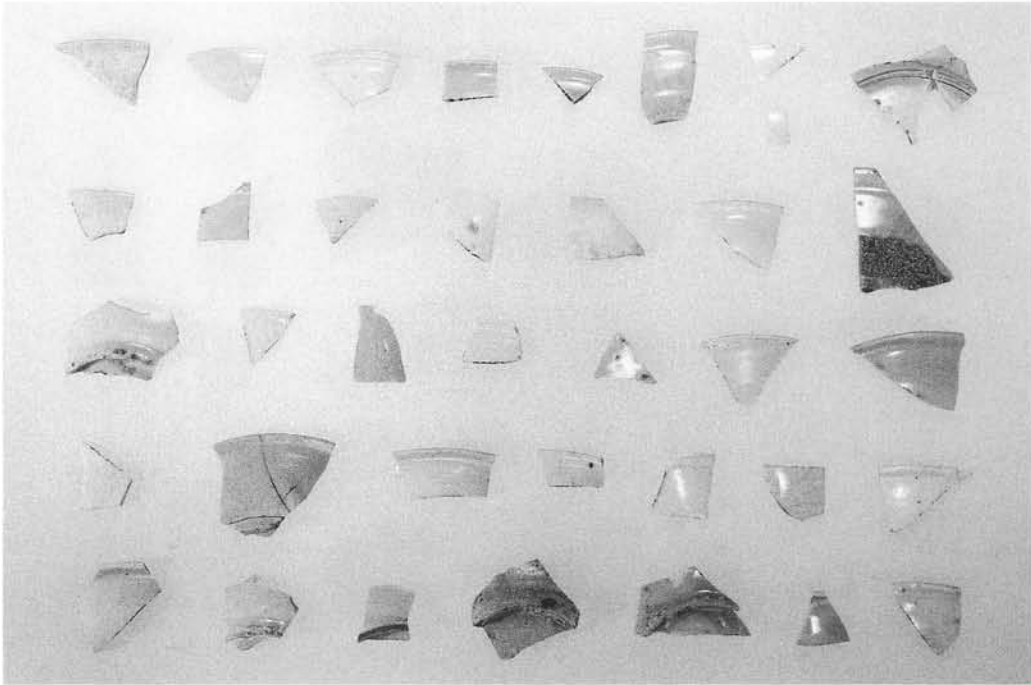
染付 9・白磁 2 (内面)



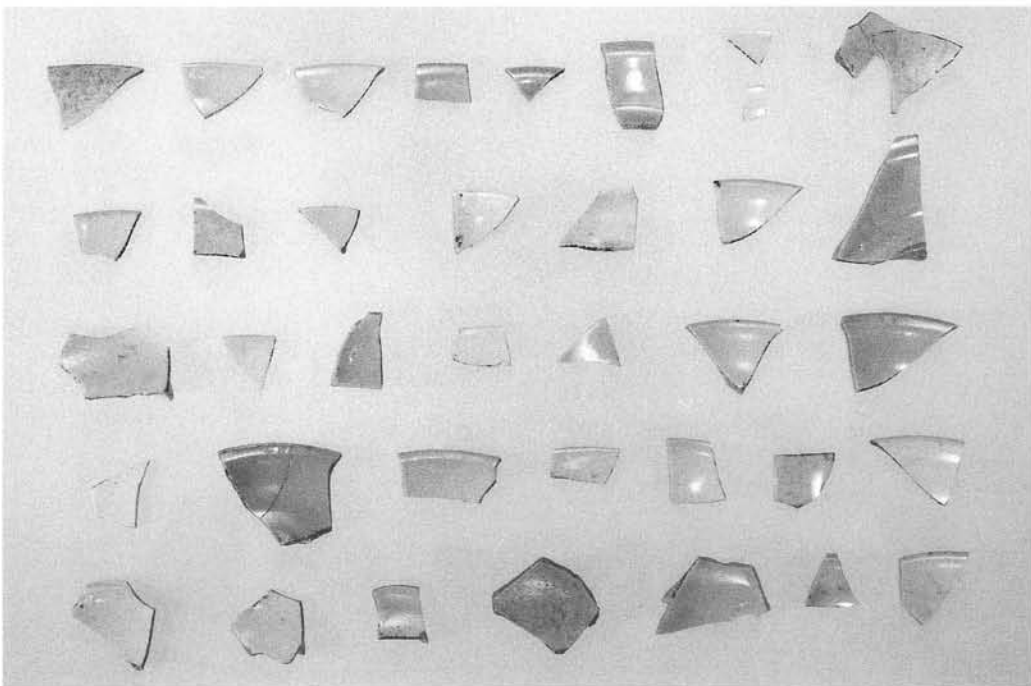
白磁 3 (外面)



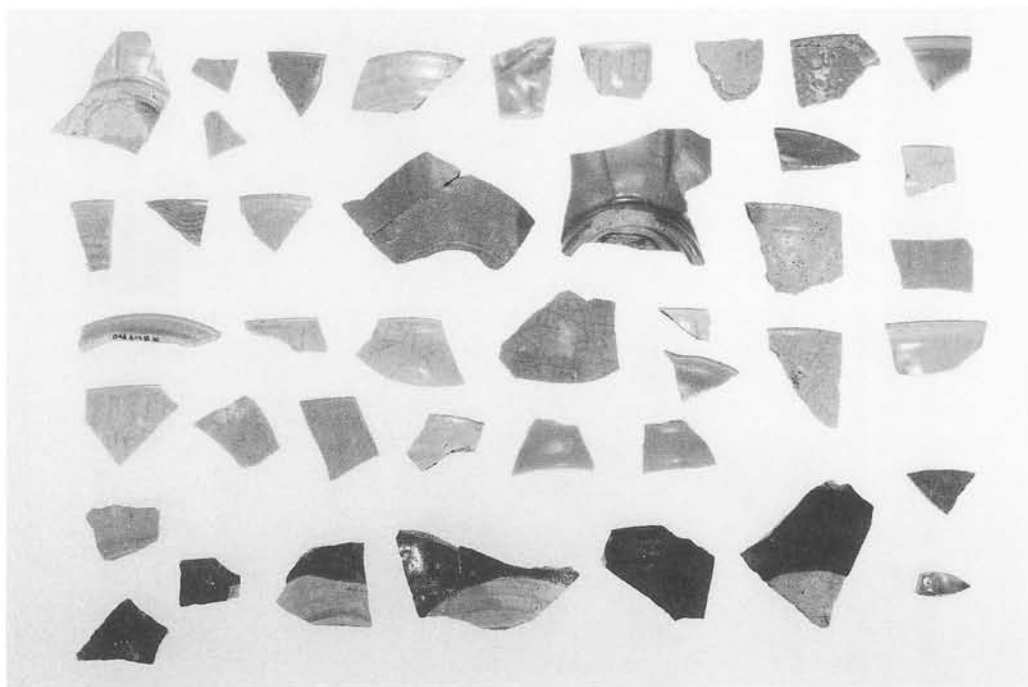
白磁 3 (内面)



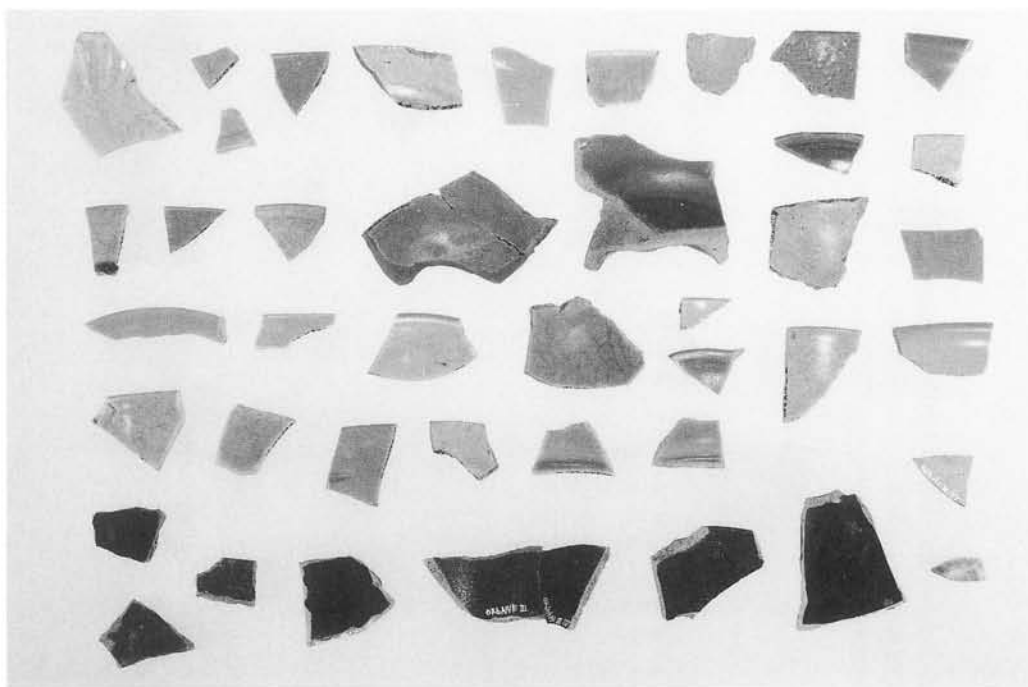
白磁 4 (外面)



白磁 4 (内面)

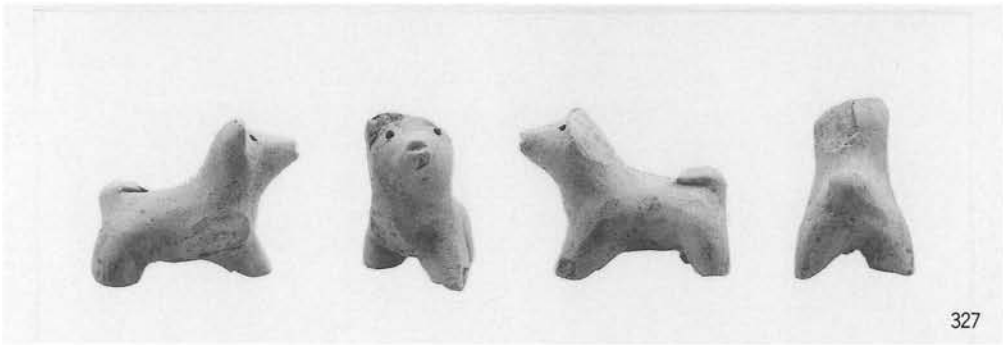
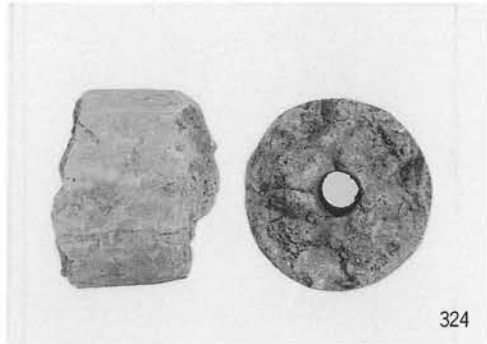
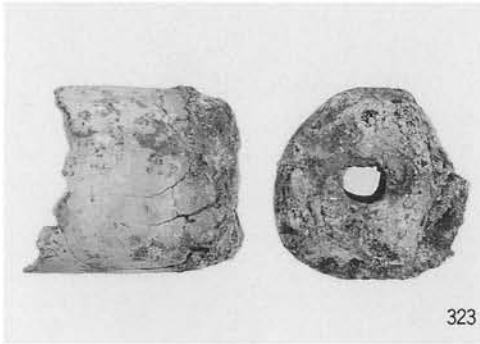


青磁 2・天目茶碗（外面）



青磁 2・天目茶碗（内面）





羽口・土製犬

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第6集

## 岡 豊 城 跡 II

—第6次発掘調査報告書—

1992.3

発 行 高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原南泉1437-1  
TEL 0888-64-0671

印 刷 有限会社 四国写植  
高知市針木東町21-18  
TEL 0888-44-6022